

阪大 —地域に生き世界に伸びる— NOW

80th 原点へ
ANNIVERSARY
未来へ
2011
OSAKA UNIVERSITY



6

OSAKA UNIVERSITY 2010/No.118



トピックス

第5回ホームカミングデイ開催

クローズアップ

知財立国を支える人材育成の拠点へ
知的財産センター(IPrism)設立

2010 6月号 No. 118

目次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
ナウススペシャル	22
キャンパスニュース	24
記念講義	46
表彰等	55
人事	63
訃報	67
インフォメーション	71
海外拠点だより	76
交流協定大学	78
クラブ&サークル	79
トピックス	80



表紙写真

神庭の滝（岡山県真庭市）周辺に生息するニホンザル集団の調査研究風景

1958年に、岡山県真庭市（旧・勝山町）の神庭の滝周辺に生息するニホンザル集団の研究が始まった。それから半世紀にわたり、サル顔の覚え、名前をつけて、誰と誰が何をしたかということ記録し続けている。サルたちの母系血縁関係も途切れることなく記録されている。母ザルの子育て、子ザルの行動発達、おとな同士の関係など、サル行動と社会を理解することが、ヒトの本姓の理解にも結びつくはずである。（写真左下、11歳の姉から9歳の妹への毛づくろい、写真右下：祖母（15歳）、母（7歳）、孫（0歳）の3世代。）

（人間科学研究科行動生態学講座比較行動学研究分野）

表紙デザイン：株式会社ココティエ

第5回 ホームカミングデイ開催

5月1日（土）、いちよう祭の開催に合わせ、豊中キャンパスにおいて、第5回ホームカミングデイを開催いたしました。

当日は天候にも恵まれ、卒業生とご家族やご友人など315名の方々がキャンパスを訪れました。

会場である共通教育本館（イ号館）入口では、ご来場いただく諸先輩や来賓の皆様を応援団員が笑顔で出迎え、歓迎ムードが漂う中、セレモニーが始まりました。

高杉英一理事・副学長の司会で、応援団による学生歌演奏、演舞により開幕し、特に大阪高等学校全寮歌の雄大な演舞では大きな拍手が起こりました。





大阪大学ホームカミングデイ

OSAKA UNIVERSITY HOMECOMING DAY

主催：大阪大学 協賛：大阪大学同窓会連合会 後援：財団法人大阪大学後援会



鷲田清一総長の主催者挨拶、熊谷信昭同窓会連合会会長（元総長）の挨拶に続き、本年は、卒業生講演として法学部卒業生の株式会社三井住友銀行顧問の西川善文（にしかわよしふみ）氏による講演が行われ、学生時代の思い出や住友銀行入行後の様々な経験をお話いただくとともに、現在の学生に対しては、元気を出して物事にあたってほしいとエールを贈られました。

その後、場所を図書館下食堂に移しての懇談会は、同じく高杉理事・副学長の司会により、医学部卒業生の青野敏博氏（前徳島大学学長）による乾杯のご発声で開会しました。

会場では、学生軽音楽サークル「SWING」の軽快な音楽をBGMに、参加された方々の思い出話にも大いに花が咲き、会場内では旧交が温められ、終始和やかな雰囲気の中での散会となりました。



ご来場いただいた方々の中には、引き続き、ご卒業された学部同窓会のイベントやいちょう祭のイベントに参加される方や、緒方洪庵生誕200周年記念・本学創立80周年記念プレイベント「総合学術博物館企画展・適塾特別展示“ミュージアムレクチャー”」に参加される方もおられ、母校で一日を過ごされる姿が多くみられました。

（企画部広報・社会学連携事務室）

知財立国を支える人材育成の拠点へ 知的財産センター（IPrism）設立

IPrism

知的財産センター長 青 江 秀 史

平成22年4月1日、総合的知的財産教育事業の推進を図るため、本学に知的財産センター（略称IPrism）が設立されました。そこで、今回紙面をいただき、知的財産センター設立の目的と今後の活動計画及び組織の概要についてご紹介させていただきます。また、4月12日に開催されました当センター開設記念講演会につきましてもご報告させていただきます。

■設立の目的：知的財産を戦略的に活用できる 人材育成

平成15年、我が国を「知的財産立国」へと変貌させるため政府内に知的財産戦略本部が設置されました。我が国において知財戦略は今や重要な国家戦略・国際戦略と位置づけられ、知的財産を生み出す技術、人、そして、それを活用した産業の育成は、今後の我が国のあり方を決定付けるといっても過言ではないでしょう。この国家的な取り組みを成功に導くためには、日々生み出される知的財産を戦略的に活用・発展させることのできる人材の育成を、これまで以上に推し進めることが急務だと考えられます。知的財産は知的財産「権」として保護されることにより格段に活用の幅が広がり、戦略的なスキームを構築することが可能となります。それゆえ、知的財産を生み出す段階から知的財産「権」を見据え、生み出された知的財産を如何に権利化し、権利化された知的財産をどのような形で活用していくのか、これらを一連の流れとして見通すことのできる人材の育成が求められます。このような視野をもった人材に必要なのは、知的財産法制に関する基礎的な知識・知的財産マインドです。この知的財産マインドを有した者が、それぞれの専門分野で研究活動を行えば、これまで以上に戦略的な知的財産活用が行えることになりまし、より高度な知的財産法に関する知識の習得を目指すことも可能となります。そして、大学を卒業し社会に出ても、知的財産に関する知識を有していることは、活動フィールドを広げることにつながるでしょう。知的財産戦略が重要性を増した現在、一部の分野の一部の学生だけが知的財産法を学ぶのではなく、すべての専門領域の学生が、知的財産に関する基礎的な知識とスキルを身につけることが重要であるといえます。

当センターはこのような知的財産マインドを有する人材の育成と高度な知的財産教育の拠点となることを目的として設立されました。

■知的財産センターの行う教育活動

これまで我が国で行われてきた知的財産教育は、各学部・研究科単位に一部の者を対象として実施されてきました。このような中であっても、本学は、いち早く総合大学としての

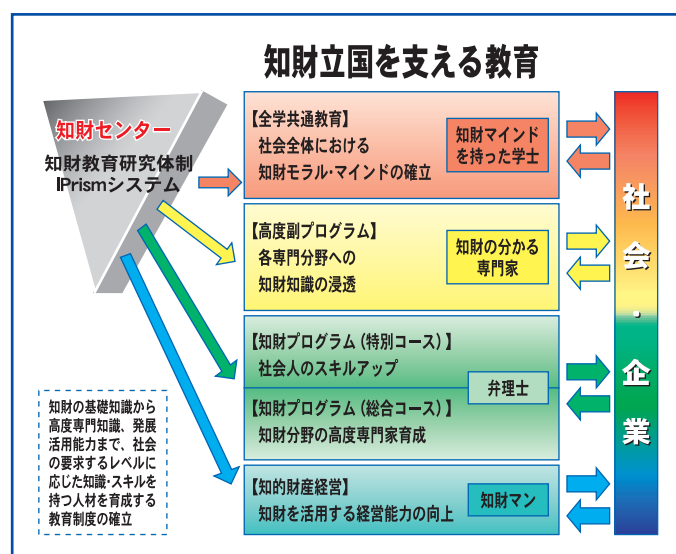


図1：知的財産センター教育支援体制

特質を活かし、文理融合教育や高度副プログラムに取り組み、積極的に学部・研究科の枠を越えた教育研究を実施してきましたが、当センターでは、知的財産教育の重要性を踏まえ、この点をさらに推し進め、我が国初となる知的財産法に関する全学共通教育をはじめとした以下のプログラムを実施いたします。

・全学共通教育

本学の全学部を対象に、知的財産法の入門科目「知的財産モラル」を開講し、社会において重要性を増している知的財産が、人々の活動にどのような影響を与えるかを概観するとともに、知的財産の保護と利用に関するルールなどの知的財産マインドの養成を目指します。この「知的財産モラル」は学部一回生が受講可能なカリキュラムとなります。

・高度副プログラム

本学の各研究科院生を対象に、各自の専門分野において知的財産に関する知識を活用できるようにするために、特許法をはじめとした知的財産法関連科目を提供します。受講生には所定の要件を満たせば、所属する研究科の課程を修了する際に、高度副プログラムの修了認定証が交付されます。

・知的財産経営

本学の各研究科院生を対象に、大学の有する知的財産をマネジメントすることで、新たな知の創造に繋げていくプロセスを学ぶ科目です。知的財産法プログラムでは、応用科目の一つとして実施されます。

・知的財産法プログラム

知的財産法に関する高度な知識を有する専門家を育成するプログラムで、将来、弁理士として活躍したいと考える人や産業界、行政で知的財産に関する実務に携わりたいと考えている人を対象としたプログラムです。本学では既に法学研究科内に「知的財産法プログラム」が設置されていますが、規模を拡充し、これまでの知的財産法プログラムを「総合コース」に改めるとともに、これとは別に、主に社会人や他研究科生を対象とした夜間の「特別コース」を設けます。提供される科目構成は両コースとも同様ですが、特別コースでは配当年次等において違いを設け、社会人や他研究科生でも履修しやすいように配慮をしています。この知的財産法プログラムを所定の単位を取得して課程（標準2年）を修了した者には、弁理士試験の短答式試験一部免除制度が適用されます。

当センターでは、以上のような教育プログラムを提供し、知的財産マインドをもった人材、知的財産法の知識を有する専門家、知的財産法の専門家の育成を目指します。この教育プログラムを実践するためには、専門領域にとらわれない複眼的な視野を盛り込んだ教育カリキュラムの開発が必要となりますが、大学教育実践センターや学際融合教育研究センターにも協力いただき、部局間での積極的な支援・意見交換を行いながら、多様なニーズや改善要求を迅速に反映できるように取り組みたいと考えております。

■IPrismシステム

当センターが実施する全学共通教育をはじめとしたプログラムを効果的に実践するためには、統一された教材としての学習コンテンツを開発することが重要となってきます。そこで、当センターではe-learningシステムを含む学習システムとして「IPrismシステム」の開発を行います。このIPrismシステムは、学習システム、実務連携システムを既存の学内情報システムと連携しながら構築するもので、全学情報基盤システムが提供する学生データ（KOAN）、認証システム、e-learningシステムを利用し、法学系特有の学習コンテンツとしての条文知識確認用学習コンテンツや対話式学習システム「論文用システム」を開発・提供します。また、技術や企業経営と密接不可分に結びつく知的財産法の特性に対応するため、実務連携システムとしての「IPrismコンテンツ」を開発し、明細書の作成をはじめとした弁理士業務や企業知財部の活動を仮想体験できるコンテンツも提供する予定です。さらに、このe-learningシステムの利用も含めた学生の自主的・自立

的な学習活動の場として、本学総合図書館内に設けられた「ラーニング・コモンズ」を積極的に活用し、個人学習やグループ学習の効果向上も図りたいと考えております。

このIPrismシステムは、知的財産マインドの養成から実務的実践的な学習までも包含するもので、これまでの法学系学習用コンテンツとしては例のない総合的体系的なe-learningシステムとなるため、当センターの事業の中においても大きな関心を集めるものとなっております。そのため、このシステムの構築、教材コンテンツ開発に当たっては本学内各部局からの支援・協力が不可欠となるだけでなく、産業界も含めた学外からの知の結集も不可欠となります。これらを支える当センターの組織体制についてご紹介させていただきます。

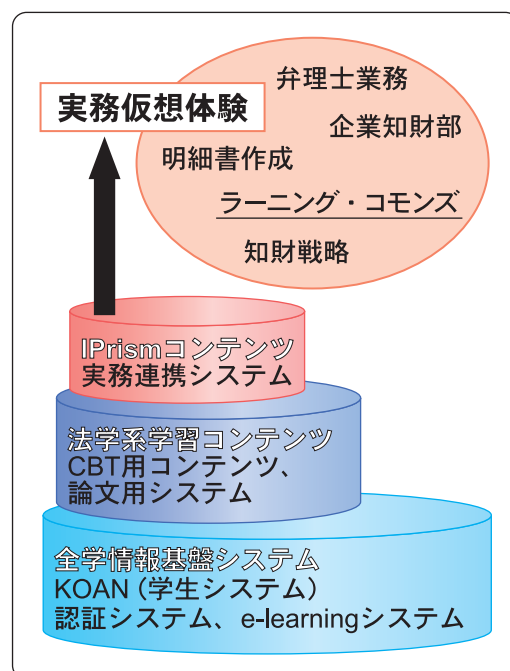


図2：IPrismシステム

■知的財産センターの組織体制

知的財産センターの組織体制としては、全体的な意思決定機関としてセンター長を委員長とする運営委員会が設置されました。この運営委員会はセンター長と2名の副センター長のほか、法学研究科長、高等司法研究科長、特任教員などで構成されます。また、当センターのプログラム、教育企画、教材・教育方法の開発などについて審議する総合企画委員会を設置し、委員には本学の各部局からの兼任教授にも加わっていただき活発な議論・意見交換を行う予定です。さらに、全学的な知的財産教育を推進する上で不可欠な共通的・総合的学習システムを構築するために、知的財産分野に対応する形で、特許を担当するパテント部、商標を担当するブランド部、意匠を担当するデザイン部、不正競争、企業秘密・ノウハウを担当するノウハウ部、著作権を担当するコピーライト部を設置し、

それぞれの分野における教材の開発・教育研究を行ないます。また、当センターの企画立案を行うプランニング部も設置します。各部には客員教員をそれぞれの専門性に応じて配置するとともに、少なくとも1名の特任教員を所属させ、活発な意見交換と議論を行いながら活動を行っていきます。この活動を行う上で重要な役割を担う特任教員は、今後規模の拡大を行う予定です。客員教員、非常勤講師は、弁理士業務や企業実務、企業知財部などで顕著な実績を有する専門家で、それぞれの専門分野に関連する科目の講義をしていただくほか、学習コンテンツの開発にもご協力をいただくことになっております。

知的財産センターの組織の中心は、豊中キャンパスの基礎工学I棟5階にあり、センター長室、会議室、特任教員の研究室などが設置されています。また、このほかにも、改修後のイ号館において、産学連携センターなど同じフロアに、知的財産センターへの来賓のお迎えや知的財産に関する相談を行うスペースが設置される予定になっております。

■事業計画

当センターは第一期として、今年度から平成27年度までの6年間の事業となっております。全学共通教育をはじめとした実施事業も、それぞれ段階的に実施していきます。初年度に当たる今年度は、全学共通教育については、第一段階として、知的財産に対する関心が本来的に高い医学部・工学部・基礎工学部の学生を対象として入門的な授業を提供し、次年度から本学全学生を対象とした授業を提供します。高度副プログラムと知的財産法プログラム特別コースにつきましては、本年度にニーズ調査とカリキュラム開発を行い、次年度から一部実施を始めるとともに、その結果をチェックし必要な修正を行った上で、平成24年度から全面的に実施いたします。これらのプログラムは全面実施後も不断のチェックを行い、絶えず必要な修正を加えていきます。IPrismシステムの構築につきましては、次年度までに概念設計とデータベース設計を行うとともに、学習コンテンツの開発に着手します。その後、平成24年度までに条文知識確認用学習コンテンツを、平成25

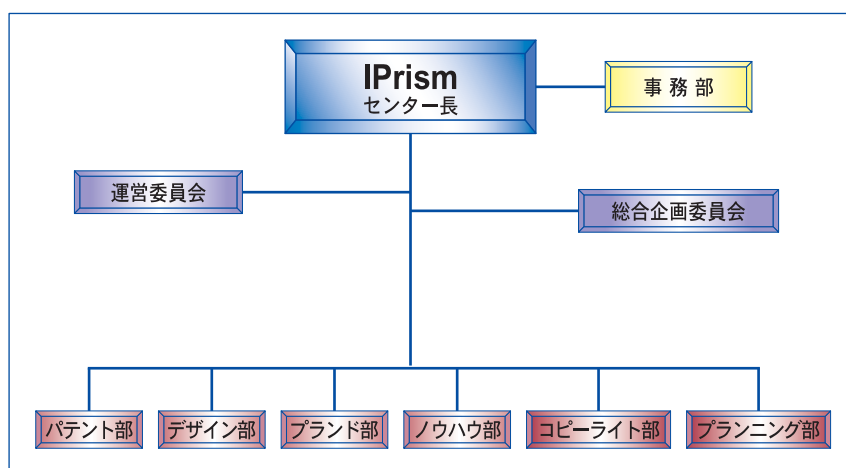


図3：知的財産センター組織図

	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度
全学共通教育の実施	医・工・基礎工学部において一部実施	大阪大学の全学生を対象として入門的な授業を提供する				
高度副プログラムの開発・実施	カリキュラム開発	一部実施・修正	カリキュラムの全学展開を開始			
社会人向けカリキュラムの開発・実施	ニーズ調査 カリキュラム開発	一部実施・修正	特別コースの全面展開			
IPrismシステムの構築	概念設計・IPrismコンテンツ着手 データベース設計		CBTシステム構築	論文用システム構築	本格実施／評価 IPrismコンテンツ結合	

図4：知的財産センター中期計画

年度までに論文用システムを構築し、平成26年度までにIPrismコンテンツも結合した形で、IPrismシステムの本格的な実施・評価を行えるようにし、第2期へのステップアップを目指します。

当センターが行う事業は、このように全学的な規模のものとなります。そのため、この事業を推進していく上で、全学

的な支援と協力が不可欠なものであるとともに学外からも多数の方々に尽力いただく必要がございます。今回当センターが無事に開設できましたのも、関係する多くの方々の理解と助言によるものであることに感謝するとともに、今後とも引き続きご協力いただけるようお願いいたします。

知的財産センター設立記念講演会・パネルディスカッション



鷲田総長

4月12日（月）に本学中之島センターにて「大阪大学知的財産センター（IPrism）開設記念講演・パネルディスカッション」が開催されました。

冒頭で鷲田清一総長が挨拶を行い、本学が知的財産権に関する法律学研究だけでなく、知的財産権を扱う人

材の国際的なコミュニケーション力・ネゴシエーション力を養成する教育に先駆的に取り組んでいく旨の決意を表明いたしました。

第1部では、望月晴文経済産業事務次官による記念講演「わが国の知財戦略と大学への期待」が行われました。望月事務次官は、「20年間の技術立国を通し、技術が実際のビジネスの中で本当に活かされてきたかを、もう一度反省すべき時期にある」とし、「日本経済のアジア進出において知的財産が果たす役割の重要性を踏まえ、知的財産法制そのものだけでなく、企業の知財戦略やビジネスモデルの在り方も考えなくてはならない」と述べられました。また、当センターに対して「法律学の問題だけでなく、知的財産権とビジネスの関係や産学連携等についても、理系とも協力して問題を解決していけるプラットフォームになってほしい」と期待を述べられました。

第2部では、川瀬真氏（文化庁長官官房著作権課著作物流通推進室長）、深野弘行氏（近畿経済産業局長）、小泉潤二氏（本学理事・副学長）、西尾章治郎氏（本学理事・副学長）をお招きした上で、茶園成樹副センター

長も加わり、「知的財産の活用と人材育成」をテーマにパネルディスカッションを行いました。前半では、それぞれのパネラーから、これまでの経験などを踏まえた知的財産の活用の在り方や知財教育と今後の方向性などについてご意見を頂きました。

これを基に後半では、本学の研究・教育の展開やビジネスにおける知的財産活用と人材育成について、本学が総合大学であるというメリットを最大限に活かして、理系文系の垣根を越えた連携を行うことが最も重要なポイントとなるという共通認識の下、活発な討論がなされました。また、パネルディスカッション後に会場の聴講者と質疑応答の時間が設けられ、産学連携などについて多数の質問が寄せられ、非常に有意義な会となりました。

講演会後に行われた知的財産センター設立記念祝賀会では、平日にもかかわらず産業界や法曹界などから約150名もの方々にお集まりいただき、知的財産センターの今後の展開について幅広い意見交換がなされました。



望月事務次官



第2部パネルディスカッション

青江 秀史 Hidefumi Aoe

1979年富士通株式会社入社、法務・知的財産権本部プロジェクト課長、ブリュッセル駐在員事務所長、広報室長、CS経営推進室長などを経て、2004年大阪大学大学院高等司法研究科教授、2006年4月大阪大学総合計画室員、法政実務連携センター長。2010年4月大阪大学広報・社会学連携室員、知的財産センター長。

大阪大学知的財産センター

TEL：06-6850-5007 URL：http://www.iprism.osaka-u.ac.jp/【整備中】

プロフィール

役員室だより

2010.6 Vol.36

大学の動き

大阪大学未来基金（大学）の1年とこれから

「大阪大学未来基金（大学）」は、5月1日で創設されてから1年が経過しました。

基金室では昨年5月のホームカミングデイから活動を開始し、学内教職員、名誉教授、同窓会員、卒業生をはじめ在学生・新入生の保護者の方々など併せて5万数千名の方々へ基金の案内をいたしました。この結果、本年4月末には、寄付申込み件数は約1,500件、お寄せいただいた寄付金は1億5千万円余となりました。これまで、学内教職員や名誉教授、卒業生の方々にはご理解・ご協力いただき感謝しています。

また、今年度は、学内教職員に対して、期間を限定して一口千円からの寄付や現金による寄付の取扱いなど、身近な「大阪大学未来基金（大学）」としてご協力をお願いするとともに、この大阪大学未来基金（大学）を活用し、学生への教育支援のため図書館と提携し、「学生選書」へのサポート、環境問題への意識を高める「マイボトル運動」などの事業を行っています。

来年の5月には、大阪大学は創立80周年を迎えます。昨年から、この記念事業のための寄付をお願いしているところであり、今年度も学内教職員や卒業生の方々などに、ご支援をお願いすることとしています。

今後とも、大阪大学の財務基盤の安定・強化の一環として、大阪大学未来基金（大学）の充実にご協力いただきますようよろしくお願いいたします。



経営協議会の開催

平成22年度第1回経営協議会を6月7日(月)に、中之島センターで開催しました。学外委員11名、学内委員14名が出席し、2時間にわたり審議、質疑応答が行われました。平成22年度からの第2期中期目標期間における大阪大学の取り組みや課題について大学から説明しました。今回は特に国立大学法人の予算や概算要求の仕組みなどを学外の新委員にも理解していただけるよう努めました。



運営体制の強化

新たな大学運営の課題に対し機動的、一元的に対応するため、次のとおり運営体制を強化しました。

- 教育基盤整備本部（4月1日設置 本部長：総長）
 - ・教育の国際化、大学院高度副プログラム、大学院の学生定員等の検討
- 多様な人材活用推進本部（4月1日設置 本部長：尾山理事）
 - ・男女共同参画、女性研究者雇用等の推進
- 情報基盤本部（5月1日設置 本部長：尾山理事）
 - ・情報セキュリティ、学術情報、IT化などの全学的情報基盤の整備
 - ・「教育・情報室」を「教室（仮称）」に改組（平成23年度）

各室の検討状況

総合計画室

これからの総合計画室での取り組み

4月から第2期中期目標期間が始まりました。平成27年度までの6年間の目標、計画を達成するための取り組みを大学全体で進めていくことになります。総合計画室では22年度以降において、概ね次のような取り組みや課題の検討を進めていく予定です。

- ・第1期の実績・成果を踏まえた教育研究組織の整備や大学留保ポストの在り方
- ・将来を見据えたキャンパス整備や施設マネジメントの在り方
- ・グラウンドプランや活動方針2010に沿った諸活動

学内措置による教育研究組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による教育研究組織の整備として、4月の役員会で次の事項が承認されました。

- ・医学系研究科附属PET分子イメージングセンターの設置（平成22年6月1日）

国立大学法人の在り方に係る検証等について

文部科学省では、第1期中期目標期間（平成16年度～平成21年度の6年間）が終了したことに伴い、第2期以降の国立大学法人の在り方について検討するため、国民からの意見募集、有識者及び国立大学法人からの意見聴取などにより、検証を行いました。本学からも「法人化によって取組が進んだ事項」、「法人化後の状況と課題」について意見を提出しました。

これらの検証結果は、文部科学省から「中間まとめ（案）」として取りまとめ、公表されております。（文部科学省ホームページに掲載 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/05/1294218.htm）

キャンパス環境の改善と施設整備

■平成21年度は、大阪大学春日丘ハウス・産研インキュベーション棟の整備、キャンパス敷地造成、老朽施設の耐震改修・機能改善改修などを実施しました。

大阪大学春日丘ハウス



構造：鉄筋コンクリート造
規模：地上3階
延べ面積：3,024㎡
着工年月：平成21年6月
完成年月：平成22年3月



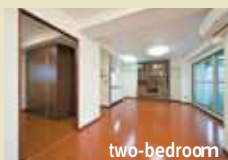
海外から優秀な研究者を招くに相応しいクオリティの高い宿泊施設として整備するとともに、学内の共同利用研究員・附属病院利用者ニーズをカバーすることを目的とした全学的な研究者宿泊施設として大阪大学春日丘ハウスが完成しました。

季節を通じて採光を取り入れるため、また居住者の集いの場となるよう中庭を設け、これを取り囲む建物配置とし、西側は建物の顔となるため、エレベーターホールを見通しの良いガラス張りとしています。

国際交流会館



構造：鉄筋コンクリート造
規模：地上6階
改修面積：3,940㎡
着工年月：平成21年8月
完成年月：平成22年2月



国際交流会館の耐震改修工事が完了しました。乳母谷池に隣接し、水辺にその姿を写すベランダの横ラインが強調された建物でしたが、改修では耐震補強用のダブルスキンとスチールの軽い底を設け、ダブルスキン部とベランダを一体的に見せるデザインとしています。

産研インキュベーション棟



構造：鉄骨造（一部鉄筋コンクリート造）
規模：地下2階地上4階
延べ面積：5,091㎡
着工年月：平成21年6月
完成年月：平成22年3月

産業科学研究所のオープンラボと全学の設備機器を集約する科学教育機器リノベーションセンターの合築整備である産研インキュベーション棟が完成しました。建物は斜面地及び構内道路を跨いでの整備となり、産研第1研究棟と産研第2研究棟をつなぎ往来可能な構造となっています。

立面は既存の研究棟と調和し一体的に見えるようイメージを踏襲したファサードとしています。

学生会館



構造：鉄筋コンクリート造
規模：地上3階
延べ面積：1,960㎡
着工年月：平成21年4月
完成年月：平成22年3月

学生会館の耐震改修工事が完了しました。学生が主に利用するため、カジュアルなイメージの外装色としています。

講義棟など

教育・研究施設の耐震改修が順次進んでいます。



工学C1棟
耐震改修工事に合わせLED入りガラスブロックによるサインを設置



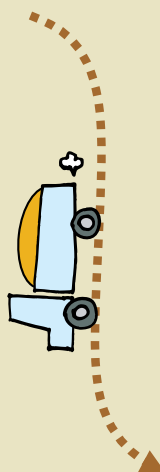
（筑面）研究講義棟A棟
鉄骨ブレースによる補強

キャンパス敷地造成

吹田キャンパス（テクノアライアンス棟用地）



箕面キャンパス（彩都からの新たなアクセスルート）



彩都に面した箕面キャンパスの新たなアクセスルートが完成しました。彩都西駅から箕面キャンパスへ到るルートの利便性の向上とバリアフリー化を今回吹田キャンパス敷地造成で生じた搬出土を利用し、箕面キャンパスの谷地を埋め立てを実現しました。なお、吹田キャンパスの造成された敷地には平成23年4月の供用開始に向けてテクノアライアンス棟の整備が進められています。

情報基盤本部の設置

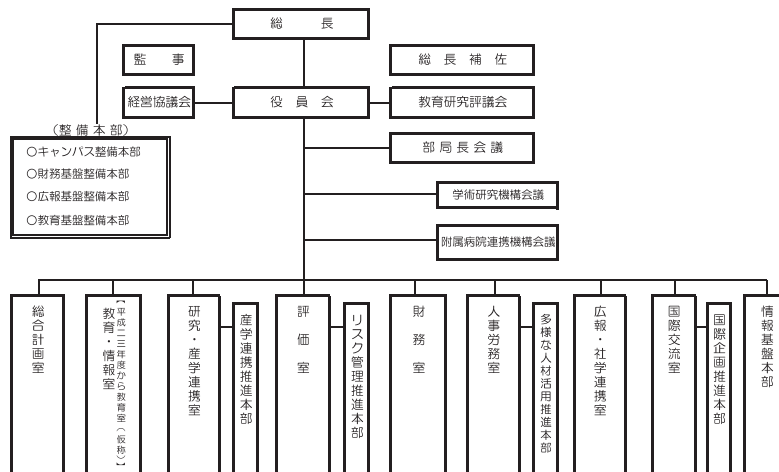
望のもとに情報基盤の強化に大学全体として取り組むことが必須となっています。

そこで「情報」に関する業務を教育・情報室から独立させ、情報基盤推進本部を強化・拡大して情報基盤本部を設置することになりました。これにともない、本学の情報基盤に関する審議や決定は教育・情報室の所管事項から外れますが、当面「教育・情報室」という名称に変更はありません。新しい体制では尾山眞之助理事が情報基盤本部長として大阪大学のCIO（最高情報責任者）を務め、今瀬真教授（情報科学研究科長）が副本部長とCIO補佐官を担当します。

教育基盤整備本部の設置

が4月1日付で設置されました。これは、キャンパス整備本部、財務基盤整備本部、広報基盤整備本部に次ぐ4番目の整備本部となります。本部長である総長のリーダーシップのもとで、全理事・副学長と2名の総長補佐等が構成員となり、教育基盤に関する重要な課題に対し機動的に取り組んでいきます。

2名の総長補佐等が構成員となり、教育基盤に関する重要な課題に対し機動的に取り組んでいきます。



ファカルティ・ディベロップメント委員会の設置

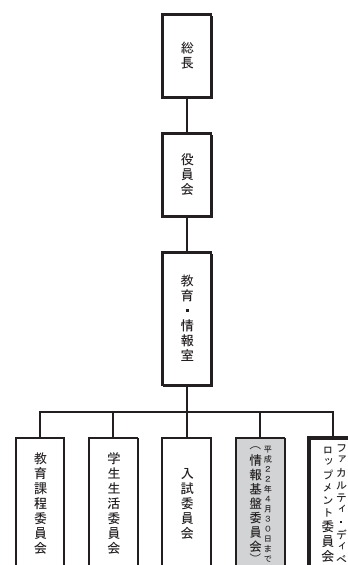
大学における教育や人材育成の重要性は増しており、教員がより優れた教育能力を持つことが求められています。全学のFD研修や、大学教育実践センターによるFD研修、また各研究科やGP、特別経費などによるFD活動が活発に行われるようになっていますが、教員の教育能力の開発という課題に対し、全学の連携のもとで体系的に取り組むため、新たに「ファカルティ・ディベロップメント委員会」を6月1日付で設置することが教育研究評議会で承認されま

(ファカルティ・ディベロップメントの推進)
5-3. 全学教員対象と部局独自のファカルティ・ディベロップメント (FD)を進める。

した。教育・情報室のもとに新設されるこの委員会は、教育課程委員会、学生生活委員会、入試委員会と並ぶ重要な全学委員会として、学部、研究科、附置研究所及び学内共同教育研究施設から選ばれた委員により構成されます。

同時に、よりよいファカルティ・ディベロップメント活動について検討し企画するため、平沢安政教育・情報室員（人間科学研究科教授）を主査とする「ファカルティ・ディベロップメント検討ワーキング」（仮称）が、教育・情報室のもとに設置されることになりました。

なお、本年も9月8日(水)に豊中キャンパスで、17日(金)に吹田キャンパスで、全学のFD研修を実施します。昨年と同様、セミナー等の選択受講が可能となるよう設定しています。昨年とは異なり、これまでにFD研修に参加したことがあるか否かを問わず、すべての教員に受講していただく予定です。教員各位の積極的な参加をお願いします。



新規設置 (H22.6.1～)

日程・場所	13:00～13:30	13:30～13:50	13:50～15:20	15:20～15:30	15:30～17:00
豊中地区 文系総合研究棟 9月8日(水)	受付	開会式挨拶 小泉理事・副学長	講演 東京大学名誉教授 立教学院本部調査役 寺崎昌男	休憩・移動	研修A「教育の国際化」 研修B「大阪大学におけるすぐれた授業実践」 研修C「対話・体験を活用した学び」 (※研修A～Cのうち1つを選択)
吹田地区 コンベンション センター 9月17日(金)			講演 桜美林大学招聘教授 潮木守一		

キャリア形成に関する大学設置基準の改正

大学設置基準の一部を改正する省令が公布され、平成23年4月1日から右のように施行されることになりました。

これに伴い、キャリア形成のための教育や指導、また学部生や大学院生の就職やキャリアパスの問題などに大阪大学として組織的に取り組むことが必要となります。具体的方策について教育・情報室で継続的に審議していく予定です。

大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。 (大学設置基準第42条の2関係)

TA・RAのあり方検討ワーキングの設置

平成22年度の大阪大学年度計画は、以下のようになっています。

7-1-2. 全学共通教育では、キャリア形成教育科目の充実を図り、専門教育、大学院教育では、TA・RA、インターンシップなどのプログラムを活用して、キャリア形成を支援する。

教育やキャリア形成におけるTA・RA制度の重要性は、今後増大していくものと思われます。日本の大学院教育を方向づけている、中央教育審議会の答申『新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—』（平成17年9月5日）でも、

TA・RAの重要性が指摘されています。

TA・RAには、①採用される学生に対して経済的支援を与える、②よりよい教育研究を実現するために教員に優秀な補助を提供する、③実際の教育活動と研究活動の現場で、将来の教育者(TA)・研究者(RA)を育てキャリア形成を支援する、という3つの側面があります。これらの観点から大阪大学のTA・RAの現状を把握し、あるべき姿や新しい制度について検討するために、「TA・RAのあり方検討ワーキング」を設置することになりました。主査は藤田喜久雄教育・情報室員（工学研究科教授）です。

高度教養教育準備ワーキングの設置

本学の第2期中期計画には以下のように定められており、高度教養教育を実現することが重要な課題となっています。

(教養を涵養する教育の整備充実)

1-1. 学部から大学院を通じて、教養を涵養する教育を整備充実させる。

これについては、これまで「高度教養教育推進ワーキング」が検討を行い、平成21年3月には『高度教養教育推進ワーキング報告書』も作成されました。これに基づき教育・情報室では、この4月に「高度教養教育準備ワーキング」を発足させました。主査はこれまでの「推進ワーキング」と同じく、小林傳

司教育・情報室員（コミュニケーションデザイン・センター教授）が務め、全学共通教育に関わる部局の教員や高等教育の研究を専門とする教員のほか、人社系・理工系・医歯薬系の3系の委員が参加しています。このワーキングを通じて、本学における高度教養教育の実現を図る予定です。

なお、平成22年7月5日に銀杏会館で、「学部・大学院における全学共通教育（教養教育）の実施体制に関わる意見交換会」を開催します。主要国立大学の副学長らが、それぞれの大学が行う共通教育について議論します。部局長、教務委員長、教育・情報室員、ワーキング委員などが参加しますが、ご関心をお持ちの方は是非ご出席ください。

日時：平成22年7月5日(月) 13:00～(開場12:30)

場所：大阪大学吹田キャンパス 銀杏会館会議室

日程：

1. 意見交換会

司会：小林 傳司（大阪大学教育・情報室員、コミュニケーションデザイン・センター教授）

13:00 開会の挨拶 小泉理事・副学長

13:10～13:40 北海道大学 脇田 稔（理事・副学長、高等教育機能開発総合センター長）

13:40～14:10 東北大学 木島 明博（副学長、高等教育開発推進センター長）

14:10～14:40 名古屋大学 山本 一良（理事・副総長、教養教育院長）

休憩

15:00～15:30 京都大学 山本 行男（高等教育研究開発推進機構長）

15:30～16:00 九州大学 淵田 吉男（総長特別補佐、高等教育開発推進センター長）

16:00～16:30 大阪大学 小泉 潤二（理事・副学長、教育・情報室長）

※各報告は、現況報告20分、質疑応答10分を予定

休憩

司会：工藤 真由美（大阪大学教育・情報室員、大学教育実践センター長）

16:40～17:30 全体討論

17:30 閉会の挨拶 鷺田総長

2. 懇親会

17:50～19:00

大学院高度副プログラム等の履修状況

平成20年度に始まった大学院高度副プログラムは、年々その提供数が増え、平成22年度には27のプログラムが開設されています。また社会人等を対象に、8つの科目等履修生高度プログラムが開かれています。

第1学期の履修登録者数は、大学院高度副プログラム540名（M488名、D52名）、科目等履修生高度プログラム113名です。今後も全学の学生等に周知し、受講者が増えるようご協力をお願いします。

大学教育・学生支援推進事業（大学教育推進プログラム）の申請

文部科学省が公募する大学教育改革推進のためのGP事業の申請について、5月10日の教育・情報室会議でヒアリングを行いました。その結果、大阪大

学からは以下の1件を文部科学省に申請することになりました。

プログラム名称	申請部局
高度教養教育としての新たな発信型英語教育	外国語学部

今年度は、大学教育改革支援に関する文部科学省の予算が削減され、新規プログラムの申請は1大学から1件に制限されています。20件程度の採択予定

に対して全国から298件の申請があり、激しい競争となっています。このプログラムの採択結果については、8月上旬頃に通知される予定です。

研究・産学連携室

学内プロジェクト「最先端ときめき研究推進事業」の創設

本学の次世代の担い手となる若手研究者（原則として満45歳以下）に対して、研究費を支援する新しい制度「最先端ときめき研究推進事業」プログラムを創設しました。

本制度は、本学が研究大学として世界的に伸びていくために、本学の特徴を生かした創造的・先端的・

超領域的な基礎・基盤研究について、ときめきをもって挑戦的に取り組もうとする研究活動を、研究・産学連携室において選定し、本学の次代を担う若手研究者を支援するものであり、7月中旬頃までに3件程度の採択プログラムを決定する予定です。

研究企画ワーキング・グループ支援プログラムの選定

研究企画ワーキング・グループ支援プログラムは、2010年2月号の阪大NOWにおいて、研究企画ワーキング・グループの設置趣旨及び学内公募についてお知らせしました。

その結果、学内の大型競争的資金を目指している

研究者から18件の提案書の提出があり、研究・産学連携室（平成22年4月26日開催）において、下記のとおり研究企画ワーキング・グループ支援プログラム11件を選定しました。

研究企画ワーキング・グループ支援プログラム一覧

No.	所属	職名	氏名	研究企画ワーキング・グループ名
1	理学研究科	教授	赤井 久純	計算機ナノマテリアルデザイン
2	医学系研究科	教授	吉川 秀樹	医工情報連携によるハイブリッド科学創出
3	薬学研究科	教授	宇野 公之	創薬推進研究拠点形成
4	工学研究科	教授	兒玉 了祐	光科学
5	工学研究科	教授	藤原 康文	省・創エネルギーナノマテリアル
6	工学研究科	教授	山中 伸介	環境イノベーション
7	基礎工学研究科	教授	茅田 博一	次世代有機エレクトロニクス
8	基礎工学研究科	教授	三宅 淳	バイオマス利用分散電力自給技術
9	情報科学研究所	教授	清水 浩	生命ダイナミクスと大規模ネットワーク
10	産業科学研究所	教授	安蘇 芳雄	グリーンナノテクノロジー
11	太陽エネルギー化学研究センター	教授	松村 道雄	太陽エネルギー利用科学技術

相談員制度の実施

科学研究費補助金の応募支援の一環として、特に初めて科学研究費補助金に応募する若手研究者や大型の研究種目にチャレンジする中堅研究者が、研究計画調書の作成や審査のポイント等を相談できる相談員制度を、平成21年度に試行的に実施し、活用い

ただきました。

平成22年度につきましても、引き続き、科学研究費補助金審査委員や（独）日本学術振興会学術システム研究センター研究員等の経験者を中心に相談員として登録いただき実施しています。

チャレンジ支援プログラムで18名が採択

平成22年度科学研究費補助金の応募にあたり、より大型の研究種目にチャレンジできるよう、申請者に研究費を補償するチャレンジ支援プログラムを活用して応募申請した研究者のうち、18名が若手研究

（A）、基盤研究（B）または挑戦的萌芽研究に採択されました。この結果、惜しくも不採択となった研究者には研究費（各80万円）を配分することとなりました。

評価室

第1期中期目標期間に関する評価（確定評価）について

平成22年度に行われる第1期中期目標期間に関する評価（確定評価）においては、『業務の実績の評価』と『教育研究の状況の評価』の両方に対応する必要があることから、平成21年7月以降これまでの間、関係各部局、各室等におかれましては、多大なご尽力とご協力をいただいております。ここに厚く御礼申し上げます。

業務の実績の評価

今年度は、『平成21年度』及び“第1期中期目標期間”に係る業務の実績の報告書を6月末に文部科学省へ提出します。

文部科学省（国立大学法人評価委員会）では、同報告書をもとに、平成21年度及び第1期中期目標期間の実施状況について、点検・確認の上、評価することになっています。

教育研究の状況の評価

今年度は、大学全体としての『中期目標の達成状

況報告書』と、各学部・研究科が対象の『現況調査表』及び『研究業績説明書』を6月末に（独）大学評価・学位授与機構へ提出します。

（独）大学評価・学位授与機構では、同報告書等をもとに、教育・研究・社会貢献の実施状況について、点検・確認の上、同機構としての評価を行い、文部科学省（国立大学法人評価委員会）に提出します。

文部科学省（国立大学法人評価委員会）では、『業務の実績の評価』と『教育研究の状況の評価』を併せて、第1期中期目標期間における“確定評価”を行うことになります。

評価確定のスケジュール

- ・平成22年9～10月頃…「平成21年度の評価（年度評価）結果」の確定
- ・平成23年3～4月頃…「平成16～21年度の6年間の評価（第1期中期目標期間評価）結果」の確定

財務室

第一期中期目標期間における目的積立金の執行実績

本学では、中期計画において各年度に生じた決算剰余金の使途については、「決算において剰余金が発生した場合は、教育研究等の質の向上及び組織運営の改善に充てる。」と定めております。

第一期中期目標期間における目的積立金の執行額が確定しましたので、4月26日の役員会に報告しました。

○目的積立金執行額	7,324,582,377 円
(内訳)	
文系総合研究棟建設工事一式	1,396,959,567 円
融合型生命科学総合研究棟建設工事一式	1,500,000,000 円
免疫学フロンティア研究センター動物実験棟建設工事及び動物飼育設備整備一式	1,050,000,000 円
研究者宿泊施設（春日丘ハウス）建設工事一式	767,392,114 円
医学部附属病院手術用血管撮影X線装置等導入	110,000,000 円
ナノテクノロジーインキュベーション棟建設工事一式	1,033,960,000 円
科学教育機器リノベーションセンター施設建設工事一式	258,480,000 円
フォトニクス研究センター研究棟建設工事一式	320,000,000 円
免疫学フロンティア研究センター動物飼育システム導入	100,000,000 円
蛋白質研究所共同研究拠点棟建設工事及び研究環境整備一式	270,000,000 円
テクノアライアンス棟造成工事一式	138,157,000 円
国際交流会館改修工事一式	73,004,560 円
事務改革対応システム導入	306,629,136 円

資金運用について

平成21年度は、国債・地方債による長期運用と効率的な余裕資金の活用を図るための短期運用により、平均運用額を前年度より32.1億円増の203.8億円、平均利率0.735%で資金運用を行い、その結果、長期・短期合わせて約1億4,343万円の運用益を獲得しました。

また、前年度に引き続き、資金需要を考慮した適切な運用金額、運用期間及び運用形態を検討し、長期・短期の資金運用の組み合わせによる効率的な資金の運用を行うこととしており、今年度においても、まず、短期資金運用計画を策定し、運用を始めました。

平成22年度全学強化経費の執行計画について

「全学強化経費」の第2次執行計画（案）が承認されました。採択事業は以下のとおりです。

第2次執行計画

部 局 等 名	事 項 名
安全保障輸出管理委員会	安全保障輸出管理体制整備・運営経費
執行計画額	計 7,490 千円

人事労務室

特例職員採用試験（第1回）実施及び合格者発表について

既にお知らせしている（2010年4月号参照）とおり、特例職員採用試験（第1回）の筆記試験を去る4月17日に実施しました。

今回は、124名の皆さんが受験し、その後の受験者全員の面接試験を経て、5月20日に50名の合格者を発表しました。（合格者は、10月1日に採用する予定です。）

なお、平成23年4月1日採用に向けて、今年度中に第2回の採用試験を実施する予定です。

勤務時間短縮の試行実施部局の追加について

既にお知らせしている（2009年12月号参照）とおり、本学では、今年度から一部部局において、勤務時間の短縮（以下「時短」という。）を試行的に実施（「原則として勤務を命じない時間」を昼休み等の時間帯に設けることによる。）しています。

部局から提出された、コストの増加（人件費の増加）につながらない形での1日15分の時短を行うための方策（時短試行実施プラン）を考慮し、合計34部局を時短試行実施部局として決定し、4月からの時短を試行しています。このたび、新たに8部局から年度途中での時短試行実施プランの提出があり、検討の結果、これらの部局を時短試行実施部局として追加決定したものです。

今後は、随時試行状況を分析し、検証等を行っていく予定です。

障害者雇用の新たな取組みについて

本学では、「障害者の雇用の促進等に関する法律」（以下「障害者雇用促進法」という。）に規定する責務を果たすため、障害者の方々の雇用に積極的に取り組んでいます。

その取組みの一つとして、平成20年度の吹田キャンパスを皮切りに、平成21年度からは豊中キャンパスに、知的障害を有する方々を用務補佐員として採用し、主としてキャンパス内の清掃業務を行う「エコ・レンジャー」制度を導入しています。

加えて、平成22年度からは、箕面キャンパスにも新たに7名の用務補佐員と、この方々の業務支援者3名を採用しました。新たに発足した箕面キャンパスの「エコ・レンジャー」は、研究講義棟及び管理棟などの建物内の清掃をメインにキャンパス内の美化に日々努めています。

また、吹田キャンパスでは、これまでの業務に加え、「花卉（かき）による阪大の緑化」をテーマに、園芸作業を専門的に行う園芸チームとして用務補佐員5名と、この方々の業務支援者2名を新たに採用し、除草・芝刈り作業（将来は花壇作りも行う予定）に従事しています。さらに豊中キャンパスでは自転車駐輪整理チームが発足し、新たに採用された用務補佐員3名が従事しています。

もし、構内でエコ・レンジャーを見かけることがありましたら、応援くださいますようお願いいたします。

このように、当初14名だったスタッフの数も39

名となり、今後の活躍が大いに期待されるのですが、社会的責任を果たすためにも、尚一層の取組みが必要であると、大学としては考えております。各部局等におかれましても、新たな職域の拡大についてご検討いただくとともに、引き続き障害者雇用に積極的に取り組んでいただきますよう、よろしくお願いいたします。

（箕面キャンパスの連絡先）

総務部多様な人材活用推進支援室（箕面事務室）

箕面市粟生間谷東8-1-1

外国語学部研究講義棟D棟内

電話 072-730-5115



箕面キャンパスの「エコ・レンジャー」



吹田キャンパスの園芸チーム芝刈り作業による「いちようマーク」の前で

広報・社会学連携室

O + PUS（オーパス）により部局長からのメッセージを放映

本学構成員のコミュニケーション活性化を図るために設置されている O+PUS で、すでに放映されており「総長からのメッセージ」に加えて、新たなコンテンツとして、各部局長から学生に対するメッセージを放映いたしました。

撮影を4月から5月にかけて行い、撮影が完了した部局から、順次放映を行いました。

メッセージは、自らの学生時代の思い出から、ぜひ学生時代に取り組んでほしいこととお話いただいたり、教育や研究について分かりやすく説明いただくなど、大変魅力的な内容となりました。

出演いただきました先生方、ならびに、撮影にご協力いただきました方々にお礼申し上げます。



福利施設（くじらや）に設置されている O + PUS

吹田市制 70 周年記念大学主催事業大阪大学記念講演会開催

6月12日(土)にコンベンションセンターにおいて吹田市制施行70周年記念事業大阪大学特別講演会を開催しました。

これは、吹田市が平成22年4月1日に市制施行70周年を迎えたことを記念し、吹田市制70周年記念事業大学主催事業として、開催したものです。

「自己決定とQOL向上のための医療とのつきあい方」と題して平井啓人間科学研究科助教により、自ら「QOL」（Quality of Life）を最終的に高められるように、治療やケアを自己決定により取捨選択し、現代の医療において信頼できる情報をどのように見分け利用していくか、そして毎日の生活の充実感や満足感を向上させる為に、医療とどのようにつきあえば良いかについて、わかりやすくヘルスコミュニケー

ションの観点から講演いただきました。当日は多数の方にご参加いただき、参加者は熱心に耳を傾けていました。



学士会館に「7 大学展示コーナー」がオープンしました

平成22年5月28日(金)に、学士会館（東京・神田）において、「7 大学展示コーナー」がオープンしました。オープニング・セレモニーでは、旧帝国大学総長が一同に会してテープカットを行ない、それぞれの大学が趣向を凝らした展示ブースの前では各総長と学士会理事長とのテープカットも行われました。（詳細は80ページをご覧ください）



国際交流室

AEARU（東アジア研究型大学協会）理事会の開催

標記の理事会が5月14日(金)に本学銀杏会館で開催されました。AEARUはその名の通り、東アジア、すなわち中国、韓国、台湾、日本、香港の著名大学17校で構成する大学コンソーシアムで1996年の設立です。メンバー校は、清華大学（北京）、清華大学（新竹：台湾）、北京大学、中国科学技術大学、復旦大学、南京大学、国立台湾大学、香港科技大学、ソウル国立大学、韓国科学技術院、浦項工科大学校、東京大学、京都大学、大阪大学、東北大学、東京工業大学、筑波大学で、アンダーラインを付した大学が2010年の理事大学、議長は香港科技大学のトニー・チャン学長です。コンソーシアムは、年1回の総会（学長会議）、年2回の理事会で運営されており、こ

れまで大阪大学は2000年に第6回の総会をホストしています。

主な活動として、AEARU Student Summer Campをはじめ、下表の分野ではほぼ毎年メンバー大学がホスト校となりworkshopあるいはsymposiumを開催しています。Student Physical Competitionというのもあり、本学のテニスチームが入賞したこともあります。

また、2009年夏には本学がサマーキャンプをホストし、メンバー大学から総勢53名の学生が参加しました。本学側も学生約30数名による実行委員会が主体的に運営を行い、大変有意義な成果を残しました。阪大Now（2009年10月号）にも報告があります。

AEARUの行事一覧

行事名	開催時期	ホスト校
Student Summer Camp	2010年8月	POSTEC
Student Physical Competition	未定	
Advanced Materials Science Workshop	2010年8月	筑波大学
Energy and Environmental Workshop	2010年10月頃	ソウル大学
Web Technology & Computer Science Workshop	2011年1月	京都大学
Cultural Workshop	未定	
Molecular Biology and Biotechnology Workshop	未定	
Development and Collaboration of Asian Business Schools Workshop	未定	
Science and Technology Parks Workshop	未定	
Network Education Workshop	未定	
Medical Center Workshop	未定	
Microelectronics Workshop	未定	
Workshop on Collaboration among Universities in the Ubiquitous World	未定	

この度の理事会では、上記の各分野のワークショップのほか、Flagshipとなるようなイベントを企画してはどうか、との意見が出され、学長会議に合わせて特別シンポジウムを開催する方向となりました。「漢字圏の大学連合」ということで「漢字シンポジウム」という提案があり、実現の方向で検討することになっています。

本学においては、もう一つAPRU（環太平洋大学協会）というコンソーシアムにも参画しています。

こちらについては改めてご紹介したいと思いますが、これらのコンソーシアムの活動にできるだけ積極的に参加してゆくため、学内にAPRU/AEARU学内WG（委員長：山内直人国際公共政策研究科教授（国際交流室員））を設けております。表に記されている分野での参画、また、それ以外の分野での新しい企画提案などがありましたら、是非、本WGへコンタクトしていただきますようお願いいたします。

日独学長会議（5月17日～18日：ベルリン）

JACUIE（国公立大学団体国際交流担当委員長協議会）とドイツ大学学長会議（HRK）の共催により、今回は「日独における高等教育改革―共通の課題、協力の契機」とのテーマの下で、ベルリン自由大学及びベルリン日独センターで開催されました。国立大学からは東京大学、九州大学、名古屋大学、筑波大学、広島大学等から総長・学長が出席した他、北海道大学、東北大学、京都大学等から副学長が出席しました。本学からは辻理事・副学長、弘津グローニンゲンセンター長、国際部が参加しました。日本側からの参加者78名、ドイツの大学学長・副学長などを含め総勢約180名が集まり、日独交流に関する両国の関心の高さを示した形になりました。文部科学省からは水見谷高等教育局国際企画室長が出席しました。

ドイツ連邦教育研究省から、ドイツの大学は運営経費の98%を州からの拠出金に依存しているが、研究資金については、連邦政府、州政府や産業界からドイツ学術振興会（DFG）など多様な公的機関を通じて競争的に配分されている。複雑な仕組みだが結果として新しい研究課題に柔軟に対応し、研究の自由を確保しているなどの説明がありました。昨今の経済情勢で大学の予算の削減も取りざたされているようです。

ドイツには研究支援に関して日本のGCOEに相当するエクセレント・イニシアティブがあります。これは連邦教育研究省がDFGを通じて支援する制度で、将来構想をもとに選考された9つの大学（Ludwig Maximilian University of Munich, Technical University of Munich, University of Karlsruhe, RWTH

Aachen University, Free University of Berlin, University of Freiburg, University of Göttingen, University of Heidelberg, University of Konstanz）がトップレベルの研究を行う「エリート大学」として重点的な助成を受けているとの説明がありました。

欧州高等教育圏構築に向けた大学改革であるボローニャ・プロセスについては、必ずしも順調に進んでいないとの発言がHRK会長からありました。ドイツの大学の課題であった高い中退率と平均28歳という高い大学卒業年齢を是正するため、3年制の学士制度の導入が進められているが、政府から必要な予算の配分がなかったため、大学における教育環境の悪化を招き学生から抗議を受けている。HRKの勧告に基づき、州政府が事態の改善を図っているとの説明がありましたが、会議でも人文科学の分野での導入に懐疑的な声や教養教育を強化する必要性を指摘する発言も聞かれました。

大学の国際化の重要性について日独間で認識が一致しましたが、日本からドイツへ留学する学生の数が減少していることへの憂慮が示されました。一方、日独とも素晴らしい科学技術があるので、非英語圏という言葉の障害を乗り越えれば国際交流の明るい将来があるのではないかと発言もありました。

会議で歓迎の挨拶を述べた神余（しんよ）駐独日本大使は阪大法学部の卒業生であったため、大阪大学の参加を特に歓迎していただいたことを付記します。

このところ、ドイツの大学から学長あるいは副学長の訪問が相次いでおり、今後ますますドイツとの交流が進むものと期待されます。

大学における安全保障輸出管理

安全保障輸出管理統括責任者
中 田 一 博

1. 「安全保障輸出管理」とは

今年に入り、大学内でにわかに「安全保障輸出管理」という言葉を耳にする機会が増えたかと思います。実は、この「安全保障輸出管理」というのは、外国為替及び外国貿易法（外為法）により、日本を含む国際的な平和及び安全の維持を目的として、武器や軍事転用可能な物・技術を核兵器等の大量破壊兵器の開発を行っている国やテロリスト集団の手に渡さないようにするために厳格に管理されているもので、以前から法規制されているものです。

しかし、なぜ今、“大学における”安全保障輸出管理を、声を大にして言わなければならないのかといえますと、外為法の一部改正が行われ、この中で、「輸出者等遵守基準」が法に盛り込まれ、それぞれの大学が安全保障輸出管理体制

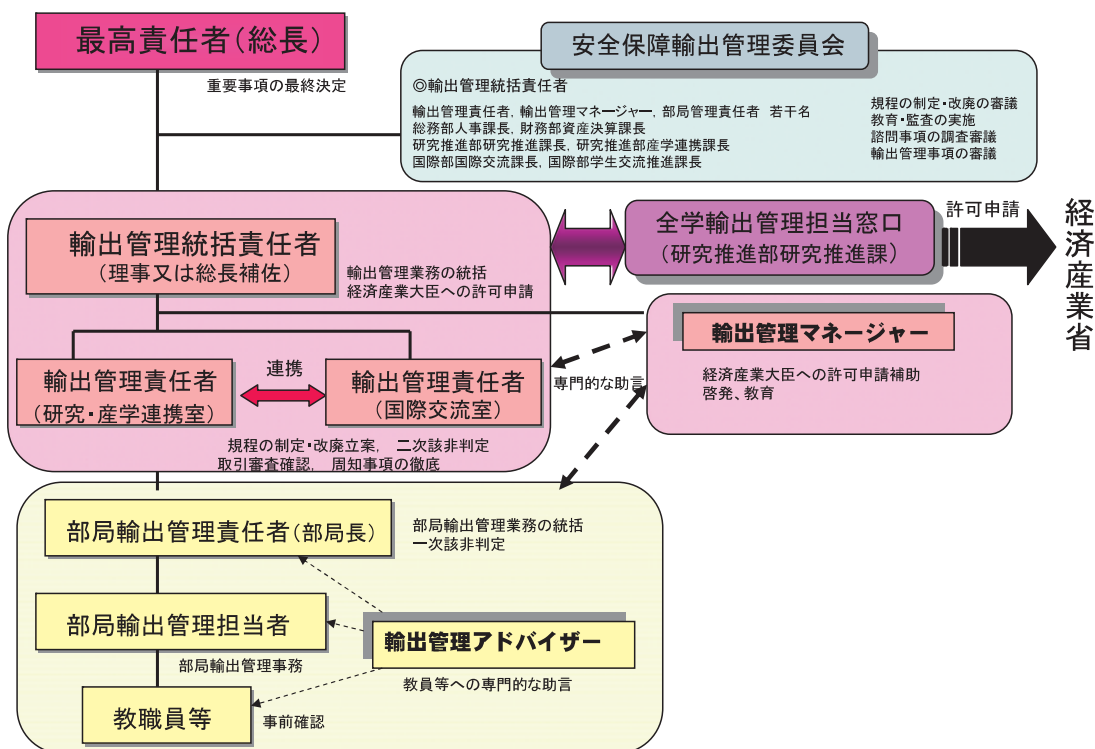
制を整備し、法令順守することが定められたためです。この改正の施行日が、平成 22 年 4 月 1 日で、いよいよこの法令に基づき、大学における安全保障輸出管理を行うこととなりました。

2. 本学の安全保障輸出管理体制

本学においても平成 22 年 4 月 1 日から、安全保障輸出管理体制（体制図参照）を整備し、また安全保障輸出管理規程を制定しました。

本学では、総長を最高責任者として、その下に輸出管理統括責任者（総長補佐）、輸出管理責任者（研究・産学連携室及び国際交流室から選ばれた室員）が、さらに、部局においては、部局輸出管理責任者（部局長）及び部局輸出

大阪大学安全保障輸出管理体制





管理担当者により安全保障輸出管理が行われる体制となっています。

また、全学輸出管理担当窓口（研究推進部研究推進課）には、安全保障輸出管理に係る専門的な知識を有する輸出管理マネージャー及び特任准教授が、部局には、教員から選ばれた輸出管理アドバイザーが、専門的な観点から助言、指導・教育等を行う体制となっています。

大学全体の管理方針の制定・規程等の改廃、教育・監査の実施、諮問事項の調査等安全保障輸出管理に関することは、安全保障輸出管理委員会で審議されます。安全保障輸出管理委員会は、輸出管理統括責任者が委員長となり、輸出管理マネージャー、輸出管理責任者、部局輸出管理責任者（理工系、医薬系、文系から各1名）、さらに、運用等が速やかに行えるよう人事課、国際交流課、学生交流推進課、産学連携課、資産決算課の課長が委員となって構成されています。

また、初めてこの外為法に触れるきっかけになるようにパンフレット「海外」と少しでも関係する先生方へ」を作成しました。さらに、4月23日(金)にはコンベンションセンターMOホールにおいて、全学教職員を対象とした説明会を実施しました。(32ページ参照)

大学での研究活動の中でも海外出張するとき、海外に装置、試料等の物品を持っていくとき、海外の研究機関・企業等の研究者と共同研究をするとき、留学生、研修生、見学者を受け入れるときなど、大学の研究者が日常的に行う多くの活動が該当するので注意が必要です。

3. 何をしなければいけないのか？

まずは、自身で研究室のリスクを把握することから始めましょう。そのための一助として、研究室内で規制対象になるものの調査（第1次スクリーニング）を行います。この調査により、各研究室と大学本部でリスク情報の共有を

図りたいと思います。実際に外国人の受け入れや海外への技術提供・貨物の輸出等を行うときは、一部の例外（パンフレット5ページ）を除いて、①まず事前確認シートを作り、部局輸出管理担当者に提出します。各部局は、事前確認シートの内容を確認し、この取引を認めるか、該非判定及び取引審査が必要かを決めます。その結果、該非判定及び取引審査を行うとなれば、②取引審査申請書を作り、部局輸出管理担当者に提出します。

この取引審査申請書によって、各部局で1次、本部で2次の該非判定及び取引審査を行います。該非判定及び取引審査の結果、経済産業省への許可申請を行うものは、③法令等が定める所定の申請書を作成することになります。

また、海外出張（国際会議等、研究機関・企業訪問など）をする場合にも規制（技術の提供など）の対象となるときがありますので、安全保障輸出管理に関する確認をするように心がけましょう。

事前確認シート、取引審査やその他のようなことでも、わからないことがあれば自己判断をせず、気軽に全学輸出管理担当窓口へ相談してください。

4. 最後に

近年では国内の重要な先端技術情報が外国へ不用意に流出し、国内の産業競争力等に影響を及ぼしているとの指摘や報道が見受けられます。日本では平和国家としての立場から国際合意に基づき、大量破壊兵器をはじめとする兵器に用いられる可能性の高い貨物の輸出や技術の提供に関し、外為法により厳格な輸出管理が行われています。

みなさんの研究室内の装置、試料、技術、情報等を一度、安全保障輸出管理の観点から確認してみてください。我々が考える以上に、規制対象となる兵器等への転用可能なものがあるかも知れません。

今一度、関係法令、パンフレット等を十分に確認してみてください。

大学全体でこの安全保障輸出管理に取り組む必要があることはお分かりになったと思います。私どももみなさんと連絡を密にして、迅速に対応していきたいと考えています。

全学輸出管理担当窓口（研究推進部研究推進課）

TEL : 06 - 6879 - 4829

FAX : 06 - 6879 - 7039

e-mail : s-export@ml.office.osaka-u.ac.jp

http://www.osaka-u.ac.jp/ja/research/secure_exp

国立成功大学政治経済学研究所と学術交流協定に調印

国際公共政策研究科は、3月5日(金)に台湾の国立成功大学政治経済学研究所と部局間学術交流協定に調印しました。調印式は、成功大学で行われ、国際公共政策研究科からは、松繁寿和研究科長、星野俊也教授と米原謙教授が、成功大学からは宋鎮照研究所所長、陳勁教授、謝文眞教授、洪敬富助理教授らが出席しました。成功大学政治経済学研究所は文字通り、政治と経済を研究分野としており、国際公共政策研究科と極めてよく似た性格を持っています。これまでは、教員が個々に交流を図ってきましたが、今後は、より組織的かつ積極的に共同研究ならびに教員と大学院生の交流を進めることになります。



宋研究所長(左)と松繁研究科長(右)



成功大学洪助理教授(左から2人目)と台南孔子廟にて

当研究科は、これを皮切りに積極的に海外の類似の学部・大学院と学術交流協定を結び、研究と教育に関するネットワークを広げるとともに、実質的に交流を進めるために具体的なプランを作成し、一層の国際化を図ることとしています。特に、超短期および短期プログラムを充実させるなど、柔軟な態勢を整えるとともに、サバティカル制度等を利用し、1および2学期間の教員の派遣と受入を推進したいと考えています。

(国際公共政策研究科)

文学研究科

大学院生・若手研究者向け科研等申請書作成セミナー開催

文学研究科研究推進室では、科研費をはじめとする外部資金の申請に関わるセミナーを毎年複数回開催しています。昨年7月には主に中堅以上の教員のさらなるブラッシュアップを目的としたセミナー、今回は大学院生や若手研究者を対象としたセミナーを開催しました。

3月17日(水)13時半より2時間余り、文学部大会議室にて『科研研究活動スタート支援・学振特別研究員 申請書作成セミナー』と題して開催したセミナーには、大学院生、若手研究者合わせて約70名と予想を上回る参加者があり、研究費獲得への意欲、関心の高さを示していました。当日のプログラムとしては、日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員を務めている浜渦辰二文学研究科教授より「科研費および学振特別研究員制度の概要と今年度の変更点」の説明があり、次いで研究推進室員から「審査の観点、ポイント及び申請書作成上の注意点」について具体的な助言が行われました。プログラム最後の「採択された先輩の体験談コーナー」は昨年度から始めたものですが、好評につき定番とする予定です。今回はDC1、DC2、PD、科研若手研究それぞれの種目で採択された方々に、応募時の申請書類を資料として配付し、経験、工夫した点、考えることなどを自由に話していただきました。



浜渦教授とその説明に聞き入る参加者たち

会場はたいへんな熱気につつまれ、セミナー参加者へのアンケートでも「前年度にも増して情報が具体的かつ実践的になり、勇気とやる気が湧いてきました。」「具体的な話が多く、わかりやすかったため目標が明確になった。」などの回答が寄せられ、モチベーションを高める大きな効果があったものと考えられます。

(文学研究科・文学部)

タタ基礎科学研究所自然科学部（インド）との学術交流協定および学生交換覚書に調印

理学部および理学研究科は、3月23日(火)に、インドのタタ基礎科学研究所（Tata Institute of Fundamental Research）自然科学部（School of Natural Science）と、学術交流協定および学生交換覚書に調印しました。

調印式は、タタ基礎科学研究所の S. Ramakrishnan 自然科学部長が訪日された際に大阪大学で行われ、東島清 理学研究科長、細谷裕 物理学専攻長、大貫惇睦 教授、久野良孝 教授、能町正治 教授、浅川正之 教授、Wilson Dino 講師等が出席しました。インドは中国に次ぐ大国ですが、近年基礎科学研究に力をいれており、現在基礎科学の発展



握手を交わす東島研究科長（左）とRamakrishnan 学部長（右）



期であるとのこと。これまでも両校との間で多くの共同研究が進められてきましたが、調印式の後、S. Ramakrishnan 自然科学部長と出席した教員の間で密度の高い意見交換が行われ、共同研究の一層の発展、教員や大学院生との積極的な交流を図ることが確認されました。また、平成23年にインドのムンバイにあるタタ基礎科学研究所において、大阪大学との2国間ワークショップを開催したいと招待を受けました。

なお、S. Ramakrishnan 自然科学部長は平成22年9月から同研究所の副所長となられる予定であり、より熱い交流が進展することが期待されます。

（理学研究科・理学部）

第2回 共通教育科目別FD実施責任者会議（平成21年度）開催

3月24日(水)13時より、大学教育実践センター大会議室において、第2回共通教育科目別FD実施責任者会議を開催しました。出席者は15名（専任教員6名を含む）でした。

共通教育科目別FDは、FDの義務化を受け、より実効性のある活動を目指して昨年度より実施しており、昨年同様に部会（ないしは小部会）を単位として何らかのFDを実施し、報告書の提出を求めました。ほとんどの部会から報告書の提出があり、各部会が実施したFDの報告とその



共有化、来年度に向けての課題の明確化を目的として本会議を開催しました。

会議では、まず出席者から各部会の活動報告が行われました。取り扱われた内容は、成績評価、教育方法、教科書、教室・クラス規模の問題など、今年も多様でした。前年度の科目別FDを踏まえて、統一試験を実施したり、教科書改訂を行って学生の理解が向上した等、教育改善に繋がった事例も報告されました。また、アンケートを実施した部会では、分析した上で来年度の担当者に引き継ぎ、教育改善に利用してもらう予定であることも報告されました。実施されたFD活動については、昨年と同様に、実施報告書を作成するとともに概要を実践センターホームページに掲載して公開することとなりました。

次に、今年度の実施を受けて科目別FDの課題について話し合われました。連絡方法などで一定の改善がなされたとはいえ、人数の多い部会のFD実施方法に課題が残っており、その点を中心に議論がなされました。「科目」の枠を越えるFDが実施できないか、小部会を設けて実施できないか、そのような方式は非伝統的な領域では難しいのではないかなどの案や意見が出されました。

（大学教育実践センター）

第5回 共通教育担当教員新任教員研修開催

桜の花が芽吹いた3月25日(木)、豊中キャンパスのステューデント・コモンズ(教育研究棟Ⅰ)2階・セミナー室Ⅰにおいて、第5回新任教員研修を開催しました。この新任教員研修は、2010年度に初めて共通教育の授業・実験を担当する常勤あるいは非常勤教員を対象として実施されました。今回の対象者は61名で、その内32名(専任教員24名、非常勤講師8名)が出席し、センター専任教員は10名が参加しました。

第Ⅰ部では、まず高杉理事・副学長が「大阪大学の歴史」について講演されました。この中で、大阪大学は適塾、懐徳堂の精神を受け継ぎ、当学が全国的にも誇れる歴史を有していることが強調されました。次に、工藤眞由美大学教育実践センター長が、「大阪大学における共通教育の理念」について話をされ、当センターが全国的にも特色のある全学出席方式をとり、新設されたステューデント・コモンズ等を利用した基礎セミナーや対話型教育の促進を目指していることなどに触れられました。最後に、山成教明教育実践研究部長が「共通教育の仕組みと留意点」と題して、共



通教育のカリキュラム構成、様々な場合における学生への対処の仕方、新学務情報システムなど、「授業担当教員マニュアル」に関する実践的な情報について説明しました。

第Ⅱ部では、コミュニケーションデザインセンターの平田オリザ教授に、「対話型の授業を目指して」をテーマにして、2時間のワークショップを実践していただきました。この第Ⅱ部は、関西地区FD連絡協議会の「FD共同実施WG初任者研修」にも位置づけされた企画で、7名の他大学参加者を含めた22名が参加しました。授業への導入ゲームや企画に全員が参加し、それがコミュニケーションとどのように関係しているかを体験しました。平田先生から、演劇を含めたコミュニケーションやコミュニケーション・デザインについての洞察を聞き、参加した各自が応用できる多様なヒントを得ることができる内容となりました。

参加者のアンケートでは、「参加して自分の授業改善の参考になった」という肯定的な回答が多く、有用な情報を伝達できたと考えています。

(大学教育実践センター)

タイ王国モンクット王トンブリ工科大学創立50周年記念式典に出席

タイ王国において大学間学術交流協定を締結している6大学の一つであるモンクット王トンブリ工科大学(King Mongkut's University of Technology, Thonburi)の創立50周年記念式典が3月29日(月)と30日(火)の両日に開催され、本学から鷲田清一総長の代理としてバンコク教育研究センターの関達治センター長が出席しました。29日には、50周年記念として新築された工学研究棟の落成式が、マハチャクリシリントーン王女殿下を迎え盛大に行なわれ、関達治センター長が他大学からの出席者と共に拝謁しました。30日には、50年にわたる工学分野の教育研究における大学の貢献への敬意と今後の発展を祈念する鷲田清一総長のメッセージをセレモニーで披露しました。教職員と学生が一体となって各種の行事を実施しており、清々しい式典でした。

なお、この式典に先立ち、学部学生を中心とした研究発表会である第1回 International Senior Project Conference



が開催され、Kraiwood Kiattikomol学長から50周年記念盾を受け取る関達治バンコク教育研究センター長、台湾、タイ、日本の学生(5名の本学学生を含む)の総勢約100名が参加して開催され、学生間の交流を深めました。

(国際部国際交流課)

女性教職員・研究者支援のための休憩室を整備

OSIPPは女性教員・研究者の比率が高いことにくわえて、社会人大学院生も多いことから、仕事と育児と研究・勉学が鼎立できる環境整備を目指しています。今回、多様な人材活用推進委員会から「女性教職員・研究者支援のための休憩室の整備」に関する援助を得、休憩室を整備することとなりました。

休憩室は、落ち着ける環境であることを第一に考え、外装は白、内装は薄い黄色を基調とし、卵あるいは薔の中をイメージして作られています。床暖をいれ、かつ、珪藻土と無垢板を使うなど省エネと安全を確保しつつ自然に優し



い素材を使う配慮も行いました。また、ベビーカーで無理なく入室できるように入り口のドアは引き戸となっています。ベビーベッドと机があるだけでなく無線LANも繋がるため、乳児を寝かせながらも簡単な作業であれば行えます。ベビーベッドやマットは職員から提供してもらうなど、全員が参加・協力して環境を整えました。また、おむつ交換台とベビーチェアも、棟内の2箇所のトイレに整備されました。

(国際公共政策研究科)

工学研究科・工学部 留学生のための交流スペース改装

3月末、工学研究科／工学部 留学生相談部オフィス（工学研究科 GSE コモンウエスト棟 U1w-111）を改装し、学生向けの交流スペースを拡充しました。テキストや雑誌等の資料類、パソコン、プリンタ、ウォーターサーバー、電子レンジ等の設備を充実し、学生が寛いで会話をしたり、勉強ができる雰囲気をつくと共に、プライバシーを確保した相談スペースも整備されました。4月26日(月)には、お披露目パーティーを開催し、多くの留学生や教職員らが訪れ、にぎやかな楽しい時間を過ごしていました。交流スペースは国際交流をより推進する場として、留学生だけでなく日本人学生や他部局の方々のご利用也大歓迎です。今年度は交流スペースを利用して様々なイベントも計画しております。是非、一度、お気軽にお立ち寄りください。今回の改装は、大学基盤推進経費により実現したものです。

(工学研究科・工学部)



男女共同参画推進オフィスが設置されました

4月1日(木)、「男女共同参画推進オフィス」が「女性研究者キャリア・デザインラボ」の後継組織として、設置されました。場所は、「ラボ」の時と同様レストラン「匠」の2階にあります。

「オフィス」室長は頼本維樹教授で、室員は各部局から



頼本室長とオフィス職員

推薦された専任教員が務めます。メンバーは、室長を含め男性6名、女性5名の構成となっています。

「オフィス」では、「研究支援員制度」の実施などを通じて、研究者のキャリア面での支援や次世代の研究者となる学生への啓発などを行っていく予定です。

(なお、「研究支援員制度」は、今年度から、男性や文系の研究者の方もご利用いただけるようになりました。)

また「オフィス」では男女共同参画推進の推進に関する研究・教育の発信、研究者への一層の支援や女性研究者の採用促進のための具体的施策の企画立案など、学内の男女共同参画やワーク・ライフ・バランスの推進に向けての活動を積極的に実施していく予定です。

皆様におかれましては、「ラボ」に引き続き、今後一層「オフィス」をご活用いただくとともに、本学の男女共同参画推進へのさらなるご理解、ご協力をいただきますよう、よろしくお願い致します。

(総務部多様な人材活用推進支援室)

「ナノ高度学際教育研究訓練プログラム」社会人教育プログラムの平成21年度第6期生修了認定証授与式、および平成22年度第7期生開講式、ならびに特別講義、懇談会開催

ナノサイエンスデザイン教育研究センターは、標記の修了認定証授与式、開講式並びに特別講義を、93名(サテライト教室にて42名を含む)の出席のもと、4月2日(金)に本学中之島センターにおいて開催しました。

本プログラムは、科学技術振興調整費新興分野人材養成プロジェクト5年間の終了を受けて、平成21年度より授業料の有料化と大阪大学ナノ理工学人材育成産学コンソーシアムの支援を得た新制度のもとで実施中であり、実社会で活躍中の研究者・技術者を対象とした4コースからなる研究科横断型の高度社会人教育プログラム(1年間)です。



修了式・開講式における特別講義風景

また、サテライト教室は近畿、中部、関東圏9ヶ所に拡大し、多くの企業のご協力を得ています。

修了証書授与式(6期生50名中49名)では、赤井久純センター長(理学研究科)より、科目等履修生高度プログラム修了認定証および大阪大学エクステンション修了証書が授与されました。引き続き、開講式(7期生74名)も兼ねて、赤井久純センター長の挨拶、鷹木洋コンソーシアム理事、四日市教室より齋藤彰一コンソーシアム理事の祝辞があり、その後伊藤正剛センター長による新入生履修指導がありました。特別講義「大規模シミュレーション・デザインと次世代スパコン」(赤井久純教授)では、材料に関する計算科学のホットな話題が提供され、受講生が質問を交えて熱心に聞き入っていました。引き続いての懇談会には、78名が参加し、受講生、大学関係者相互の親交を深める絶好の機会となりました。

今年度の大学院生向けのプログラムもスタートし、ナノテク技術の企業における活用を説くナノテクキャリアアップ特論の4大学への配信によるプログラムの共有化、土曜集中講座「ナノテクノロジー社会受容特論」、ロードマップを活用した「ナノテクノロジーデザイン特論」の新規開講が加わり、大学院・社会人両プログラムの相互乗り入れによって内容の一層の充実が図られています。

(ナノサイエンスデザイン教育研究センター)

平成22年度 新入生健康診断実施状況

平成22年度新入生健康診断は、4月6日(火)～7日(水)に豊中キャンパスで実施されました。

今年度は、寒い日の続く中での健康診断でしたが、受検者数は3,424名で、ほぼ全員が受検しました。



新入生健康診断の目的は、病気の早期発見と健康増進にあります。新入生健康診断で何らかの異常が見つかった場合、再検査や精密検査を行っています。これからも、自らの健康管理のため、健康診断を積極的に活用してください。



(保健センター)

平成22年度 学生定期健康診断実施状況

全学生を対象とした平成22年度学生一般定期健康診断は、4月12日(月)～4月27日(火)に吹田保健センターで実施されました。

今年度の定期健康診断は、保健センター豊中本室の増改修工事が遅れていることから、吹田分室のみでの実施となりました。期間中は雨天が続き、受診する学生が少なくな

るのではないかと心配されましたが、連絡バスを増便したこともあり、また、学生の健康に対する意識の高まりもあり、今年度の受検者は18,617名、受検率は74.7%で、前年度より1.9%上昇しました。

受検状況は、下表のとおりです。

部 局	学生数	受検者数	受検率
文学研究科・文学部	1,330	667	50.2%
人間科学研究科・人間科学部	1,079	790	73.2%
法学研究科・法学部	1,178	764	64.9%
経済学研究科・経済学部	1,350	861	63.8%
理学研究科・理学部	1,978	1,547	78.2%
医学研究科・医学部	1,478	1,112	75.2%
医学部保健学科	981	858	87.5%
歯学研究科・歯学部	614	506	82.4%
薬学研究科・薬学部	670	555	82.8%
工学研究科・工学部	6,068	4,969	81.9%
基礎工学研究科・基礎工学部	2,738	2,346	85.7%
外国語学部	3,581	2,481	69.3%
言語文化研究科	377	224	59.4%
国際公共政策研究科	197	96	48.7%
情報科学研究科	445	341	76.6%
生命機能研究科	260	219	84.2%
高等司法研究科	321	209	65.1%
言語社会研究科	33	0	0.0%
連合小児発達学研究科	25	6	24.0%
研究所他(研究生・科目等履修生)	176	28	15.9%
学 部 合 計	24,879	18,579	74.7%
歯科技工士学校	58	38	65.5%
総 合 計	24,937人	18,617人	74.7%

(保健センター)

平成22年度工学研究科 「アジア人財資金構想」高度専門留学生育成プログラム・博士前期課程 入学式挙行

経済産業省・文部科学省による平成22年度「アジア人財資金構想」高度専門留学生育成事業に採択された上記プログラム3期生の入学式が、4月6日(火)13時より工学研究科管理棟3階において挙行されました。

式は、小泉潤二理事・副学長、馬場章夫研究科長、谷口研二副研究科長を始め、来賓として経済産業省近畿経済産業局産業人材政策課 内海美保課長、コンソーシアム企業の方々のご列席と留学生所属指導教員並びに上記プログラム2期生の出席のもと、座古勝特任教授(副プロジェクトリーダー)の司会により進められました。初めに、小泉理事・副学長および馬場研究科長から挨拶が、また、経済産業省の内海課長からアジア地域と我が国の産業発展を支える人材として今後の活躍と期待がそれぞれ述べられました。その後、谷口副研究科長よりプログラム入学者11名(中国7名、タイ国2名、インドネシア2名)の紹介があり、在校生を代表して、2期生の徐 爽君より「技術を通して母国



を含めたアジア諸国と日本の懸け橋となれるように共に頑張らしましょう」と歓迎の辞がありました。新入生を代表して、趙 瑛梓さんより「入学の喜びとアジア諸国発展に尽力できる人材になれるように精進したい」との決意が述べられ、厳粛の内に入学式が執り行われました。

(工学研究科・工学部)

平成22年度入学 学部1年次外国人留学生ガイダンス・懇親会開催

大学教育実践センターで、学部1年次外国人留学生ガイダンス及び懇親会が4月8日(木)に、国費外国人留学生12名、私費外国人留学生45名の計57名を迎え、開催されました。

ガイダンスでは、大学教育実践センターより、日本あるいは大学での生活に必要な事務手続きについて説明が行われた後、国際教育交流センターより、所属教職員の自己紹介、日本語授業等の履修説明や催し物のお知らせ等が行われました。

また、OUISAや生協留学生委員会のメンバーの方から、留学生相互、留学生と日本人学生の交流のコミュニティが紹介されました。

その後、場所を移し、大学教育実践センターの教職員も



交えて、教職員と外国人留学生、外国人留学生相互の親睦を深めるため懇親会がステューデント・コモンズで開催されました。

工藤真由美センター長の開会挨拶に続き、眞鍋昭治郎副センター長のご発声による乾杯で始められました。

初めて会う教職員や留学生同士も多かったですが、料理を囲み、親睦を深めることができました。

また、入学当初で毎日あわただしく生活している留学生が笑顔いっぱいにリラックスした気分で本会を楽しんでいました。

最後に、大島 巧大学教育実践センター留学生専門委員会委員長(工学研究科・教授)より閉会の挨拶があり、盛会のうちに終了しました。(大学教育実践センター)

みのおFMがスタートしました

本学と連携協定を締結している箕面市との連携事業として、同市で開局している放送局「タッキー 816 みのおエフエム」において、4月から、大阪大学の社会学連携活動を看板とした番組の放送が始まりました。

これまで、市民の皆様がなかなか接する機会のなかった大学内の取り組みや大きな文化資源を紹介することによ



第1回収録の様子（永田教授（手前）と高杉理事・副学長（奥））

て、より大阪大学を身近に感じていただき、大学と市民と連携・協働を展開する上での足がかりとなることを期待するものです。

毎月、教員、学生にご登場いただき大阪大学の様々な取り組みを紹介するとともに、「地域に生きる」大阪大学をアピールしていきます。

多くの皆様からご意見等をお聞かせいただければ幸いです。

【番組概要】

番組名	「まちのラジオ（大阪大学社会学連携事業）」
放送日	毎月第2木曜日 午後3時～4時（1時間） （再放送はその週末の日曜日 午後4時から）
形態	スタジオ収録
周波数	FM81. 6MHz
HP	http://fm.minoh.net/
E-mail	816@minoh.net

（企画部広報・社会学連携事務局）

豊中キャンパスで里山散策。 「第3回植物探検隊@初夏の待兼山を訪ねて」

21世紀懐徳堂主催、第3回植物探検隊を5月29日（土）、6月5日（土）に豊中キャンパスで開催。里山の自然がそのままの状態に残されている待兼山を散策し、植物観察を行いました。参加者は一般公募による1日目27名、2日目23名。講師は『キャンパスに咲く花』（大阪大学出版会）の編著の一人、栗原佐智子さんを迎えました。

阪大坂の階段から待兼山へ。順次目に入る植物について類似植物や雌雄の見分け方など講師の解説を聞きつつ、参加者は熱心に写真を撮ったりメモしたり。途中、博物館へ



里山の自然植物をじっくり観察



21世紀懐徳堂ギャラリーでお茶を飲みながらトークセッション

立ち寄り、常設展「待兼山に学ぶ」を見学。復路は舗装された散策路を外れ、高く茂った草をかき分け落ち葉を踏みしめ進む、一般公開はされていない「探検隊」ならではのルートをとりました。

後半は21世紀懐徳堂ギャラリーでトークセッション。人を心地よくさせる樹木の成分、他種の育成を抑制する成分、昆虫と植物の共生などについて講義を受けました。「植物の名を5種類覚えることができた」とおっしゃる植物入門者から、使い込んだ植物図鑑持参の上級者まで「少人数で説明が聞きやすく時間配分もよかった」と満足な評価をいただきました。

（21世紀懐徳堂）

最先端・次世代研究開発支援プログラム公募説明会の開催について

独立行政法人日本学術振興会による「最先端・次世代研究開発支援プログラム」の公募についての説明会が、4月14日(水)に大阪大学コンベンションセンターにて開催されました。

説明会は、学術振興会の里見審議役、長澤研究事業課長、及び内閣府最先端研究開発支援プログラム担当室の佐藤参事官補佐により行われ、応募手続きの流れや研究計画調書の記入要領等について詳細な説明がありました。

当日は、大阪大学教職員約180名、他大学等関係者約200名の参加者があり、活発な質疑応答が行われ、大変有意義な説明会となりました。

また、同プログラムの学内説明会が5月16日(日)に同会場において開催され、4月14日(水)の説明会内容をDVDで紹介するとともに質疑応答が行われました。

(研究推進部大型教育研究プロジェクト支援事務局)



安全保障輸出管理に関する説明会を実施

我が国では、日本を含む国際的な平和及び安全の維持を目的として、武器や軍事転用可能な物・技術を核兵器等の大量破壊兵器の開発を行っている国やテロリスト集団の手に渡さないため、外国為替及び外国貿易法(外為法)等により規制されているところですが、平成22年4月1日付けで外為法の一部が改正され、大学においても最先端の機器や技術・情報の輸出が管理されていなければならないことが、「輸出者等遵守基準」として定められました。これを受けて、本学では安全保障輸出管理体制を整備し、さらに安全保障輸出管理規程を制定、関係手続きを示したパンフレットを作成し、配布したところです。

今回、大学における研究と外為法等による安全保障輸出管理の関わりについて理解を深めるため、4月23日(金)にコンベンションセンターMOホールにおいて、安全保障輸出管理に関する説明会を実施しました。当日は、経済産業



講演する(財)安全保障貿易情報センターの則竹課長

省貿易経済協力局貿易管理部安全保障貿易検査官室 牧野守邦室長及び財団法人安全保障貿易情報センター情報サービス・研修部 則竹幹子課長をお招きして「大学における安全保障貿易に係る自主管理の促進について」及び「輸出者等遵守基準等の導入に向けて」と題して、大学と安全保障輸出管理の関わりや関係法令、用語についてわかりやすく解説いただきました。また、全学輸出管理担当窓口の研究推進課担当者から本学における手続きの流れ等について説明しました。当日は、約350名が参加し、そのうち約7割が研究者の方の参加でしたが、「安全保障輸出管理に関する理解が深まった」、「対象範囲が広いことが判り有意義だった」、また、「具体的な事例を示してほしい」、「もう少し細かい規模での説明会をやってほしい」など多数の意見が寄せられました。

(研究推進部研究推進課)



講演する経済産業省の牧野室長

平成23年度採用分日本学術振興会特別研究員募集に関する説明会を開催

日本学術振興会特別研究員制度について周知し、本学における応募件数の拡大と採択率の向上を図るため、平成23年度採用分日本学術振興会特別研究員募集に関する説明会を、応募予定者と将来的に応募予定の大学院生、学部



生、大学院生を指導している教員及び事務担当職員を対象として、去る4月15日(木)に吹田キャンパスにおいて開催し、約300名の参加がありました。

説明会は、日本学術振興会学術システム研究センター元主任研究員の産業科学研究所 沼尾正行 教授による特別研究員制度の概要と審査方法についての講演及び特別研究員(DC2)の採用経験者である基礎工学研究科 山元淳平 助教による具体的な内容をまじえた申請に係るアドバイス等についての講演がありました。また、研究推進課からは応募手続きの流れや、電子申請方法について説明しました。

今回が初めての説明会でしたが、参加者からは「審査する側、採択された人の経験談が有意義だった」、「研究業績の重要性についてよく理解できた」、「申請書作成の具体的なアドバイスが大変参考になった」と好評であり、今後も継続して説明会を開催する予定です。

(研究推進部研究推進課)

基礎工学部・基礎工学研究科 初任教員研修会実施

基礎工学研究科では、4月30日(金)に「平成22年度基礎工学部・基礎工学研究科初任教員研修会(初任者FD)」を同研究科国際棟セミナー室において実施しました。

この研修会は、新たに赴任され基礎工学部・基礎工学研究科の教育研究を担当することになった教員を主な対象に、大阪大学、基礎工学部、基礎工学研究科の現状についての認識を深めるとともに、大学教育を担当する教員として、教育に関する力を高めることを目的として平成15年度から実施しているものです。今年度の研修会には、基礎工学研究科、生命機能研究科、極限量子科学研究センター、ナノサイエンスデザイン教育研究センターから17名の教員(教授2名、准教授4名、講師2名、助教9名)の参加があり



大垣教授による講演



戸部研究科長による講演

ました。

当日は、戸部義人研究科長による「基礎工学部・基礎工学研究科の教育・研究」の講演に始まり、和田成生教授による「競争的研究資金獲得の重要性と研究者の倫理」の後、大垣一成教授による「メンタル的な問題を抱える学生の支援」、飯國洋二教授による「ハラスメント防止の重要性」と続き、最後に谷口康昭事務長による「大阪大学と基礎工学研究科の事務処理」についての講演が行われました。参加した17名の教員は、受講生という立場でメモを取りながら熱心に聞き入っていました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

フォトニクス先端融合研究センター第二期キックオフ講演会・パーティー開催

本学フォトニクス先端融合研究拠点が文部科学省科学技術振興調整費「先端融合イノベーション創出拠点形成」再審査の結果、平成19年からの3年間に加えてさらに7年間の継続課題として認定されました。

そこで平成22年4月13日(火)、一層のプロジェクトの推進と発展に向けて、鈴木寛文部科学副大臣、エドワード・ドン米国総領事、アンダーシュ・カールソンスウェーデン大使館科学技術参事官、エド・トムソン英国領事、文部科学省岡谷重雄科学技術・学術戦略官、内外のジャーナリストをお招きし、大学及び協働企業関係者が集まり、第二期キックオフ講演会・パーティーを開催いたしました。

講演会では、総括責任者の鷲田清一総長より挨拶の後、鈴木文部科学副大臣より「何千年の人類の歴史と深く関わってきた光を極めてほしい」とセンターへの期待と激励のお言葉をいただきました。河田聡センター長の講演では光技術の様々な可能性を紹介し、様々なイノベーションを起こしてゆくための重要テーマとして「プラズモニクス」の研究・開発に力を注ぎ、同時に人材育成にはとりわけ力を注ぎ、世界のフォトニクスセンターと連携して21世紀の



懇親会の様子

フォトニクスの世紀を切り開いていくという今後の方針を披露いたしました。(株)野村総合研究所主席コンサルタントの池澤直樹氏からは、新しい産業を作ってゆくには若手研究者や産業界のよりどころとなるビジョンが必要であるが、実際には過去に作ったビジョンを超えて進むものがあり、その一つが「プラズモニクス」に関する研究開発の進展であると話され、プラズモニクス開発は、広い産業分野への波及効果が望めることから日本の競争力の維持・強化に大いに貢献できると期待の言葉を頂戴いたしました。

講演会の後には、日東電工株式会社元社長・元会長の山本英樹氏に乾杯の音頭をおとりいただき、交流と懇親を深めました。また会の最後には馬場章夫工学研究科長・フォトニクスセンター先端融合研究拠点運営委員長より、大阪大学はIndustry on Campusを創案し、フォトニクスで産業創出とイノベーションの実現に向けて努力する決意を述べ、締めくくられました。

(工学研究科・工学部、フォトニクスセンター)



河田センター長による講演の様子



鈴木文部科学副大臣による挨拶

体育会六賞及び課外活動総長賞の表彰式開催

4月30日(金)のいちょう祭において、平成21年度体育会六賞及び第11回課外活動総長賞の表彰式が、豊中キャンパスのメインステージで行われました。爽やかな晴天の下、受賞団体部員の他一般学生も多数集まって賑やかな雰囲気の中、表彰式は行われました。

「体育会六賞」は、大阪大学体育会所属運動部及び各運動部員の部活動に対する励みの目標とし、あわせて学生の健全な課外活動を助成する主旨のもとに設置されたもので、以下の基準に基づき、体育会において選考されました。

「赤堀賞」…年間最優秀クラブ

「会長賞」…年間最優秀選手

「釜洞賞」…年間で最も特色のある活動を行ったクラブ

今回、表彰を受けた団体及び個人は次のとおりです。

体育会六賞	受賞団体・個人	表彰の対象となった主な成績等
赤堀賞	ボクシング部ボクシング班	全日本選手権大阪府予選にて4階級で1位獲得
会長賞	サイクリング部サイクルサッカー班 田中 勝也・三須 友晶	ワールドカップ大分、チャレンジカップ等世界を舞台に活躍
釜洞賞	スキューバダイビング部	久米島にてサンゴを食害するレイシ貝の駆除活動を行い、環境保護に貢献
熊谷賞	テコンドー部 木下まどか	全日本学生大会にて初出場でベスト8入り
山村賞	陸上競技部	男女共に優勝し、特に男子は大差での優勝で総合順位上昇に貢献
宮原賞	女子卓球部、自動車部、少林寺拳法部、 水泳部男子、水泳部女子、ソフトテニス部、 体操部、陸上競技部男子、陸上競技部女子	七大戦で優勝

課外活動総長賞	受賞団体・個人	表彰の対象となった主な成績等
最優秀賞	該当なし	
優秀賞	サイクリング部(サイクルサッカー班)	ワールドカップファイナル(世界大会)に日本代表として出場
	木下まどか(テコンドー部)	全日本テコンドー選手権大会にて女子-49kg級3位獲得
	アカペラサークル inspiritual voices	テレビ番組のコンテストにて2大会連続全国準優勝
特別賞	ボクシング部	全日本選手権大阪府予選にて4階級で1位を獲得
	環境サークルGECS	箕面川清掃プロジェクト等の数々の活動で環境意識に働きかけた
	夏まつり実行委員会	国際色豊かな夏まつりの開催などで、地域連携に貢献
	iGEMOSAKA	合成生物学の世界大会・国際コンペiGEM2009にて金賞を受賞
	吉松 由貴	院内での医療通訳等で社会に貢献



「熊谷賞」…年間最優秀女子クラブもしくは選手

「山村賞」…七大戦において顕著に活躍したクラブ、とりわけ前年度より著しく順位が上昇したクラブ

「宮原賞」…七大戦において優勝を収めた全てのクラブ

また、「課外活動総長賞」は、学生の課外活動の充実と更なる活発化を図ることを目的として、前年度において特に優れた活動を行った学生団体等を表彰するもので、体育系、文化系の大学公認及び学部公認団体から、非公認のサークル団体等まで、学内の全ての課外活動団体等を対象に公募をした結果、今回は28件の応募があり、これら応募のあった団体等の様々な活動報告に基づき、学生生活委員会において選考されました。

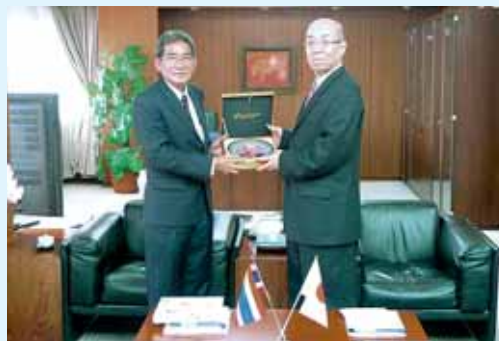
表彰式後は、学生交流棟「宙」にて、表彰を受けた団体の代表者及び個人と、鷲田清一総長、小泉潤二理事・副学長、大垣一成学生生活委員会委員長、東明彦課外活動小委員会委員長、尾藤広幸学生部長などを交えた懇談会を行い、受賞に至る取組やエピソードなど、話に花を咲かせました。

(学生部学生支援課)

総長への表敬訪問

タイ王国モンクット王トンブリ工科大学の表敬訪問について

2月25日(木)、本学の大学間交流協定校であるタイ王国モンクット王トンブリ工科大学・Kraiwood Kiattikomol 大学長が、Bundit Thipakorn 企画情報担当副学長と国際交流担当2名を伴い、鷺田清一総長を表敬訪問しました。今回の訪問では、同大学の創立50周年記念行事への本学の参加へのお礼と大学間の交流の促進について懇談がおこなわれました。同大学の創立50周年記念式典には、関 達治バンコク教育研究センター長が鷺田総長の代理として出席、またプレイベントとして開催された国際シンポジウムには、本学工学部生5名が参加し、ポスターセッション、口頭発表を行い、アジアの各大学の学生と交流を深めました。表敬訪問後は、国際教育交流センター（IRIS）、サポートセンターを見学し、タイの留学生と懇談し、本学での様子について歓談しました。



タイ王国モンクット王トンブリ工科大学・Kraiwood Kiattikomol 大学長より、寄贈品を受け取る鷺田総長

ドイツ フランクフルト大学の表敬訪問について

3月11日(木)、Rainer Klump 独フランクフルト大学（ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学フランクフルトアムメイン）副学長、Martin Bickl 同大学国際部長、Horst Stoecker ヘルムホルツ研究所副所長と Regine Dieth ドイツ商工会議所東京オフィスマネージャーが、辻 毅一郎理事・副学長を表敬訪問し、将来的な留学生交流や研究交流について、懇談しました。本学からは、土岐 博核物理研究センター教授、有川 友子留学生センター教授、亀岡 雄国際部長が同席しました。その後は、Klump 副学長の専門である経済学についての意見交換を行うため、社会経済研究所のホリオカ チャールズ ユウジ 教授（国際交流委員）を訪問しました。



独フランクフルト大学（ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学フランクフルトアムメイン）Rainer Klump 副学長と記念品を交換する辻 毅一郎理事・副学長

ドイツ ビーレフェルト大学の表敬訪問について

3月19日(金)、Gerhard Sagerer 独ビーレフェルト大学長一行10名が、鷺田清一総長を表敬訪問しました。本学からは、辻理事・副学長、浅田 稔工学研究科教授、石黒 浩基礎工学研究科教授と長井志江工学研究科特任准教授が同席しました。ビーレフェルト大学から、パワーポイントを使った同大学の概要説明の後、石黒教授から医学、認知科学を融合した学際教育研究領域「認知脳システム学」のグローバルCOEプログラムの概要説明があり、今後の学術交流について懇談をしました。



懇談後の集合写真
前列 左から ビーレフェルト大学
Gerhard Sagerer 大学長、鷺田総長

在大阪・神戸オランダ総領事館総領事の表敬訪問について

3月30日(火)在大阪・神戸オランダ総領事館 Margarita Maria Bot 総領事が、鷲田清一総長を表敬訪問されました。

本学の創立と深く関わりのあるオランダですが、グローニンゲン教育研究センターの活動や、オランダと日本の大学における交流について、活発な意見交換がなされました。今回の訪問には、Julien Rikkoert 報道文化担当官、本学からは、辻理事・副学長、弘津グローニンゲン教育研究センター長、亀岡国際部長、江藤国際交流課長、門脇国際連携課長が同席し、今後のさらなる交流の促進に向けて実りのある懇談となりました。



前列 左から Margarita Maria Bot 総領事、鷲田総長
後列 左から 門脇国際連携課長、江藤国際交流課長、Julien Rikkoert 報道文化担当、辻理事・副学長、弘津グローニンゲン教育研究センター長、亀岡国際部長

タイ王国大使館学生部公使参事官の表敬訪問について

4月15日(木)タイ王国大使館学生部 Warin SUKCHAROEN 公使参事官が、鷲田清一総長を表敬訪問されました。今回の訪問には、辻理事・副学長、宮本マラシー世界言語研究センター教授、亀岡国際部長、江藤国際交流課長が同席し、タイ王国および本学における国際交流に関する方針や特色についての意見交換、今後の留学生の受入れ等についての懇談がおこなわれました。

また、表敬訪問に併せて、世界言語研究センターや外国語学図書館、サイバーメディアセンター、留学生センター (IRIS) 等を見学され、箕面、吹田両キャンパスにおいて、タイの留学生との懇談会を開催し、本学での様子について歓談されました。



前列 左から Warin SUKCHAROEN 公使参事官、鷲田総長
後列 左から 江藤国際交流課長、宮本マラシー世界言語研究センター教授、辻理事・副学長、亀岡国際部長

ブルネイ・ダルサラーム国経済産業省大臣の表敬訪問について

5月11日(火)ブルネイ・ダルサラーム国 Pehin Dato Yahya Baker 経済産業省大臣が、辻理事・副学長を表敬訪問されました。本学からは、民谷工学研究科教授、石川国際企画推進本部准教授らが同席され、辻理事により本学の国際交流状況等の紹介が行われました。その後、今回の来訪の目的である「ハラル食（豚肉を使用しない食事）の安全性モニタリングについての意見交換」を交え、一同で実際にハラル食をいただきながらの食事が行われました。

昼食会後、大臣御一行は、民谷教授の研究室、フォトリックセンターを見学されました。



前列左より、民谷教授・辻理事・
Pehin Dato Yahya Baker 経済産業省大臣・
大臣御一行

ベルギー王国ワロン地域政府経済兼雇用促進大臣の表敬訪問について

5月18日(火)ベルギー王国ワロン地域よりジャン・クロード・マルクール経済兼雇用大臣が、鷲田清一総長を表敬訪問されました。総長による歓迎の挨拶の後、昼食会を兼ねた懇談会では、産学連携に対する現状の取り組みに関する双方のプレゼンテーション及び意見交換が行われました。また、懇談会に先駆け、免疫学フロンティアセンターと未来医療センターを見学され、大阪大学の最先端研究施設をご覧いただきました。



前列中央／左 ジャン・クロード・マルクール
経済兼雇用大臣
右 鷲田総長

駐日スウェーデン大使の表敬訪問について

5月19日(水)、スウェーデン大使館 Stefan Noreen 駐日スウェーデン大使が、鷲田清一総長を表敬訪問されました。今回2年ぶりの再会となる Noreen 大使と鷲田総長は、本学とスウェーデンの各大学とのさらなる交流に向けて、活発な意見交換を行われました。

豊中キャンパスでは、スウェーデン語専攻の学生達と交流の場をもたれ、学生の能力の高さに非常に驚かれておられました。また、その後のスウェーデン留学フェアでも、2年前の留学フェアを上回る盛況ぶりに大変ご満足いただいたご様子でした。



総長室にて：前列左 Stefan Noreen 駐日
スウェーデン大使、右 鷲田清一総長
後列左より エーナルコルプス特任准教授、
高橋准教授、須永スウェーデン社会研究所所長、
速水スウェーデン大使館広報部報道補佐官、
Carlson スウェーデン大使館科学技術部科学技術
参事官、清水教授、石野学生交流推進課長

いちよう祭開催

4月30日(金)及び5月1日(土)の両日に、本学の創立記念日を祝し、全学を挙げて新入生を歓迎するとともに教職員、学生の親睦及び地域との連携を図ることを目的とした「いちよう祭」が開催されました。

今年度も吹田キャンパス、豊中キャンパスの2つのキャン

パスで学内施設開放、展示会、講演会、園遊会等が行われました。

新入生のほか、大阪府下の各高等学校など学外の方々へ広く参加を呼びかけ、多数の参加者が訪れました。



(総務部総務課)

第26回 東アジア研究型大学協会(AEARU)理事会開催

本学が加盟する東アジアの主要な研究型大学で組織される東アジア研究型大学協会(The Association of East Asian Research Universities; AEARU)の第26回理事会が、5月14日(金)に医学部銀杏会館で開催されました。

このたびは、今年度から鷺田清一総長が理事に就任したことに伴い、本学がホスト役を買って出たもので、議長校の香港科技大学をはじめ、京都大学、北京大学、ソウル大学、清華大学(新竹)及び本学の6大学の学長等が集まり開催されました。

会議に先立ち、前日に歓迎レセプションが各校学長等と鷺田総長、西田理事・副学長、高杉理事・副学長、辻理事・副学長、山内国際交流室員等の参加のもと開催され、本学の学生公認団体の銀簫会による箏と尺八の演奏を楽しんで



議長の香港科技大学 Tony F. CHAN 学長と
記念品を交換する鷺田総長

いただきました。

会議では、議長の Tony F. CHAN 学長の挨拶と、ホスト役の鷺田総長の歓迎挨拶に続き、AEAARU の活動状況報告や年次総会ほか多彩な AEARU の活動について活発な議論が終始和やかな雰囲気の中で行われました。

会議終了後は、免疫学フロンティア研究センター及び産業科学研究所を見学いただき、研究内容など活発な質疑応答がなされました。

今回の会議を通じて、研究型大学の国際的認知度の向上を図り、理事校の各学長等とも相互理解をより一層深めることができました。

(国際部国際交流課)



理事会に出席された各大学長等

人権問題に関する映画会開催

人権問題に関する映画会が、憲法週間中の4月30日(金)に基礎工学研究科 シグマホールで開催されました。

この映画会は、人権問題啓発行事の一環として毎年行っているもので、今年度は人権問題全般について認識を深めようため、次の2作品を上映しました。

①「夕映えのみち」(人権問題全般)

②「紡ぎだす未来—共に生きる—」(人権問題全般)

午前・午後2回の上映で、教職員・学生等約40名の参加者があり、参加者は最後まで熱心に映画を鑑賞しました。

人権問題に対する正しい理解と認識を深めるため、引き続き各種行事を予定していますので、みなさまの積極的な参加をお願いします。

(人権問題委員会)



司会の松島法明人権問題委員会委員(社会科学研究所准教授)

学生支援ステーション Station Caf (第1回・第2回) 開催

学生支援ステーションでは、さまざまな学生が交流できる機会や場づくりを積極的に行っています。その第1弾として、5月20日(木)に第1回学生支援ステーション Station Café「亀も空を飛ぶ」映画上映会を、第2弾として、5月27日(木)に第2回 Station Café「園芸体験(初夏の種まき編)」を、学生支援コミュニティスペース(学生交流棟2階)において開催しました。

映画上映会では上映後にカフェタイムを設け、「タイトルからはガメラ的なモノを想像した」、「内容がアメリカ軍のイラク侵攻を背景とした、ニュース映像では知ることの



種まきの様子(演芸体験)

できないイラクの現状を映し出した作品であったので、タイトルと内容とのギャップが大きかった」といった感想を話し合いました。

園芸体験では、豊中緑化リーダー会のボランティアの協力を得て、百日草・日々草・きんれんか・枝豆の種まきをしました。豊中緑化リーダー会の方々に指導をいただき、土に触れながら世代を越えた交流が出来たと大変好評でした。

今後も、定期的に Station Café を開催していく予定です。スタッフ一同、皆様の参加をお待ちしています。

(学生支援ステーション/学生部キャリア支援課)



Café タイムの様子(映画上映会)

第5回

Young Scientistのためのソウル大学・京都大学・大阪大学合同薬学シンポジウム開催

5月19日(水)～21日(金)の3日間、標記シンポジウムが、薬学研究科にて開催されました。本シンポジウムは、3大学間の国際交流と若手薬学研究者の意見交換の場として平成16年にスタートし、各大学持ち回りで開催され、最近



は大学院生の英語発表のデビューステージとなっています。発表テーマは開催ごとに変わり、今回は、化学及び関連領域の最新の研究成果を、学生たちは、慣れない英語で、殆どが初めてでしたが、堂々と発表しました。

また、今回は本研究科と韓国全南大学薬学部の交流協定に基づき、全南大学の2名の演者をお招きしました。

初日は、ホテル阪急エキスポパークにて歓迎会を行い、教員同士の4年ぶりの再会を喜び合うなど楽しい一時を過ごしました。二日目、三日目は、薬学研究科特別講義室において、全南大学を含め、合計29演題の発表に対し、活発な質疑応答がありました。質問は殆どが教員からのものであり、この点は少し残念でしたが、学生が慣れない英語で四苦八苦しながらも必死で答えている姿は大変微笑ましいものであり、思わず頑張れと言いたくなりました。

次回はソウル大学の主催で行われます。

(薬学研究科・薬学部)

旧制浪高生の像「友よ我らぞ光よと」及びましかね童子像竣工

5月27日(木)午後1時30分から、豊中キャンパス「待兼山庭園」において「旧制浪高生の像(旧制浪速高等学校)“友よ我らぞ光よと”」及び「ましかね童子像」の竣工式が催されました。この像は、本学教養部(現大学教育実践センター)の前身のひとつである旧制浪速高等学校の同校創立85年を記念し、本学が来年創立80周年を迎えることを祝い寄贈されました。作成者の夢童由里子さんは、同校第一回卒業生であり、国文学者でもあった、故野間光辰氏のお嬢さんであり、愛知万博の永久モニュメント「月の塔」の作者としても知られています。

当日は、晴天に恵まれ、同窓会から、川島康生会長はじめ池口金太郎前会長、熊谷信昭同窓会連合会会長、制作者



の夢童さんら約30名が出席し、本学からは鷺田清一総長、西田正吾理事・副学長、高杉英一理事・副学長、辻毅一郎理事・副学長ら約10名が出席し、池口前会長から鷺田総長に目録が手渡され、続いて鷺田総長から川島会長へ感謝状が贈呈され、除幕されました。

その後、同窓会の参加者全員が像の前に整列し、寮歌「浪速の友に」を斉唱、その声は年齢を感じさせない澁刺としたものでした。

また、ステューデント・コモンズ2階セミナー室1に場所を移し、催された懇親茶話会では、池口前会長からの挨拶、大学側から西田理事・副学長の挨拶に続き、夢童さんから制作余話がありました。川島会長の乾杯の発声があり、懇談に移りました。会場ではスライドショー「青春の軌跡」が上映され、旧交を温めながら和やかなうちに散会となりました。

(企画部広報・社会学連携事務局)



大阪大学春日丘ハウス特集

オープニングセレモニー

海外から優秀な人材を招くに相応しいクオリティーの宿泊施設として、また共同研究員や病院ニーズをカバーすることを目的として建設されていた【大阪大学春日丘ハウス】が完成し、6月1日(火)の開館に先立ち5月26日(水)にオープニング・セレモニーが挙行されました。

報道関係者も駆けつけたセレモニーでは、まず開会とともに本施設の管理運営を統括する西田理事・副学長から設立に至る経緯が説明され、つづいて鷲田総長が挨拶の中で「春日丘ハウスの心（ポリシー）」、「フレキシブルな運用で多様なニーズに親切に responding していきたい」との熱のこもった説明があり、参列した部局長、国際交流担当教職員に対して「ぜひとも多くの利用が望まれます」と要請されました。



また「春日丘ハウスのプランニングに携わってこられた堀井先生から、『稼働率が低ければ総長自ら月額18万円の部屋に住んでください』と言われ、今かなり動揺しております。」と、鷲田総長らしい茶目っ気で笑いを誘うひとコマもありました。

鷲田総長、西田理事・副学長、施設マネジメント委員長三成教授（法）、堀井教授（微研）によるテープカットのあと、西川施設部長の説明により施設見学へと移りました。参列者のみなさんも自分の家を買うかのような熱心さで見学され、なごやかな雰囲気の中で無事セレモニーは終了しました。

オープンハウス・デー

新設された大阪大学春日丘ハウスでは、6月1日の開館に先立ち、5月26日～27日の二日間、オープンハウス・デーが催され、各タイプのモデルルームや中庭、スカイガーデン、談話室などの館内施設が公開された。

オープンハウス・デーには、外国人研究者自ら、あるいは外国人研究者を招へいする予定のプロジェクト・スタッフや、国際交流担当職員等が多数訪れ、ハイセンス、ハイ



クオリティーな家具にため息や感嘆の声があがっていました。

2日目には、前日にオープンハウス・デーに先立って挙行されたオープニング・セレモニーのニュース報道を見た阪大病院の外来患者や、入院患者のご家族も数多く訪れ、期待の高さが見られました。

6月1日 大阪大学春日丘ハウスが開館しました

大阪大学春日丘ハウスが、6月1日開館しました。

■予約受付中

【外国人研究者長期宿泊施設】はメールにて

〈kasugaoka-house@ml.office.osaka-u.ac.jp〉

【研究者等短期宿泊施設】はホームページから

〈http://www.osaka-u.ac.jp/ja/academics/facilities/BandB/kasugaoka_house/short_term.html〉

■お問合せ 大阪大学本部事務機構施設部企画課専門職員

〈06－6879－7948〉



(施設部企画課)

大阪大学蛋白質研究所 超高磁場NMRお披露目式

蛋白質研究所は、戦後の世界的な蛋白質研究の動勢に呼応して、1958年に大阪大学附置の共同利用研究所として設置され、今年4月から蛋白質研究共同利用・共同研究拠点として我が国の蛋白質研究に一層の貢献を果たすことを使命としています。この事業を進展させる一環として日本を代表する世界最高性能の超高磁場NMR2基（950MHz、800MHz）が設置されたことに伴い、そのお披露目式を6月9日（水）に開催しました。当日は、西尾章治郎理事・副学長をはじめ横山茂之理化学研究所横浜研究所SSBC領域長、桑島邦博日本蛋白質科学会会長ら関係者と所員多数が出席されました。藤原敏道教授の式辞、長谷俊治蛋白質研究所長の挨拶後、阿久津秀雄名誉教授の蛋白質研究所NMR



挨拶する長谷所長

研究の沿革紹介が行われました。西尾理事・副学長から「蛋白質の研究を継承・発展させ、我が国のみならず、国際的な蛋白質の研究拠点として、先端科学の分野に



超高磁場NMR現地説明

一層貢献することを期待します。」と挨拶があり、引き続いて横山領域長の祝辞とSSBCと蛋白質研究所の連携の期待表明、桑島会長の祝辞が行われました。その後、一同は超高磁場NMR施設に移動し、10トン近く的大型超電動磁石を前にして、池上貴久准教授の分かりやすい説明に関係者一同が感銘深く聴き入りました。その後、会場を移して40名近くの出席者が昼食会にも参加し、蛋白質研究所の歴史と発展を話題に昼の一時を共にしました。

（蛋白質研究所）

平成22年度 医学部御遺骨返還式実施

去る6月3日（木）午後1時30分から医学部共通棟3階大会議室において、御遺骨返還式がしめやかに執り行われました。

この式典は、毎年行われているものであり、系統解剖のために篤志団体である大阪大学白菊会から献体をいただき、医学部学生が平成21年度中に解剖させていただいた方々の御遺骨を御遺族にお返しする行事で、今回で第87回を迎えました。

当日は、晴天の中、約80名の御遺族が出席され、医学部からは平野俊夫学部長はじめ、解剖学教室の関係教員、八幡親明白菊会会長等が出席されました。



式典は、まず献体者の方々の御霊に対して参列者全員が黙祷を捧げた後、平野学部長から献体者の尊い御意志と御遺族の深い御理解に対して深く感謝を申し上げる旨の挨拶がありました。続いて、28名分の御遺骨が平野学部長から御遺族一人ひとりに返還され、



併せて八幡白菊会会長から御供物が手渡されました。最後に、解剖学教室を代表して、細胞生物学講座の原田彰宏教授からお礼の言葉が述べられ、滞りなく御遺骨返還式は終了しました。

なお、式典終了後、御遺族及び医学部関係教職員がそろって吹田キャンパス内にある「大阪大学医学部・歯学部献体慰霊碑」に献花を行い、献体者の御冥福をお祈りして、午後2時30分に散会しました。

（医学系研究科・医学部）

医学系研究科附属PET分子イメージングセンター開所式開催

医学系研究科は、RI 実験棟を一部改修し、附属 PET 分子イメージングセンターを設立しました。このたび開設を記念して、また、世界最高の性能を誇る設備を学外の研究者にも広く利用していただくことを目的として、5月24日(月)に開所式を開催しました。

PET (Positron Emission Tomography: ポジトロン断層法) とは、アイソトープが出すポジトロン (陽電子) を利用したコンピューター断層撮影技術で、PET を用いた分子イメージング技術は、生物が生きた状態のまま、体内の分子の量や働きを画像化することができる革新的な技術であり、世界的に注目されている分野です。

開所式は、銀杏会館3階阪急電鉄・三和銀行ホールでの記念講演にはじまり、畑澤 順 PET 分子イメージングセンター長の司会により、杉山雄一東京大学薬学系研究科教授、菅野 巖放射線医学総合研究所分子イメージング研究センターグループリーダー、渡部浩司医学系研究科医薬分子イメージング学寄附講座准教授の3名に講演いただき、学内外から約150名の出席者がありました。引き続き、



左から鷺田総長、手代木社長、平野研究科長

PET 分子イメージングセンター入口前にて、鷺田清一大阪大学総長、手代木 功塩野義製薬株式会社代表取締役社長、平野俊夫 医学系研究科長によりテープカットが行われた後、センター内の研究用小型サイクロトロンや、放射性薬剤合成装置など最先端設備の施設見学が行われ、参加者は興味深く見学されました。

見学終了後、再び銀杏会館に会場を移し開かれた祝賀会では、島田昌一医学系研究科副研究科長の司会により、平野研究科長の式辞が述べられ、鷺田総長の挨拶があり、山内和志文部科学省研究振興局研究振興戦略官付研究企画官並びに手代木社長から祝辞をいただきました。塩野義製薬株式会社関係者を含む学内外の来賓・関係者が参加し、懇談が行われ、新センター開設を祝いました。

本センターでの最先端設備を駆使した遺伝子改変動物や疾患モデル動物の分子レベルでの病態解析、医薬品の体内動態解析など、世界に先駆けた新しい研究分野が開拓されるとともに、すでに稼働している医学部附属病院の臨床用 PET との一元的運営により、創業期間の短縮、開発経費の節減、より副作用の少ない医薬品の開発が可能となり、医療面での貢献も大いに期待されます。

(医学系研究科・医学部)



イギリス世紀末文学の面白さ — 「黄金の書」と「有毒な本」 —

大学院文学研究科教授 玉井 暲

イギリスの19世紀ヴィクトリア朝から20世紀モダニズムの時代へと移行する時代の文学はパラダイムの大きな転換を色濃く反映している。こうした関心にもとづいて世紀末文学の代表者ウォルター・ペイターとオスカー・ワイルドの文学を読み直してみると、「黄金の書」のモチーフが重要な注目すべき焦点として浮かび上がる。作品中の主人公は現実の世界で味わう種々の経験よりも、文化的構築物としての書物に大きな影響を受けて人間的・精神的成長を遂げる。望ましい方向に影響を受ける書物は「黄金の書」となり、その逆に主人公を破滅に導く書物は「有毒な本」となる。この「黄金の書」と「有毒な本」に翻弄される主人公の表象のなかに西洋の伝統的な主体・アイデンティティの揺らぎを窺うことができる。



たまい・さとし

プロフィール

略歴：大阪大学文学部、同大学文学研究科修士課程で英文学を専攻。大阪大学助手、大阪府立大学助手、和歌山大学助教授を経て、昭和58年大阪大学文学部助教授（英文学講座）、平成11年同大学文学研究科教授、平成19年文学研究科文化動態論専攻（文学環境論講座）教授を兼任。専門は、イギリス19世紀末文学、19・20世紀英国小説、現代批評理論。主著に『イギリス世紀末文学におけるテクストと言語——ペイターとワイルド』、訳書に、ヒリス・ミラー『小説と反復』、M・ノックス『ワイルド』、R・アッカーマン『評伝J・G・フレイザー』など。

禅竹序説 — 禅竹作品の「趣向」「背景」「主題」「情調」をめぐる素描的概観 —

大学院文学研究科教授 天野 文雄

世阿弥の女婿で、15世紀中葉の能楽界を觀世三郎元重（音世阿弥）とともにリードした金春座の大夫氏信（禅竹）の作品は、現在は20曲ほどがその作として認定されているが、それらについては、「難解」「曖昧」というのが昭和40年代以降の定説となっている。最終講義では、このような禅竹にとっては不名誉な定説の見直しをも視野に入れつつ、禅竹作の『雨月』『小塩』『楊貴妃』『千手』の4曲を取り上げた。それぞれを副題の視点から読み解き、禅竹が岳父世阿弥を継承しつつも、世阿弥とは一味も二味も異なるユニークな世界の創造に成功していることを、説いた。禅竹は能という演劇作品だけでなく、能楽論においても世阿弥の継承者であるが、そのような位置にある禅竹的世界の解明は、いまだ十分ではない能楽の作品史や理論史の構築には不可避であり、「序説」と題したこの講義はその第一歩である。



あまの・ふみお

プロフィール

略歴：昭和21年、東京都生まれ。国学院大学大学院文学研究科修了。博士（文学）。大阪大学には、昭和62年に文学部美学科芸能史・演劇学講座助教授として着任。専門は能楽研究。著書に、『岩波講座能・狂言。〔能の歴史〕』、『翁猿楽研究』（観世寿夫記念法政大学能楽賞）、『能に憑かれた権力者——秀吉能楽愛好記』、『現代能楽講義——能と狂言の魅力と歴史をめぐる十講——』、『世阿弥がいた場所——能大成期の能と能役者をめぐる環境——』（木村重信民族芸術学会賞、日本演劇学会河竹賞）、『能苑逍遙（上中下）』などがある。教育研究のかたわら、能楽（能と狂言）の普及活動にも積極的に取り組み、大槻文蔵、福王茂十郎氏ら大阪を拠点とする演者と協同して、現在は廃絶して上演されていない世阿弥時代の作品の復活上演に数多く参画。洋画家須田国太郎が昭和初年から30年あまり描き続けた能・狂言のデッサン5000枚が大阪大学に寄贈されたときには仲介役を務めた。学内では、附属図書館副館長、教育・情報室員、評議員、文学研究科長などを歴任。

コラーゲンと共に

大学院理学研究科教授 奥 山 健 二

私は、修士学生の時にコラーゲンのモデルペプチド単結晶の構造研究を角戸研（蛋白質研究所）で始めました。当時の教科書には、DNAの二重らせん構造の発見でノーベル賞を授賞したCrickが1955年に発表したRich & Crickモデル（10/3-helix）がコラーゲンの分子構造として載っていました。研究を始めた当初は、先輩達が日本初の蛋白質の構造解析に関わっている中で、自分だけが15年も前に解析済みのコラーゲン構造を調べる事に対して少し不満を感じたこともありましたが、しかし、私の解析したペプチドのらせん構造が明らかにRich & Crickモデルとは異なる7/2-helixであったため、何故モデルペプチドの構造と教科書に載っている構造が違うのかという大きな問題が生じ、いつの間にかこの研究テーマに熱中してしまいました。その後、この問題を解明する過程で、九州大学、東京農工大学、大阪大学の多くの卒業生や、国内外の研究者の支援に恵まれて、今日までエキサイティングな研究生生活を送らせて頂きました。特に、この数年は新しい発見や、関連研究者と論文誌上での論争もあり、目処の付くまでもう少し頑張ろうと思っています。



おくやま・けんじ

プロフィール

略歴：昭和45年大阪大学理学部高分子学科を卒業し、昭和47年大学院理学研究科高分子専攻修士課程を修了。同年4月より九州大学工学部助手。その間、昭和53年10月から2年間Purdue大学（米国）博士研究員。昭和58年8月より東京農工大学工学部助教授、昭和63年4月より同教授。平成17年5月より大阪大学大学院理学研究科教授。専門分野は生体高分子構造、主に、コラーゲンおよびそのモデルペプチドの構造研究。

Panta Rei化学反応に魅せられて

大学院理学研究科教授 笠 井 俊 夫

ギリシャ哲学者ヘラクレイトスが「万物は流転する（Panta Rei）」という視点で森羅万象を理解しようと試みた。同様に化学反応をPanta Reiの立場から捉えて、大阪大学における28年間の研究教育活動を気相反応・表面反応において発見した立体効果の研究例をもとに概説した。そこで得られた分子軌道の重なりおよび分子配向原理（overlap and orientation principle）すなわち「化学反応の立体ダイナミクス」という基本概念の化学反応論における重要性について述べた。実際、この原理を実験的に証明するには、分子の配向を制御しつつ反応断面積を観測するという極めて高度の実験技術が要請される。私たちはこの目的を達成するため六極電場を用いた配向分子ビーム反応装置作りからはじめて、種々の反応系で分子配向効果を実験的に直接観測することに成功した。その結果、反応時間軸に沿って分子配向と反応性の密接な相互関係を波動関数レベルで解明することができた。配向分子線法を用いた「立体反応ダイナミクス」研究が、新分野として着実にその足場を固め、今後も大いなる進展が期待される。



かさい・としお

プロフィール

略歴：昭和46年3月大阪大学理学部化学科卒業。昭和53年3月博士課程単位取得修了。日本学術振興会奨励研究員。昭和54年9月理学博士学位取得（大阪大学）。米国ワシントン大学・ライス大学で博士研究員。昭和57年大阪大学理学部助手、その後、講師を経て平成7年大阪大学理学部教授、翌年大阪大学大学院理学研究科教授。平成12年岡崎国立共同研究機構分子科学研究所教授。平成14年大阪大学大学院理学研究科教授。平成22年3月定年退職。同4月より大阪大学名誉教授。その間、平成17年大阪大学工作センター長（2年間）、平成19年大阪大学科学教育機器リノベーションセンター長（2年間）を兼任。その他、国際学会「Stereodynamics 2004」組織委員長。立体ダイナミクスおよび分子線国際学会の運営委員。PCCP、Applied Surface ScienceのAdvisory Board。平成14年度日本化学会学術賞受賞。英国王立化学会フェロー（FRSC）。

界面・微粒子分析化学の方法論

大学院理学研究科教授 渡 會 仁

化学の中の分析化学の分野で研究を行って参りました。特に分離法を科学的に考えることに関心を持ち、金属イオンの溶媒抽出法における液液界面の役割や、微小作用力を利用する分析法の開発等を行いました。分離には力が必要である、力は様々な外場の勾配により発生する、という基本に従い、分子・イオン・微粒子の分離のための駆動力の研究を進めました。力は、外場だけでなく、溶媒組成の勾配からも発生することから、液液界面にも分子が吸着できることを分光学的に調べ、そして液液界面にける様々な反応の測定と解析に取り組みました。また、レーザー光泳動、誘電泳動、磁気泳動、電磁泳動等の外場の微小作用力を用いる新しい微粒子分析法を提案しました。分子に張力を作用させると、解離反応の促進や幾何異性平衡のシフトが起こることを分光分析的に明らかにしました。液液界面でのキラルな分子集合体の生成機構の解明や、磁場を利用する新しい分析法の応用については、今後の研究に期待したいと思います。これまでお世話になりました皆様に厚くお礼を申し上げます。



わたらい・ひとし

プロフィール

略歴：昭和44年東北大学理学部化学科を卒業。昭和46年同大学院理学研究科化学専攻修士課程（理論化学講座）を修了。昭和46年同大理学部化学科（分析化学講座）文部技官教育職、昭和50年助手、昭和53年学位（東北大学、理学博士）取得。昭和56年—57年アリゾナ大学フライザー教授のもと、Research Associateとして溶媒抽出の研究に従事。昭和57年6月秋田大学教育学部講師、昭和58年同学部助教授、昭和63年同学部教授に昇任。平成5年8月大阪大学理学部化学科（分析化学講座）教授に転任、平成8年同大学大学院理学研究科化学専攻教授、平成22年3月退職。平成22年4月より、大阪大学ナノサイエンスデザイン教育研究センター招聘教授。専門分野は分析化学。

生物無機化学40年と共に

大学院理学研究科教授 鈴木 晋一郎

卒研と大学院修士課程で固体触媒反応や金属錯体の配位子反応を行っていた私は、同じ金属が生体系にも含まれていることを知った。そして、博士課程ではその生体系金属の研究をしたいと考え、当時、教養部におられた故中原昭次先生の研究室の門を叩いた。ちょうどその頃、世界では生体系の金属を扱う境界領域分野として「生物無機化学」の名前が生まれていた。その分野の誕生を象徴させるような専門雑誌“Bioinorganic Chemistry”が、エルゼビア社から1971年に発刊されたからである。以来、生物無機化学は化学の中で徐々に市民権を得て現在に至っているが、私はその成長と共に約40年間研究を続けて来たことになる。固体触媒や金属錯体を扱ってきた者にとって、金属タンパク質は大変魅力あるものであったが、直ぐに研究に着手できるものでは決してなかった。そこで、活性中心のモデル錯体から始めて徐々に金属タンパク質の研究を手掛け、その分子レベルの研究をするために、各種分光学的手法だけでなく、協同研究者との協力による遺伝子操作やX線結晶構造解析の手法を用いて、「生体はどのように金属を使っているのか」という命題の解明を進めてきた。これまで主に脱窒素系金属タンパク質の基礎研究を行ったが、それらの成果は窒素化合物による地球汚染問題や、ある種の病原性細菌の制御などにも貢献できるものと信じている。



すずき・しんいちろう

プロフィール

略歴：昭和44年東京都立大学理学部化学科卒業、昭和46年東京都立大学大学院理学研究科修士課程修了。昭和49年大阪大学大学院基礎工学研究科博士課程修了し、工学博士。同年4月から日本学術振興会奨励研究員の後、昭和50年5月筑波大学化学系文部技官。昭和53年10月大阪大学教養部講師、昭和57年から1年間、Oregon Health & Science University研究員。昭和61年11月同助教授を経て平成3年4月同教授。平成6年教養部改組により理学部に配置換えとなり、平成8年大学院理学研究科教授、学際化学講座を担当。平成22年3月退職。

医療情報学と医療の科学化 —「DOのサイエンスを目指して」—

大学院医学系研究科教授 武田 裕

医療情報学の役割は、医療を病態最適制御過程とみなして医療のシステム化を図り、診療記録が共有化され、エビデンスとして活用されるデータベースを構築する。その意味において、「DOの医学」、クリニカル・サイバネティックスの実現を目指してきた。具体的には、1993年の病院移転を機に、「インテリジェント・ホスピタル」を構築し、医療現場における「ヒト、モノ、情報」のフローとストックの最適化、「患者の」診療録へのパラダイム・シフト、病院情報システム（オーダエントリ・レポート、医療画像システム（PACS）、医療文書管理システム（DACS）、データウェアハウス）を段階的に導入し、2010年4月から電子化診療記録を原本とするシステム運用を開始した。

医療情報学的マネジメントとして、医療の質向上・患者安全、病院経営管理を電子化データによるPDCAを実現した。

今後は、DOのサイエンス構築に向けて、地域レベルでのデータベース構築、知識の体系化（オントロジー、知識ベース）、医療におけるフィードバック（可観測、可制御）の体系化を次世代に期待して、最終講義を締めくくった。



たけだ・ひろし

プロフィール

略歴：昭和46年大阪大学医学部卒業後、第一内科入局。シカゴ大学臨床薬理部留学後、同54年医学博士号授与。同58年文部省学術国際局学術調査官。同60年医学部第一内科講師、同62年病院医療情報部助教授。平成10年附属病院医療情報部教授（平成13年医療情報学講座に配置換え）。同15年中央クオリティマネジメント部初代部長（兼任）、国立大学病院医療安全管理協議会初代会長、同21年医療の質・安全学会第4回大会長。平成11年国際医療情報学会大会（ロンドン）プログラム委員長、同14年同学会副会長（2期）。大学法人化以降、大阪大学財務・会計室員、病院長補佐を兼任。平成18年大阪大学中之島センター長。第21回医学会総会「いのち・ひと・夢」企画展示委員長。

肝臓病研究40年に学ぶ

大学院医学系研究科教授 林 紀夫

昭和47年に大阪大学医学部を卒業後、肝疾患の診療・研究に従事してきました。平成元年のC型肝炎ウイルス（HCV）の発見を契機に、患者試料からのPCR法を用いたウイルス検出法の開発に取り組みました。高感度PCR法、感染組織からのマイナス鎖RNAの検出法、そしてcompetitive PCRを用いたウイルス定量法の開発はいずれも世界に先駆けた成果であり、非A非B型肝炎の大半がC型肝炎であること、HCVの主要な感染臓器が肝臓であること、インターフェロン（IFN）治療による治療効果がウイルス学的に著効、再燃、無効の3つの形態をとり、IFN治療の抵抗性に治療前のウイルス量が関係することなどを見出し、C型肝炎の疾病概念の確立に貢献することができました。1990年代初頭よりIFN治療を推進し、難治例に対する長期投与の有用性やウイルス排除が肝癌発生や肝疾患関連死を抑制することを示すなど、抗ウイルス治療法の確立に取り組みました。

大阪大学では平成12年から当時第一内科、第二内科、第三内科に分かれていた消化器内科の診療の一体化が図られていましたが、平成17年から講座の臓器別再編成が行われ、消化器内科学講座の初代教授に就任しました。大阪府下、阪神間の関連病院も40以上を数え、関連施設を含めた診療と臨床研究の推進を行っています。今後、大阪における消化器内科診療のますますの充実を図るために後進の活躍と協力が必要であると感じています。平成19年より3年間、医学部附属病院長を務めましたが、先進医療施設としての評価をさらに高めることができたのは職員一同の協力の賜物であり、改めてこの場をかりて御礼申し上げさせていただきます。



はやし・のりお

プロフィール

略歴：昭和47年大阪大学医学部卒業、昭和48年8月関西労災病院内科、昭和54年米国テキサス大学医学部生化学教室研究員、昭和56年5月大阪大学助手（医学部第一内科）、和60年8月文部省学術国際局学術調査官、昭和62年8月大阪大学講師（医学部第一内科）、平成9年4月大阪大学助教授（医学部第一内科）、平成10年9月大阪大学教授（大学院医学系研究科分子制御治療学）、平成17年6月大阪大学教授（大学院医学系研究科消化器内科学）、平成19年4月大阪大学医学部附属病院長、大阪大学総長補佐、平成22年4月関西労災病院院長。日本肝臓学会理事（平成16年～平成20年理事長）、日本消化器病学会理事、日本内科学会評議員、日本アルコール・薬物医学会理事、臨床分子医学会評議員、日本消化器免疫学会理事、日本肝臓研究会幹事。厚生労働省「ウイルス性肝炎からの発がん及び肝がん再発の抑制に関する研究」班研究代表者。

新しい神経症候の考え方 — システムの不安定性は正常と異常を内在する —

大学院医学系研究科教授 佐古田 三 郎

方程式による神経症候の記述は可能か？

運動障害や感覚障害などの神経症候は医師の主観的な感覚センサで評価し言葉で記述する。従って感覚センサで得られた症候は一種のイメージであり正確さを欠いている。例えばガリレイの時代では、大砲を撃てばその弾は直線で見り、円を描き、鉛直に落下すると記載されているが、現在ではこれが誤りであることは誰でも知っている。正確に計測すれば、そこに一定の法則の存在を予知できる（重力の法則）。行動は外なる脳であり、脳内の活動が投影された動き（運動プログラムの表出）を正確に計測すれば、正常の動きの理論から障害（神経症候）を論理的に推測できる。この時点で症候は言葉による記述から方程式による記述に変更されることになる。今回私達が開発した各種計測装置でパーキンソン病患者さんを計測すると、患者の反復繰り返し運動の障害は central pattern generator（CPG：時間的協調）と muscle synergy（MS：空間的協調）を考慮することで比較的簡単な非線形方程式で記述できる可能性が出てきた。近い将来、神経症候は、決定論的要素と確率論的要素の二つを組み合わせた方程式による記述が可能になるのではないだろうか。



さこだ・さぶろう

プロフィール

略歴：昭和50年大阪大学医学部卒業、昭和59年医学博士。昭和60年大阪大学医学部助手、昭和60年コロンビア大学神経学部門留学、平成6年大阪大学医学部講師（神経内科）、平成7年助教授、平成12年同教授。平成14年大阪大学医学部附属病院臨床治験事務センター長、平成18年大阪大学医学系研究科研究公正委員会委員長、平成19年大阪大学大学院医学系研究科副研究科長。日本神経学会理事、日本神経免疫学会評議員、日本微量元素学会評議員、日本医用マスペクトル学会評議員など。

肺がん最前線の38年

大学院医学系研究科教授 川 瀬 一 郎

肺がんに対する薬物療法はこの38年間で素晴らしい進歩を遂げ、抗癌剤は今や外来で投与できるほど効果を温存した上での副作用の軽減化に成功している。一方、21世紀に入って腫瘍細胞への選択毒性が高い分子標的薬剤が臨床に登場してきた。上皮増殖因子受容体阻害剤や血管内皮増殖因子へのモノクローナル抗体がそれに該当するが、副作用が軽微な上に一部の患者には強力な抗腫瘍効果がもたらされる。

がん免疫グループの杉山教授や岡講師らが開発したWT1ペプチド免疫療法も大いに期待されたが、乳がんや脳腫瘍と異なって肺がんでは腫瘍縮小例は認められなかった。しかし進行期ではなく術後に使用すれば、将来の再発が抑制できる可能性は大いに高い。

呼吸器グループでは、立花講師らが癌転移研究の一環として細胞接着関連分子テトラスパニンの研究を進めてきたが、彼らは微生物病研究所の目加田教授との共同研究で代表的なテトラスパニン分子であるCD9とCD81を同時に欠損したマウスがヒトの高齢者慢性閉塞性肺疾患（COPD）に極めて類似した肺気腫と骨粗鬆症を呈することを発見した。今後のCOPD研究に新たな展開をもたらすものとして、その発展が大いに期待される。



かわせ・いちろう

プロフィール

略歴：昭和46年大阪大学医学部卒業。同年大阪大学医学部附属病院で臨床研修開始。昭和47年市立堺病院内科に勤務。昭和48年国立がんセンター病院内科（呼吸器）勤務。昭和53年大阪大学医学部第三内科勤務。昭和55年米国フレッドハッチソン癌研究センターの基礎免疫学部門に留学。昭和57年大阪大学医学部第三内科に勤務。平成4年大阪大学第三内科講師。平成6年大阪府立羽曳野病院第二内科部長。平成7年大阪大学医学部非常勤講師。平成10年大阪府立看護大学非常勤講師、大阪大学医学部臨床助教授。平成11年大阪府立羽曳野病院医務局長。平成12年大阪大学医学部臨床教授。平成13年大阪大学大学院医学系研究科分子病態内科教授。平成17年講座の再編により講座名が呼吸器・免疫アレルギー・感染内科学に改変され、平成19年大阪大学医学部附属病院副院長。平成22年大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター院長に就任、現在に至る。学会 日本内科学会認定医 日本呼吸器学会認定医、同指導医 日本気管支学会認定医 日本内科学会近畿支部評議員 日本臨床免疫学会評議員 日本呼吸器学会評議員 日本肺癌学会評議員 日本臨床腫瘍学会評議員 日本結核病学会評議員 American Association of Cancer Research Corresponding Member

「脳とくすり」に魅せられて

大学院薬学研究科教授 馬場 明道

平成22年3月31日、定年退任を迎えられました、馬場 明道先生の定年退任記念最終講義が、「脳とくすり」に魅せられて と題し、3月15日、薬学部内の講義室にて開催されました。約320名もの方々にご来聴いただきました。講義では、先生の36年間にわたる研究のメインテーマである、‘新規創薬標的分子の探索・機能評価’について、薬理学の過去と現在や、様々なラボ内・外のエピソードを交え、研究成果の一端を紹介されました。先生は、神経薬理学に分子生物学を取り入れるなど、常に最新の研究手法を駆使した創薬基礎研究により、数々の新しい疾患関連分子や創薬シーズを見出し、臨床への橋渡しにも成功して来られました。

退任後は、兵庫医療大学副学長、日本薬学会副会頭など、多くの要職に就かれますが、ご自身の研究も継続される予定で、今後も、引き続き指導的な立場で、薬学領域の教育と研究を推進されます。講義の最後で、3回生の教え子が教授室を訪問した際の話をされ、「素晴らしい学生たちに、感謝！」の言葉で講義を締めくくられたことが、とても印象的でした。

(文責：馬場明道教授定年退任記念事業会事務局 橋本 均)



ばば・あけみち

略歴：昭和44年大阪大学薬学部を卒業後、同薬学研究科に進学、昭和49年同文部技官に任官。昭和50年、同助手に昇任後、2年間米国エール大学医学部に留学。昭和53年1月大阪大学講師、同年6月同助教授を経て、平成3年同教授に昇任。学内では、平成7年からは6年にわたり大阪大学評議員を併任、平成9年から平成11年、また平成15年には、大阪大学薬学部長・研究科長として、薬学部の大学院重点化を完成させるなど、薬学部・薬学研究科の発展に尽力した。平成12年、大阪大学総長補佐、平成13年からは、大阪大学の法人化に向けた検討委員会の中心メンバーの一人として法人化の制度設計を担当し、平成16年より平成19年まで、大阪大学理事・副学長を歴任。この間、とくに評価・広報担当役員として、本学の組織評価を完成させるなど、大阪大学の管理運営と発展に大きく貢献した。学外では、日本薬理学会理事長、日本薬学会理事、日本神経化学会理事などを務めた。

プロフィール

ロボティクス・メカトロニクスに関する研究からその実用化へ向けて — 上肢リハビリ支援ロボットの研究開発 —

大学院工学研究科教授 古庄 純次

平成22年3月6日(土)、約7年ぶりの新大阪、御堂筋線、千里中央を懐かしく経由し、太陽の塔を横目に眺めて、阪大病院前でモノレールを降りました。幾分雨が降っていたが、余裕をもって会場に到着した。古庄教授の最終講義が行われる銀杏会館である。準備の時間を考えてもまだ時間があったため、実験室まで歩いてみた。そのたまたまは、私がいたときとは変わらなかったが、中身は幾分異なり、多くの実験装置が引越しを前に雑然とあふれていた。しかしその一方、なんとなく懐かしさも感じた。

銀杏会館で、現役学生さんと最終講義の会場準備をしていると、阪大の諸先生方、同窓のOB・OGたちの懐かしい顔ぶれが集まってきた。挨拶や昔話などをしていたら、開始時間が迫ってから、椅子が足りなくなり始めたことに気付き、急遽他から椅子を集めることになった。学内外からおよそ70名の方々にお集まり頂いた。

古庄教授の最終講義は、最近取り組まれているリハビリ支援ロボットを中心として、歩行ロボットの研究、駆動伝達系の重要性、電気粘性流体を用いたデバイス開発など、これまでの充実した研究内容であり、1時間の講義時間はあっという間に終盤を迎えてしまった。最後にいくつか質疑が行われた。もともと制御の研究室に居られて、歩行ロボットなどの運動制御に関心を持って研究されてきたことが、今のリハビリ支援にもつながっているという話が印象に残った。リハビリも人の運動制御そのもので興味が尽きず、またリハビリ支援ロボットの実用化も間近に見えてきたこともあり、これからも続く古庄教授の研究生活が目に見えた。それと同時に、私自身もますます頑張ろうと勇気を頂いた。(文責：武居直行)



ふるしょう・じゅんじ

略歴：昭和45年大阪大学工学部機械工学科卒業。昭和47年同修士課程修了。昭和50年同博士課程を単位修得退学し、昭和51年工学博士の学位取得。同年4月大阪大学工学部助手。昭和56年10月岐阜大学工学部講師。昭和58年2月同助教授。平成3年4月電気通信大学電気通信学部教授。平成8年4月大阪大学工学部教授。平成10年4月同大学大学院工学研究科教授。平成16年同大学臨床医工学融合研究教育センター教授(兼任)、平成19年グローバルCOEプログラム「予測医学基盤創成」事業推進担当者。平成22年大阪大学名誉教授、福井工業大学工学部教授

プロフィール

流されて環境工学39年

大学院工学研究科教授 加賀 昭 和

「工学部環境工学科」は、日本が深刻な公害問題に直面していた1968年に新設され、2009年3月に最後の学部生を送り出して、キーワードを拡張して再編された新学科「環境・エネルギー工学科」への変身を完了した。環境工学科の設立後間もない時期に助手に採用された私は教員生活39年間に環境工学とともに歩み、その間、研究室の名称も、「空気浄化工学」、「気圏環境工学」、「共生環境評価」と変貌した。環境工学が、社会の環境問題への認識に対応して変化するべき学問分野であることから、エンドオブパイプテクノロジーに始まって、地域環境、広域環境を扱うことを標榜した研究室名へと変貌したのは、ふりかえてみれば時代の流れの中での必然であった。その流れの中で私は、環境の流体メディアに流される汚染物質の動態解析を中心にしつつ、仲間の先生方、学生諸君とともに、関連するさまざまな研究テーマに取り組んできた。最終講義では、それらのテーマが何から発し、どのような成果があったかを、時代の流れとともにご紹介し、時代に流される中で私は何にこだわってきたのかをお話した。最後に、研究生生活の終着点にたどりついた今は思い残すこともなく、「帰心矢のごとし」の心境を、李白の七言絶句の結句「輕舟已過萬重山」に託して講演を終えた。



かが・あきかず

プロフィール

略歴：昭和46年3月大阪大学大学院工学研究科機械工学専攻修士課程を修了、同年4月大阪大学助手（工学部環境工学科）、昭和60年10月工学博士（大阪大学）の学位を取得、昭和63年6月助教授（工学部環境工学科）、平成12年8月教授（工学研究科環境工学専攻）、専門は大気環境、環境中微量物質の動態、画像流体計測など

励起子とともに四十年 — 基礎工学者は何を見たか —

大学院基礎工学研究科教授 伊 藤 正

トランジスタとレーザーの黎明期に科学のおもしろさに目覚め、大学に入って、光と物質の係わりを研究する光物性学を知りました。特に、半導体に光を当てたときに生まれる電子と正孔の対（励起子）の理論が、アボガドロ数の結晶電子群に対して数学的に美しく処理できることに興味を覚え、以来、励起子の基礎科学とその光材料としての応用技術の研究に取り組んできました。半導体試料作製の大切さを学び、励起子効果の顕著なⅠ－Ⅶ族、Ⅱ－Ⅵ族半導体を中心とする自作のバルク単結晶、超薄膜、超微粒子を対象とし、一方でレーザーを中心とする様々な分光実験手法の開発を手掛けつつ、単独励起子・多励起子の特性、格子振動やスピンとの相互作用、励起子をナノメートルの空間に閉じ込めた際の量子サイズ効果と新奇光物性が生み出す超高速応答光機能性材料としての応用など、垂流でない仕事を心掛けました。



研究ではある程度の発想は示しても、後は実験結果を見て自分で考えることを重視しましたので、研究成果の大部分は阪大・東北大・阪大の大学院生、学部生、そして研究室スタッフの皆さんの努力と智慧によるものです。助手時代のフランス留学をきっかけに始まった海外の多くの研究者との共同研究は、国内共同研究と共に、多角的な視点を研究に持ち込むのに大いに役立ったと思います。

振り返ってみて、励起子研究一筋に打ち込めたのは、「守備範囲の狭い専門家ではなくて、十分な基礎科学の素養を持ち、かつ豊かな応用のセンスを持った柔軟性のある人材、指導的技術者を養成することを目指し、科学と技術の融合を図る」という基礎工の基本理念を一基礎工学者として実践したいとの思いがあったからでしょう。その意味で、物理学会領域5に微粒子セッションを拓くなどナノサイエンス・ナノテクノロジーに守備範囲を広げられたことは大変幸運であったと思います。

いとう・ただし

プロフィール

略歴：昭和44年大阪大学基礎工学部材料工学科卒業、昭和49年大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻博士課程修了、工学博士。日本学術振興会奨励研究員、東北大学理学部物理学科助手、助教授を経て、平成5年東北大学大学院工学研究科応用物理学専攻教授。平成10年大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻物性物理科学分野教授、改組により物質創成専攻未来物質領域教授。平成22年大阪大学ナノサイエンスデザイン教育研究センター特任教授。学内では、大阪大学研究推進室員、大阪大学ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構副機構長、同企画推進室長、大阪大学ナノサイエンスデザイン教育研究センター長、基礎工学研究科副研究科長を歴任。学外では、日本学術振興会各種専門委員、日本物理学会領域5代表、東京大学物性研究所運営協議会委員などを歴任。現在、科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業（CREST）「光展開」研究総括。金属研究奨励賞受賞。

人にやさしいヒューマンインタフェースを目指して

大学院情報科学研究科教授 岸 野 文 郎

豊かな高度情報化社会を実現するためには、単なるコンピュータハード、ソフト技術の進展だけではなく、情報そのもの（コンテンツ）が重要であり、かつ、これを使う立場のユーザの視点に立った研究が重要になるとの認識のもと、人間中心で人に優しいインタフェースの実現を目指して研究を進めました。具体的成果として、ブロックによる実世界指向の双方向インタフェースである ActiveCube、IllusionHole と名付けた協調作業型 3 次元ディスプレイ、実写映像から作成する自律ビデオエージェントなどがあり、まさに標題通り「人にやさしいヒューマンインタフェースの実現」に貢献できたのではないかと考えています。また、グローバル COE プログラム「アンビエント情報社会創成拠点」の事業推進担当者の一員として、アンビエントインタフェースの一例としてマルチディスプレイシステムなどの研究を進めました。

このように研究活動を行い、成果を上げることができたのはスタッフ、学生、関係者の皆様のお陰であり、この場をお借りしてお礼申し上げます。



きしの・ふみお

プロフィール

略歴：昭和 46 年名古屋工業大学大学院電子工学専攻修士課程修了。同年、日本電信電話公社（現 NTT）電気通信研究所入社。同ヒューマンインタフェース研究所において、高速・広帯域通信システムの研究・実用化、画像処理の研究に従事。平成元年国際電気通信基礎技術研究所（ATR）に出向。ATR 通信システム研究所能処理研究室長。臨場感通信、画像処理などの研究に従事。平成 8 年大阪大学大学院工学研究科教授、平成 14 年より同大学大学院情報科学研究科教授。ヒューマンインタフェース、認知工学、バーチャルリアリティについて研究。この間、平成 15 年 8 月から平成 17 年 8 月まで、サイバーメディアセンター長（大阪大学評議員）を併任。学会活動としてバーチャルリアリティ学会会長、ヒューマンインタフェース学会副会長、映像情報メディア学会副会長、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループ（HCG）委員長などを務めた。

多様な繋がり（人、研究）

大学院情報科学研究科教授 石 井 博 昭

大阪府立豊中高校、京都大学工学部数理工学科入学、学部、同修士、博士課程、大阪大学工学部応用物理学学科に助手として採用、同助教授、岡山大学工学部情報工学科教授に異動、大阪大学工学部に復帰、大学院重点化を経て、大学院情報科学研究科創設による異動そして退職するまでに、多様な人とのつながりがどのようにでき、そのことが研究の発展に如何に役立ったかを述べた。世話になった方々への感謝と学生や若手の研究者にメッセージを送った。

特に大阪大学での博士後期課程での学生との共同研究が、新しい研究テーマの開発、研究の発展に如何に役立ったかを研究例を挙げてお話しした。本当に博士後期課程も含めた学生との出会いにも恵まれ、楽しく研究をさせて頂いた。一方様々な外国の研究者や留学生とも多様な機会でも知り合い、そのことが共同研究や国際会議につながっている。

以上 30 有余年に亘る大阪大学での教育、研究生活が充実していたことに感謝しつつ、人とのつながりと研究でのつながりが密接に結びついているお話をさせていただいた。



いしい・ひろあき

プロフィール

略歴：昭和 46 年 3 月京都大学工学部数理工学科卒業。昭和 51 年 3 月京都大学工学研究科数理工学専攻博士課程単位取得退学。同年 4 月大阪大学工学部応用物理学学科助手、同助教授を経て、平成 2 年 4 月岡山大学工学部情報工学科教授。平成 5 年 4 月大阪大学工学部教授。重点化による大学院工学研究科への所属替えを経て、平成 14 年 4 月大学院情報科学研究科情報数理工学専攻に異動。平成 22 年 3 月大阪大学退職。現在関西学院大学理工学部数理工学科教授。工学博士。専門はオペレーションズ・リサーチ全般とその応用。モットーはどんな小さいことでも独創性をもつこと。趣味は特になが、学生や若手の研究者と話をすることが楽しみの 1 つ。家族は妻と 2 女。

朝鮮近現代研究 — 朝鮮語文献購読 —

世界言語研究センター教授 小野田 求

記念講義（最終講義）は、「朝鮮近現代研究—朝鮮語文献購読—」と題して行った。

表題を「朝鮮近現代研究」としたのは、朝鮮近現代の歴史・社会・文化の研究・教育が専門であることによる。

また、副題として「朝鮮語文献購読」をつけた理由は、朝鮮語文献購読が、朝鮮語と朝鮮語を基底とする文化などに関する教授・研究を行うとする外国語学部朝鮮語専攻のありかたを、最も集中的に具体化したものであるからである。

講義においては、朝鮮語文献として、「朝鮮3・1独立運動」に関するものを使用した。3・1独立運動は、朝鮮民族が日本の植民地支配に反対して1919年3月1日から4月初旬ごろまで展開した、全民族的な植民地解放運動である。今日においても、朝鮮民族にとって大きな意義を有している運動である。

授業の具体的進行は、まず、受講生が朝鮮語文献の音読、日本語翻訳を行った。次いで、使用されている朝鮮語の単語と文法、文献の内容などについて教授した。これらの過程において、学生たちから質問も受け、それに答えた。



おのだ・もとむ

プロフィール

略歴：昭和43年大阪外国語大学外国語学部朝鮮語学科卒業、昭和48年大阪大学大学院法学研究科修士課程修了。昭和50年大阪外国語大学外国語学部朝鮮語学科助手、以後、同講師、助教授を経て、平成6年教授。平成19年10月大阪外国語大学と大阪大学との統合に伴い、大阪大学世界言語研究センター教授（朝鮮語専攻所属）。

研究分野：朝鮮近現代の歴史・社会・文化、特に、近代朝鮮における日本の植民地支配、現代朝鮮の南北関係、近現代朝鮮の米国との関係。

著書：『大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国両国関係の研究』（明石書店、2005年）、『年表 戦時中日本の植民地朝鮮公布法令』（ソウル書林、2009年）、その他専攻関係論文多数。

平成22年春の叙勲受章者一覧

○叙勲

大阪大学名誉教授（元基礎工学部長）
 大阪大学名誉教授（元理学部教授）
 大阪大学名誉教授（元工学部教授）
 大阪大学名誉教授（元工学部教授）
 大阪外国語大学名誉教授
 大阪外国語大学名誉教授
 元大阪大学事務局長
 元大阪大学学生部次長

福岡 秀 和 瑞宝中綬章
 桑 田 敬 治 瑞宝中綬章
 長谷川 晃 瑞宝中綬章
 南 茂 夫 瑞宝中綬章
 井 本 英 一 瑞宝中綬章
 加賀谷 寛 瑞宝中綬章
 岡 林 隆 瑞宝中綬章
 忠 軍 治 瑞宝双光章

以上

（総務部人事課）

橋本守准教授「平成21年度中谷賞」受賞

基礎工学研究科機能創成専攻の橋本守准教授が、平成21年度中谷賞を受賞致しました。

この賞は、財団法人中谷電子計測技術振興財団が電子計測技術分野における先導的技術開発を促進するための事業の一環として、生体に関する電子計測技術発展に寄与する新規性のある開発的研究、あるいは対象研究分野への波及効果が広く期待できる独創性のある基礎的研究、あるいは有益な実用化が期待できる応用的研究に与えられるものです。

今回受賞対象となった研究は、「コヒーレントラマン散乱顕微鏡による生体分子の無染色な高解像・高速観測」です。光学顕微鏡によって細胞などの生体試料を観測する場合、通常染色を行います。しかしながら、染色は色素分子を目的分子に付加するためその機能を阻害することがあります。このため、無染色に目的分子を見分け観測できる手法の開発が望まれていました。ラマン散乱分光は、分子の種類や構造に敏感な分子の振動を可視化する手法で、無染色イメージングの有効な手法ではありますが、ラマン散乱分光は微弱なためそのイメージングには長時間の観測時間が必要とされます。そこで、高い信号光強度が得られる非



橋本准教授（左）と菅野中谷財団理事長（右）

線形ラマン散乱分光を顕微鏡下で行い高速なイメージングを行う手法を開発しました。また、微細な金属探針先端に光を入射し、その探針先端での非線形ラマン散乱分光を行うことで、回折限界を越えたイメージングにも成功しました。受賞式は、2010年2月26日に東京会館で行われました。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

「平成22年度文部科学大臣表彰」受賞

平成22年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞の発表があり、表彰式が4月13日(火)に京王プラザホテルにて行われました。

本賞は科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、もって我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的に定められたものです。

理学研究科の川口周准教授が、若手科学者賞を受賞しました。

今回の受賞は「標準的高さの研究」に関するものです。川口准教授が、代数多様体の写像に関する代数的・数論的性質の研究を、有理点の「大きさ・複雑さ」を測る量である高さを精密化した標準の高さを用いて進めたことが評価されました。

(理学研究科・理学部)



医学系研究科博士課程3年の西谷真人医師が、科学技術賞（開発部門）を受賞しました。

受賞テーマは、「抗疲労効果を有する家庭用空調及びその実証プロトコルの開発」です。西谷医師らは、これまで主に機能性食品を題材にその抗疲労効果・疲労軽減作用に関する研究を進めてきており、今回、これらの研究から明らかとなってきた疲労の分子メカニズム、さらにはヒトにおける疲労度の臨床的評価法を駆使することにより、空調等の家庭用器具の抗疲労効果を臨床試験により実証しました。本研究は、これまでその医学的有用性の実証が困難であった家庭用空調等の家電及び器具のヒトへの有用性の検証法に一筋の道を開いたものとして高く評価されました。また本研究により、これまで構築してきた疲労評価法が、機能性食品のみならず家庭用器具等の臨床的評価にも応用できることが示され、今後、医薬品の抗疲労効果実証など、更なる研究の広がり・発展が期待されます。

(医学系研究科・医学部)



工学研究科の福住俊一教授が、科学技術賞（研究部門）を受賞しました。今回の受賞は、「人工光合成システムの研究」が対象となりました。福住教授は、独創的な人工光合成分子を開発し、電荷分離寿命の世界記録を次々と更新し、それを光触媒として用いて水素発生反応を含む様々な環境調和型の反応プロセスを開発しました。また、水素の貯蔵運搬とCO₂削減を同時に行う方法として水素とCO₂からギ酸（液体）を生成させ、必要なときに水素に戻す触媒システムを開発し、さらに光捕集と電荷分離とを組み合わせた新しいタイプの超分子太陽電池を開発しました。これらの研究成果は、地球環境エネルギー問題の根本的解決に貢献することが期待されるものとして評価されました。

(工学研究科・工学部)



平田雄志名誉教授（基礎工学研究科）が、中尾一成氏（筆頭受賞者、元三菱電機㈱、福井工業大学）、池内正毅氏（元三菱電機㈱・三菱電機冷熱プラント㈱）、弓倉恒雄氏（元三菱電機㈱、三菱電機冷熱プラント㈱）、尾崎永一氏（三菱電機㈱）と共に科学技術賞（研究部門）を受賞しました。業績は「排熱回収型高昇温吸収ヒートポンプの研究」です。本技術は高温レベルの産業用プロセス熱源の達成と低温機器の利用範囲拡大を可能とする革新的省エネルギー技術であり、平田名誉教授は、中尾氏と共に研究成果の新奇性と普遍性について学術面で貢献しました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)



左より、平田名誉教授、尾崎氏、中尾氏、池内氏、弓倉氏

基礎工学研究科の棕田秀准教授が、「核磁気共鳴法を用いた強相関電子系超伝導物質の研究」の業績により、若手科学者賞を受賞しました。

従来の超伝導理論では理解できない新型超伝導体が近年続々と発見され解明が急がれる中、同准教授は、最も超伝導転移温度の高い銅酸化物において、多層型構造にすると銅酸素面が理想的な平坦性をもつことに着目し、その磁気超伝導相図を明らかにしました。超伝導の起源に反強磁性が深く関わっていることを強く裏付ける初めての実験的証拠を示したことが評価されました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)



免疫学フロンティア研究センターの木下タロウ教授と微生物病研究所の前田裕輔准教授が、「蛋白質の糖脂質修飾に働く遺伝子群の解明とその医学応用研究」の業績により、科学技術賞（研究部門）を受賞しました。本成果は、GPI アンカーの機能欠損変異細胞やマウスを樹立・解析することによって、GPI アンカーの生物学的意義の解明とりわけ疾患の病因・病態の更なる解明や診断・治療といった医学分野に寄与するものと期待されています。

(微生物病研究所、免疫学フロンティア研究センター)



木下教授(左)、前田准教授(右)

免疫学フロンティア研究センターの石井 優准教授が、若手科学者賞を受賞しました。対象となったのは、「骨組織内のライブ光イメージングによる破骨細胞機能の研究」で、多光子励起顕微鏡を用いて骨組織内をライブ光イメージングする方法論を開発し、生きた骨組織での破骨前駆細胞の観察に世界で初めて成功し、これにより破骨前駆細胞の遊走が血中脂質メディエーターや骨髄内ケモカインによって動的に調節されているという重要な事実を発見した点が評価されました。

この研究成果は、破骨前駆細胞の遊走・位置決めを標的とした新しい骨疾患治療の可能性を示しており、超高齢社会を迎えて本邦で増加の一途を辿っている骨粗鬆症に対する画期的な治療法の開発につながると期待されています。



右端が石井准教授
(免疫学フロンティア研究センター)

産業科学研究所の山口明人教授（生体情報制御学研究分野）が科学技術賞（研究部門）を、谷口正輝准教授（バイオナノテクノロジー研究分野）、能木雅也助教（先端実装材料研究分野）が若手科学者賞を受賞しました。

山口教授は、異物排出タンパク構造・機能・制御と生理的役割に関する研究の業績が高く評価されました。また、谷口准教授は、ナノ分子デバイスの自己組織化プロセスと電気特性の研究が、能木助教は、セルロースナノファイバー透明材料の研究が高く評価されての受賞となりました。



山口教授



谷口准教授



能木助教

(産業科学研究所)

蛋白質研究所の田中秀明助教（蛋白質構造生物学研究部門・蛋白質結晶学研究室）が、若手科学者賞を受賞しました。

田中助教は「巨大な超分子ボルトの構造決定の研究」の業績が評価され、受賞となりました。

田中助教は細胞内にある分子量約 1000 万の巨大な超分子・ボルトの構造を決定し、その研究成果は米国学誌「サイエンス」に掲載されるなど国際的にも高い評価を得ています。ボルトは、ヒトが緑膿菌に感染した時、細胞が緑膿菌を死滅させるのを助ける一方で、がん細胞では抗がん剤の効果を抑制するというヒトにとっては不都合な働きをすることも知られています。今後の研究が進むことにより、がんや感染症の効果的な治療薬の開発等につながることが期待されています。

(蛋白質研究所)



西川敦助教「第27回(2009年秋季)応用物理学会講演奨励賞」受賞

工学研究科マテリアル生産科学専攻(マテリアル科学コース)結晶成長工学領域(担当:藤原康文教授)の西川敦助教が、「第27回(2009年秋季)応用物理学会講演奨励賞」を受賞しました。

この賞は、応用物理学会の春季及び秋季の学術講演会において、応用物理学の視点から極めて価値のある一般講演論文を発表した若手会員(33才以下)に授与されるものです。

今回対象となった講演は、「p-GaN/Eu 添加 GaN/n-GaN 発光ダイオードによる室温電流注入赤色発光(著者:西川敦, 川崎隆志, 古川直樹, 寺井慶和, 藤原康文)」であり、有機金属気相エピタキシャル法による GaN 層へのユーロピウム(Eu)の添加に成功し、世界に先駆けて Eu 添加 GaN 層を活性層とする発光ダイオードの室温電流注入発光を実現したことが高く評価されました。

今回は2009年秋季学術講演会(富山大学)で発表された621件の申請講演の中から36名が選出されました。なお、本研究は科学研究費補助金学術創成研究費「希土類元素添加の精密制御による物性・機能性の開拓」(研究代表者:



藤原康文教授)とG-COEプログラム「構造・機能先端材料デザイン教育研究拠点」(拠点リーダー:掛下知行教授)のもとで推進されました。

授賞式は、3月17日(水)に東海大学松前記念館講堂において行われました。

(工学研究科・工学部)

掛下知行教授「日本金属学会 第49回谷川・ハリス賞」受賞

工学研究科マテリアル生産科学専攻の掛下知行教授が、「日本金属学会 第49回谷川・ハリス賞」を受賞し、その授賞式が、日本金属学会春期大会開催中の3月28日(日)に筑波大学において行われました。

谷川・ハリス賞は、高温における金属学の基礎的分野または工業技術分野の発展に貢献した研究者に授与されるものです。

受賞研究は「高温を含む環境下における材料の相変態ならびにそれに伴う組織形成に及ぼす磁場効果」であり、(1)鉄基合金の γ - α 変態温度に及ぼす磁場効果(2)不規則-規則変態に伴うバリエーション形成に及ぼす磁場効果(3)オーステナイト系ステンレス鋼の相安定性に及ぼす鋭敏化熱処理の影響(4)マルテンサイト組織に及ぼす磁場効果等につき、おもに熱力学、結晶学、磁気工学等の観点から明快な議論を展開したとして、その学術成果が高く評価されました。

尚、本研究は、掛下教授がリーダーを務めるグローバル



COEプログラム「構造・機能先進材料デザイン教育研究拠点」のもとで推進されました。

(工学研究科・工学部)

前原鈴子さん、宮川拓士君「第6回・日本機械学会バイオエンジニアリング部門フェロー賞」受賞

基礎工学研究科・機能創成専攻・生体工学領域博士前期課程1年の前原鈴子さんと同2年の宮川拓士君が、第6回・日本機械学会バイオエンジニアリング部門フェロー賞を受賞しました。この賞は毎年秋に行われる同部門バイオフロンティア講演会で優れた講演発表を行った大学院生に対して授与されるもので、今回は2名が選出され、ともに大阪大学の院生でした。

受賞した前原さんと宮川君の講演題目はそれぞれ「第2高調波発生顕微鏡による培養軟骨の品質評価」と「力学的負荷およびビタミンK2摂取による発育期ラット皮質骨質への影響について」です。前者は培養軟骨が産生するコラーゲンを第2高調波発生顕微鏡によって観察することで、培養軟骨の非侵襲な品質評価を試みる研究であり、高品質培養細胞作成への貢献が高く評価されました。また後者は若年ラットを用いて力学的環境とビタミンK摂取が発育期の骨形成に与える影響について研究したもので、小児骨折率増加の原因を探る上で極めて重要な研究であることが評価されました。



牛田多加志バイオエンジニアリング部門長から表彰を受ける両名

授賞式は今年1月9日に岡山市で開催された第22回バイオエンジニアリング講演会懇親会場において行われました。若い二人の今後の活躍が期待されます。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

小林茂教授「日本地理学会賞(優秀賞)」受賞

文学研究科文化動態論専攻共生文明論講座(文化形態論専攻人文地理学講座兼任)の小林茂教授が日本地理学会賞(優秀賞)を受賞しました。

今回の受賞は、小林茂教授編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域：「外邦図」へのアプローチ』(B5判、全508頁、大阪大学出版会、2009年2月刊)を対象としたものです。同書は、第二次大戦終了時以来、大学、研究機関、図書館などに未整理のまま死蔵されていた外邦図を組織的に整理・保存し、その作製過程や外邦図の意義、廃棄されなかった経緯など、外邦図に関する多面的な研究を行った成果をまとめたもので、従来、断片的な研究にとどまっていた外邦図研究に関して、体系的にまとめあげた学術的価値の高い最初の刊行物として認められ、広く社会的関心を高める上でのかっけを与えたとして評価されました。



授賞式は日本地理学会2010年春季学術大会中の3月27日(土)に、法政大学にて行われました。

(文学研究科・文学部)

大阪市長特別表彰受賞

大阪の科学技術の発展と国際的な地位の向上に大きく貢献した人物として、岸本忠三本学大学院生命機能研究科寄附講座教授（元大阪大学総長）、平野俊夫本学大学院医学系研究科長、早石修大阪バイオ研究所理事長、中西重忠大阪バイオサイエンス研究所所長、山中伸弥京都大学iPS細胞研究所所長の5名が大阪市長特別表彰を受けました。岸本、平野両氏は共同で生理活性物質インターロイキン6を発見し、リウマチなどの炎症性疾患の研究で先駆的役割を果たし、昨年クラフォード賞を受賞したことが評価されての表彰です。

人体は、病原微生物などの異物が体内に入ってくると、異物を感知する細胞が反応してタンパク質サイトカインを分泌し、サイトカインが標的の細胞に働きかけることにより免疫活動が行われます。岸本、平野両氏は、サイトカインの一種であるインターロイキン6を発見するとともに、インターロイキン6の異常で関節リウマチなどの自己免疫疾患が発症する事を明らかにしました。これら一連の基礎的な研究成果は、関節リウマチなどの治療に画期的な効果を発揮する我が国初の抗体医薬の開発につながっています。

表彰式は平成22年4月23日（金）に大阪市公館にて行われました。岸本氏は外国出張のため、4月20日（火）に表彰を受けました。平松市長から、賞状と記念品が授与された後、市民向けに公開された記念座談会が開催されました。中西重忠氏、山中伸弥氏と平野氏の3人による座談会で、研究のあり方を決して流行に捕われる事なく、城攻めに例



平松大阪市長から表彰を受ける岸本教授



記念座談会の様子

え「本丸を突け」等、わかりやすい話の中で表彰者の研究歴や科学技術の未来像が示されました。

（医学系研究科・医学部、生命機能研究科）

基礎工学研究科真島和志教授・大嶋孝志准教授 「第9回グリーン・サステナブルケミストリー賞文部科学大臣賞」受賞

基礎工学研究科・物質創成専攻・機能物質化学領域の真島和志教授と大嶋孝志准教授（現九州大学薬学研究院教授）が、2009年度の第9回グリーン・サステナブルケミストリー賞 文部科学大臣賞を受賞しました。この賞はグリーン・サステナブルケミストリーネットワークが、2001年より日本におけるグリーン・サステナブルケミストリーの推進への貢献に対して授与する賞であり、特に学術の発展・普及に貢献した優れた業績に対して文部科学大臣賞が授与されるものです。

受賞した真島教授と大嶋准教授の業績は、「多核金属クラスター触媒による環境調和型直接変換反応の開発」であり、亜鉛イオンを4個含む亜鉛四核クラスター触媒を新規に開発し、従来目的物に対して当量以上の廃棄物を生じていたエステル化反応や複素環構築反応などの合成プロセスを、副生物が水や低級アルコールのみとなる環境調和型の合成プロセスへと変換することを可能にした研究が、グリ



文部科学大臣賞を受ける真島教授（中）と大嶋准教授（右）

ーン・サステナブルケミストリーへの貢献が大きいと評価されました。

表彰式は今年3月4日に東京の如水会館にて行われ、賞状と楯が贈られました。また、3月5日の第10回GSCシンポジウムにおいて真島教授が受賞講演を行いました。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

大阪大学共通教育賞表彰式挙行

大学教育実践センターでは、5月18日(火)に総長室において平成21年度第2学期大阪大学共通教育賞の表彰式を行いました。

この大阪大学共通教育賞は、全学共通教育の授業を担当する本学教員及び非常勤講師を対象として、優れた授業を実践した教員、優れた教科書等を著した教員、全学共通教育の実践について優れた著述を行った教員、並びに全学共通教育の実施運営に顕著な功労のあった教員を表彰することによって、共通教育の質的向上を図ることを目的に平成14年度に制定されたもので、今回が16度目の表彰となりました。この顕彰制度が教育評価の先駆的な試みとして、本学の教育の発展に寄与できることを願うものです。

大阪大学共通教育賞の選考は、全学の教員及び学生を対象に行ったアンケート結果に基づき、選考委員会において、教育上の多大な努力や優秀な教育技術等を総合的に評価され、今回は5名の教員が選出されました。

表彰式では、今回10度目の受賞ということで、共通教



育賞特別賞を受賞された言語文化研究科 日野信行教授に鷲田総長から表彰状と記念品の授与が行われ、その後の懇談では、小泉理事・副学長、工藤大学教育実践センター長、眞鍋副センター長、小田事務長も列席し、本学における語学教育のさらなる充実について語られ、日野教授の活躍に期待が寄せられました。

平成21年度第2学期 大阪大学共通教育賞受賞者及び受賞理由一覧

【受賞対象カテゴリー】

カテゴリー1：優れた授業を実践した教員

カテゴリー3：共通教育実践のための優れた著述を行った教員

カテゴリー2：優れた教科書等を著した教員

カテゴリー4：共通教育の運営に顕著な功労のあった教員

【特別賞】

氏名	所 属 名	受賞 カテゴリー	受 賞 理 由
日野 信行	言語文化研究科 教授	1	外国語教育科目「英語（Reading）」の授業でパソコンを使用し、最新の世界のニュースを題材にした授業が学生にはたいへん刺激的であった。まず授業の最初に英語のニュースを聞き、内容を理解してからネット上でその記事を読むというやり方が英語力向上に効果的であった。英語力とともに、学生の教養を高めるのにも格好の授業であった。また国際的な多角的な視野を広げるのにも役立った。

【初受賞】

氏名	所 属 名	受賞 カテゴリー	受 賞 理 由
鈴木晋一郎	理学研究科 教授	4	教養部時代以来、全学共通教育機構、大学教育実践センターの時期を通じて、つねに化学教育の運営に中心的な役割を担ってきた。各部署に分散している化学担当教員に対する連絡方法の確立や、他の理系科目担当教員との協力体制の確立に寄与した。学生実験予算小委員会の委員長を務め、予算の効果的な配分にも努力し、各学生実験の内容の向上に大きく貢献した。

【再受賞】

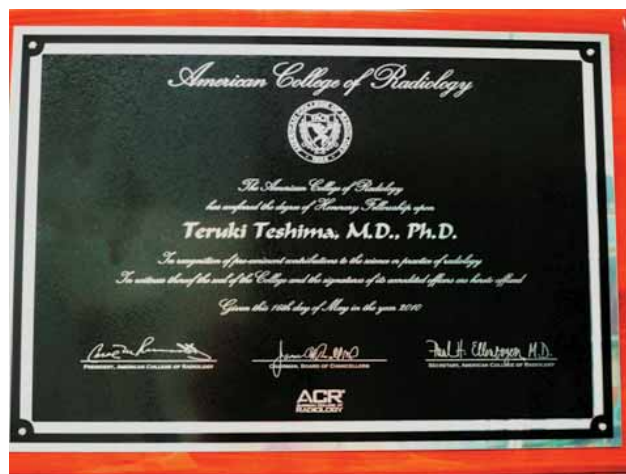
氏名	所 属 名	受賞 カテゴリー	受 賞 理 由
岩居 弘樹	大学教育実践 センター 教授	1	外国語教育科目「ドイツ語初級Ⅱ」ならびに国際教養科目2「地域言語文化演習」における、パソコンを用いたドイツ語の授業が独創的であり、他の授業では体験できないような授業が学生に好評であった。教え方も丁寧でわかりやすく、言語学習の楽しさが学生によく伝わった。
谷口真由美	非常勤講師	1	基礎教養科目1「日本国憲法」の授業において、法学を学んでいない学生にも興味を湧いてくるような授業内容が好評であった。この授業に参加した学生は社会への鋭い眼差しを向けるようになった。ともしれば難しく捉えがちな日本国憲法を分かりやすく面白く語り、的確な解説を行った。とくに豊富な具体的な例を用いての説明が好評であった。
張替 俊夫	非常勤講師	1	専門基礎教育科目「解析学B」の授業において、1変数ならびに多変数の積分、リーマン積分の厳密な定義、広義積分、線積分とグリーン関数等々を、豊富な例をあげて講義したが、その授業手法が効果的で学生にはたいへん好評であった。また授業後に行われる小テストが、授業内容の要点を捉えており、教育効果を上げるのに資するところ大であった。

(大学教育実践センター)

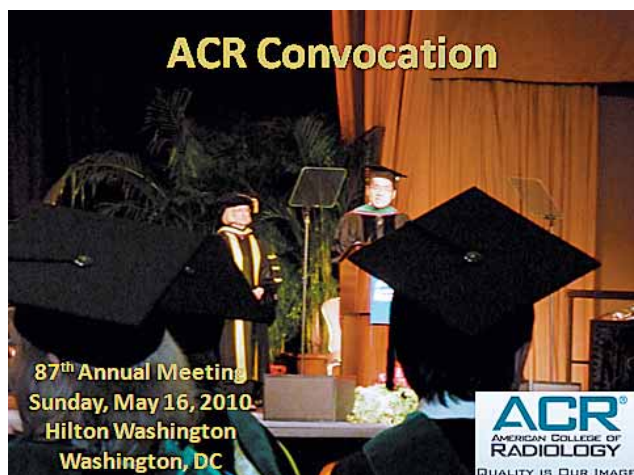
手島昭樹教授「アメリカ放射線科専門医会・American College of Radiology 特別名誉会員 (ACR Honorary Fellowship) 称号授与」

医学系研究科保健学専攻の手島昭樹教授に、アメリカ放射線科専門医会 (American College of Radiology: ACR) の特別名誉会員 (Honorary Fellowship) の称号が授与され、5月16日(日)、Washington DCでの第87回ACR年次総会で授賞式が行われました。受賞理由は、医療実態調査研究 Patterns of Care Study (PCS) をわが国に導入し、放射線治療の構造や過程の改善に具体的に寄与し、日米がんセミナー開催により一国の視野を超えた研究と交流を推進したことによるものです。

この賞は1947年来、放射線医学領域で世界的に卓越した貢献をした研究者に対して毎年3名授与されるものです。日本人は過去14名が受賞し、今回は11年ぶりの日本人の受賞となりました。事前にACR特別会員誓約書にてACR倫理基準の支持、知識の発展、貧しい患者への診療提供、所属学会・組織への貢献、教育を通じた放射線医学の地位向上への貢献を継続することの誓約の署名を行い、受賞プレートと副賞のSteuben Glassを授与されました。後者は



受賞プレート



受賞式での Acknowledgement speech 中の手島教授



副賞の Steuben Glass と ACR Fellowship Pledge

世界で最も純粋なクリスタルとのことで、「先見性を備えて公正であれ」との米国人の価値観を反映しています。

(医学系研究科・医学部)

新部長紹介

友 枝 敏 雄 (ともえだ としお)

大学院人間科学研究科長・人間科学部長



【略歴】

- 昭50. 3 東京大学文学部第4類（心理学・社会学）卒業
- 52. 3 東京大学大学院社会学研究科社会学専門課程修士課程修了
- 54. 4 東京大学大学院社会学研究科社会学専門課程第1種博士課程退学
- 54. 5 東京大学助手文学部
- 59. 4 中央大学文学部講師
- 62. 4 九州大学助教授文学部
- 8. 9 九州大学教授文学部
- 平10. 4 九州大学教授大学院人間環境学研究科
- 12. 4 九州大学教授大学院人間環境学研究院
- 14. 4 九州大学評議員（平16.3まで）
- 16. 4 九州大学大学院人間環境学研究院副研究科長（平18.3まで）
- 九州大学大学院人間環境学府副学府長（平18.3まで）
- 18. 4 大阪大学教授大学院人間科学研究科
- 20. 4 大阪大学教育研究評議員（平22.3まで）
- 22. 5 大阪大学大学院人間科学研究科長・人間科学部長（平24.4まで）

岩 井 成 憲 (いわい しげのり)

ラジオアイソトープ総合センター長



【略歴】

- 昭57. 3 大阪大学薬学部製薬化学科卒業
- 59. 3 大阪大学大学院薬学研究科前期（修士）課程修了
- 59. 4 北海道大学教務職員薬学部
- 63. 6 北海道大学助手薬学部
- 平元. 2 薬学博士（大阪大学）
- 7. 4 株式会社生物分子工学研究所主任研究員
- 13. 4 東京大学助教授大学院工学系研究科
- 15. 4 大阪大学教授大学院基礎工学研究科
- 20. 4 大阪大学ラジオアイソトープ総合センター長（平22.3まで）
- 22. 5 大阪大学ラジオアイソトープ総合センター長（平24.4まで）

新施設長紹介

畑 澤 順 (はたざわ じゅん)

医学系研究科附属PET分子イメージングセンター長



【略歴】

- 昭54. 3 東北大学医学部卒業
- 58. 3 東北大学大学院医学研究科博士課程修了
- 58. 3 医学博士（東北大学）
- 58. 4 東北大学抗酸菌病研究所（放射線医学研究部門）研究生（～昭61.12）
- 60. 6 アメリカ国立保健研究所国立脳神経脳卒中研究所研究員
- 62. 1 東北大学助手サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター
- 平 3. 5 秋田県立脳血管研究センター研究局放射線医学研究部主任研究員
- 13. 5 秋田県立脳血管研究センター研究局放射線医学研究部長
- 14. 6 大阪大学教授大学院医学系研究科
- 18. 4 大阪大学ラジオアイソトープ総合センター長（～平20.3）
- 22. 6 大阪大学医学系研究科附属PET分子イメージングセンター長（～平24.5）

新教授紹介

村 中 俊 哉 (むらなか としや)

大学院工学研究科



【略歴】

- 昭58. 3 京都大学農学部農芸化学科卒業
- 60. 3 京都大学大学院農学研究科修士課程修了
- 60. 4 住友化学工業(株)宝塚総合研究所研究員
- 平 4.10 住友化学工業(株)生命工学研究所研究員
- 5.11 博士(農学)京都大学
- 12.10 住友化学工業(株)農薬化学品研究所研究員
- 13. 4 理化学研究所植物科学研究センターチームリーダー
- 19. 4 横浜市立大学国際総合科学部教授
- 22. 5 大阪大学教授大学院工学研究科

所 属：大学院工学研究科生命先端工学専攻生
物工学講座

専門分野：植物代謝工学、植物生理学

有 木 進 (ありきすすむ)

大学院情報科学研究科



【略歴】

- 昭57. 3 東京大学理学部数学科卒業
- 60. 3 東京大学大学院理学系研究科数学専攻修士課程修了
- 平元. 3 東京大学大学院理学系研究科数学専攻博士課程修了
- 元. 4 東京商船大学講師商船学部
- 2. 4 東京商船大学助教授商船学部
- 14. 4 京都大学助教授数理解析研究所
- 19. 4 京都大学准教授数理解析研究所
- 22. 4 大阪大学教授大学院情報科学研究科

所 属：大学院情報科学研究科情報基礎数学専
攻離散構造学講座

専門分野：表現論・代数の組合せ論

竹 田 精 治 (たけだ せいじ)

産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター



【略歴】

- 昭57.10 広島大学大学院理学研究科物性学専攻博士課程後期修了
- 57.10 理学博士(物性学)(広島大学)
- 58. 4 日本学術振興会奨励研究員
- 58. 7 大阪大学助手教養部
- 59.10 カリフォルニア大学ローレンスパークレー研究所博士
研究員
- 平 2. 4 大阪大学助教授教養部
- 8. 4 大阪大学助教授大学院理学研究科物理学専攻
- 12. 1 大阪大学教授大学院理学研究科物理学専攻
- 22. 4 大阪大学教授産業科学研究所

所 属：大阪大学産業科学研究所附属産業科学
ナノテクノロジーセンターナノ構造・
機能評価研究分野

専門分野：ナノ理工学、電子顕微鏡

新教授紹介

竹 谷 純 一 (たけや じゅんいち)

産業科学研究所



【略歴】

- 平 3. 3 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程修了
- 3. 4 財団法人電力中央研究所主任研究員 (18.3まで)
- 13. 1 東京大学理学系研究科物理学専攻より博士(理学)(論文)
- 13. 8 スイス連邦大学固体物理研究所客員研究員 (兼)
(平13.11まで)
- 17. 5 理化学研究所客員研究員 (兼) (平18.3まで)
- 17.10 東北大学金属材料研究所客員助教授 (兼) (平18.3まで)
- 18. 4 大阪大学助教授大学院理学研究科化学専攻
- 19. 4 大阪大学准教授大学院理学研究科化学専攻
- 22. 4 大阪大学教授産業科学研究所

所 属：大阪大学産業科学研究所先進電子デバイス研究分野

専門分野：有機デバイス科学、物性科学

松 村 耕 光 (まつむら たかみつ)

世界言語研究センター



【略歴】

- 昭55. 3 大阪外国語大学外国語学部インド・パキスタン語学科
(ウルドゥー語専攻) 卒業
- 57. 3 大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程西アジア語学専攻修了
- 57. 4 大阪外国語大学助手外国語学部
- 62. 1 大阪外国語大学講師外国語学部
- 平 5. 1 大阪外国語大学助教授外国語学部
- 19. 4 大阪外国語大学准教授外国語学部
- 19.10 大阪大学准教授世界言語研究センターアジア言語文化
圏研究部門Ⅲ
- 22. 4 大阪大学教授世界言語研究センターアジア言語文化圏
研究部門Ⅲ

所 属：世界言語研究センターアジア言語文化圏研究部門Ⅲ

専門分野：ウルドゥー文学

山 根 聡 (やまね そう)

世界言語研究センター



【略歴】

- 昭61. 3 大阪外国語大学外国語学部インド・パキスタン語学科(ウルドゥー語)卒業
- 平元. 3 大阪外国語大学大学院外国語学研究科西アジア語学専攻
(インド・パキスタン語学) 修士課程修了
- 平 3.12 パキスタン国パンジャブ大学大学院オリエンタル・
カレッジ (ウルドゥー文学専攻) 修士課程修了
- 6. 2 在パキスタン日本国大使館専門調査員 (平成8.3まで)
- 8. 4 大阪外国語大学講師外国語学部
- 10. 1 大阪外国語大学助教授外国語学部
- 10. 4 Jetroアジア経済研究所「パキスタン—軍事クーデター
の背景研究会」委員 (平成11.3まで)
- 10. 4 Jetroアジア経済研究所「アフガニスタン研究会」委員 (平成17.3まで)
- 13.11 独立行政法人国際協力機構国際協力総合研修所パキス
タン国別援助研究会委員 (平成14.6まで)
- 14. 5 Jetroアジア経済研究所「現代アフガニスタンの政治と
社会研究会」委員 (平成15.3まで)
- 15. 5 Jetroアジア経済研究所「アフガニスタンをめぐる政治
過程と国際関係研究会」委員 (平成16.3まで)
- 19. 4 大阪外国語大学准教授外国語学部
- 19.10 大阪大学准教授世界言語研究センターアジア言語文化圏研究部門Ⅲ
- 20. 2 外務省日本政府によるパキスタン総選挙監視団員 (平成20.2まで)
- 21. 4 北海道大学スラブ研究センター共同研究員
- 22. 4 大阪大学教授世界言語研究センターアジア言語文化圏研究部門Ⅲ
- 22. 4 (財) 国際情勢調査会「中東情勢研究会」委員

所 属：世界言語研究センターアジア言語文化圏研究部門Ⅲ

専門分野：ウルドゥー文学 南アジアのイスラーム文化

新教授紹介

米 田 信 子 (よねだ のぶこ)

世界言語研究センター



所 属：世界言語研究センター中東・アフリカ
言語文化圏研究部門
専門分野：言語学, パントゥ諸語

【略歴】

- 昭58. 3 松蔭女子学院大学文学部英米文学科卒業
- 平 3. 3 Summer Institute of Linguistics, British School(英国)修了
- 7. 3 神戸市外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了
- 12. 3 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了
- 14. 4 大阪女学院短期大学助教授英語科
- 16. 4 大阪女学院大学准教授国際・英語学部
- 20. 4 大阪女学院大学教授国際・英語学部
- 20.10 大阪大学准教授世界言語研究センター中東・アフリカ言語文化圏研究部門
- 22. 4 大阪大学教授世界言語研究センター中東・アフリカ言語文化圏研究部門

頼 本 維 樹 (よりもと ゆいき)

多様な人材活用推進本部男女共同参画推進オフィス



所 属：多様な人材活用推進本部男女共同参画
推進オフィス
専門分野：男女共同参画

【略歴】

- 平元. 3 東京大学法学部卒業
- 7. 3 東京大学大学院法学政治学研究科専修コース公法専攻
修士課程修了
- 9. 4 秋田県企画調整部県立大学設置準備事務局
- 11. 4 総務庁人事局
- 13. 1 総務省人事・恩給局
- 13. 4 千葉市教育委員会生涯学習部
- 15. 1 文部科学省大臣官房政策課
- 16. 3 文部科学省生涯学習政策局社会教育課企画官
- 16. 9 内閣府男女共同参画総務課企画官
- 18. 7 国立教育政策研究所研究企画開発部長
- 22. 4 大阪大学教授多様な人材活用推進本部男女共同参画推
進オフィス

藤村昌昭教授(文学研究科)逝去



文学研究科教授藤村昌昭先生は、平成22年年3月7日(日)虚血性心疾患のため逝去されました。享年62歳でした。

先生は昭和22年大阪府のお生まれで、大阪外国語大学外国語学部(イタリア語学科)をご卒業の後、京都大学大学院文学研究科修士課程(イタリア語学・文学専攻)に進学、同課程を修了と同時に大阪外国語大学外国語学部助手に採用され、同講師、同助教授、同教授を歴任の後、平成19年10月以降は大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論講座教授を務めておられました。

先生は長年にわたりイタリア言語文化史に関する研究と教育に従事し、わが国における同分野の発展に大きく貢献なさいましたが、とくにその中心を占めるのは方言研究を

基盤とする音韻論とアクセント構造に関する一連の論文です。また教員としてのキャリアの大半を占める大阪外国語大学では初級イタリア語から専門的なイタリア文化史の講義にいたるまで多様かつ広範な授業を担当され、深い知見に裏打ちされた洒落な語り口と暖かく熱意に溢れたお人柄によって多くの学生を惹きつける一方、朝日カルチャーセンター、大阪日伊協会、NHKラジオイタリア語講座の講師としても活躍され、一般に向けたイタリア語、イタリア文化の広範な普及に尽力なさいました。

先生のご研究がひとつの転機を迎えることになったのは、平成6年文部省在外研究員としてイタリア・ボローニャ大学に留学なさったときからであろうと思われます。この地で哲学者ウンベルト・エーコの知遇を得、その思想から大きな影響を受けられた先生は、帰国後エーコの小説『フーコーの振り子』および『前日島』を達意の日本語に翻訳することで、わが国における現代イタリア思想文化の紹介と伝播に大きな足跡を残しただけでなく、先生ご自身の研究もまた、エーコに触発された記号論的・修辞論的視点等の導入によって一層の深まりを示すことになったからです。大阪大学移籍後のアート・メディア論講座ではもっぱら「メディア文化論と記号論」の表題のもとで小説、音楽、映画、アニメ等広範な分野に跨る文化史研究を試みられ、その体系的な結実に後一步というところまで来ていただけに、先生の急逝は惜しんでも惜しみきれません。ここに謹んで哀悼の意を表します。(文学研究科・文学部)

岩間吉也名誉教授(医学部)逝去



本学名誉教授岩間吉也先生は平成22年3月26日に心筋梗塞のため逝去されました。享年90才でした。

先生は大正8年に宮城県亘理(わたり)町に生まれ、昭和18年東北帝国大学医学部を卒業後、同大助手、助教授を経て、昭和29年金沢大学教授(医学部第2生理学講座)に昇任されました。昭和37年には大阪大学教授(医学部附属高次神経研究施設神経生理学部門)に配置換えとなり、昭和58年に定年退官されました。その間、医学部附属高次神経研究施設長、医学部附属分子遺伝学研究施設長、大阪大学附属図書館中之島分館長を務めたほか、昭和54年8月から56年8月まで医学部長を務め、大阪大学の運営な

らびに生理学教育に貢献され、また後進研究者の指導育成にたゆまぬ熱意と創意を注がれました。

先生は中枢神経系の研究に大きな足跡を残されましたが、特に条件反射の神経生理学的研究、逆説睡眠時の脳内活動、視覚中枢におけるγ-アミノ酪酸やノルアドレナリンなど神経伝達物質の機能、視覚中枢の並列情報処理機構など、現在の脳科学の大きな研究領域の礎となる数々の研究をされました。

大阪大学退官後は、近畿大学薬学部特任教授、兵庫医科大学客員教授として教育に従事されましたが、また書物を友とされました。自宅をオフィスとし、大阪大学附属図書館を拠点に広く自然科学について資料を収集すると共に、深い洞察をもって探求を進めておいででした。特に平成17年に出版された「心臓の動きと血液の流れ」(講談社学術文庫)は、血液循環説を確立したウィリアム・ハーヴィの名著を非常に多くの労力と歳月をかけてラテン語から翻訳し、綿密な註をつけて完成したものであり、全く妥協のない努力の結晶です。80才を過ぎてからこの偉業に取り組まれた先生の尽きることのない学術への情熱には頭が下がるばかりです。

岩間吉也先生の在りし日のお姿を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(医学系研究科・医学部)

杉野隆教授(工学研究科)逝去



工学研究科教授杉野隆先生は病氣療養中のところ、平成22年4月3日(土)にご逝去されました。享年60歳でした。

先生は昭和47年3月大阪大学工学部電気工学科を卒業され、同年4月大阪大学大学院工学研究科電気工学専攻修士課程に入学、昭和49年3月同課程修了、同年4月同専攻博士課程入学、昭和52年3月同課程を単位修得退学、同年4月松下電子工業(株)に入社されました。その後、昭和57年9月よりカリフォルニア大学バークレー校へ研究員として留学し、昭和58年2月に「Ⅲ-V族混晶の液相エピタキシャル成長とそのオプトエレクトロニック素子への応用に関する研究」で大阪大学より工学博士の学位を授与されました。昭和63年3月松下電子工業(株)を退社、同年4月大阪大学助教授工学部に採用され、平成10年4月からは大学院工学研究科に配置換となり、平成15年4月には教授に昇任され、電気電子情報工学専攻において教育・研究に貢献してこられました。

先生の専門は半導体材料・デバイスで、主に「Ⅲ-V族化合物半導体レーザー」、「Ⅲ-V族半導体およびダイヤモンド表面改質」、「窒化物薄膜合成とデバイス応用」の分野で貢献されました。

GaAs-AlGaAs 近赤外光レーザーの発振横モード安定化のため段差基板(TS)型レーザー構造を考案され、制御性に優れたTS型レーザーは世界初のコンパクトディスクの

光源に採用されました。この成果に基づくNASA衛星直接光通信プロジェクトでは高出力半導体レーザーの開発に貢献されました。

また、GaAsやInPのⅢ-V族化合物半導体に関して、光・プラズマ励起プロセスでリン原子による表面改質法を初めて提案され、欠陥密度低減を実証されました。また水素や酸素プラズマで改質したダイヤモンド表面の電子状態を初めて報告し、ダイヤモンド特有の表面伝導層モデルを提案され、同分野の研究進展にも貢献されました。

さらに、窒化物薄膜の研究では、窒化ホウ素ナノ薄膜による電子放出閾値低減を実現され、従来の電界放射型電子エミッターに応用することで放射電流増大に成功されました。この技術は次世代電子エミッターの実現につながるとともに、真空ナノエレクトロニクス分野の進展が期待されています。また、窒化ホウ素に炭素を添加した窒化ホウ素炭素薄膜の誘電率が低いことを発見され、比誘電率1.9の世界的トップデータを達成され、多層配線用層間絶縁膜への応用を提案されました。最近では環境・エネルギー向け電子デバイスにも興味を向けられ、電気電子分野から貢献できることを探索されていました。

教育面では大学院工学研究科電気電子情報工学専攻量子電子デバイス部門エレクトロニクスデバイス講座量子電子機能材料デバイス領域の教授として研究室を率いられ、半導体デバイス工学、先端エレクトロニクスデバイス工学特論、半導体工学、量子力学、電気材料基礎論、電子情報工学序論の授業を担当し、教育に情熱を注いでおられました。

学外では応用物理学会の編集委員や評議員、電子情報通信学会の専門委員会委員、日本真空協会の関西支部長を務め、また日本学術振興会第158委員会委員、新エネルギー産業技術総合開発機構「炭素系高機能材料の調査研究」研究分科会委員、日本電子工業振興協会分科会委員、ニューダイヤモンドフォーラム学術委員会委員、科学技術庁無機材質研究所・客員研究官など数多くの役職を務められ、活躍されました。先生が発起人である「New Diamond and Nano Carbons Conference (NDNC)」は今年4回目を迎え、全世界から集まる国際会議となり、大きな功績を残されています。

常にネーギブアップの精神で、研究だけでなく教育にも取り組んでこられた杉野隆先生を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(工学研究科・工学部)

樺田榮一名誉教授(基礎工学部)逝去



本学名誉教授樺田榮一先生は平成22年4月19日(月)逝去されました。享年78歳でした。

先生は、昭和29年に大阪大学工学部をご卒業され、大学院の修士課程を修了された後、大阪大学工学部の助手に着任され、その後、助教授を経て、昭和40年に創設もない基礎工学部の助教授に配置換えとなり、大竹伝雄教授と共に化学工学科の創設に尽力されました。昭和43年には神戸大学の工学部教授として一時転出されましたが、昭和47年には再び大阪大学基礎工学部の教授として復帰され、平成7年に定年退職されるまで基礎工学研究科、基礎工学部ならびに化学工学科の研究と教育の発展に尽くしてこ

れました。

先生の研究のご専門は化学プロセス工学で、化学反応操作の最適化および制御、化学反応システムの合成に関する分野で多大の貢献をされてきました。ここでその一つ一つを紹介することはできませんが、いずれも、新規な化学プロセス制御システムならびに省エネルギー、環境保全、資源循環等に重要な役割を果たす化学プロセスを構成することを旨とした独創的なもので、その研究成果は国内外で高く評価されています。また、これらの研究を通じて多くの優れた人材を世に送り出してこられました。現在では大学における教育と研究のグローバル化がごく普通に行われていますが、先生は早くからこれを実践され、特に韓国の大学との人材ならびに研究の交流を深めてこられました。また、著書の一つである「化学プロセス制御」(1987)は、今もこの分野の優れた教科書として多くの大学で採用されています。

研究とは別に、学内では基礎工学部の教務委員会や会計委員会をはじめとする多くの重要な委員会の委員長を歴任され、学部内の研究・教育環境の整備と充実に貢献されました。学外におきましても、文部省学術審議会や日本学術会議の委員をはじめ多くの委員会委員を務められるとともに、数々の大型プロジェクト研究の代表者として指導的役割を果たしてこられました。また化学工学会におきましては、理事、評議委員などの要職を歴任されるなど、学界の発展にも尽力されました。

ここに謹んで樺田榮一先生のご冥福をお祈り申し上げるとともに、哀悼の意を表します。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

井上武宏教授(医学系研究科)逝去



医学系研究科教授井上武宏先生は、平成22年4月16日(金)、胸部大動脈解離のため逝去されました。享年 58 歳でした。

先生は、昭和 52 年に岐阜大学医学部を卒業され、大阪大学医学部放射線医学教室へ入局されました。本学医学部附属病院にて医師臨床研修を開始され、大阪府立成人病センター勤務を経て、昭和 57 年に本学歯学部助手、昭和 60 年に本学医学部助手に就任されました。その後、大阪通信病院放射線科医長、本学医学部附属バイオメディカル教育研究センター助教授を歴任され、平成 17 年に本学大学院医学系研究科放射線統合医学講座放射線治療学教室教授に就任されました。平成 22 年からは本学ラジオアイソトープ

総合センター長も兼務されました。

先生は、がんの放射線治療をご専門とされ、国内で最も早い時期に Ir-192 高線量率小線源治療装置を本学医学部附属病院に導入されました。低線量率と高線量率との比較臨床研究や、前立腺癌に対して世界で最初に行った高線量率小線源治療単独療法は、国際的にも高く評価され、我が国の放射線治療の発展に大きく寄与しました。

先生は慎重かつ厳密な性格で、診療に対しても全く妥協することはありませんでした。一方で、面倒見が良く人望を集め、多くの教室員を一つにまとめてくれました。5 年という短い間ではありましたが教室を精力的に運営され、国内では先駆的に放射線診断と分離独立した当教室からは、第一線の放射線治療医が数多く輩出されました。

先生は医師教育のみならず、広く我が国の放射線治療の将来を見据え、医学物理士制度の確立にご尽力されました。国内では先駆的な医学物理室を本学医学部附属病院オンコロジーセンター内に開設され、放射線治療における医学物理士業務を確立されたことは、国内関係者・関係団体から特に注目を集めました。先生は平成 25 年度の日本放射線腫瘍学会長にも決まっておりました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

(医学系研究科・医学部)

園田孝夫名誉教授(医学部)逝去



大阪大学名誉教授、大阪府立病院名誉院長、財団法人大阪腎臓バンク理事長、園田孝夫先生は心筋梗塞にて、平成 22 年 4 月 29 日に逝去されました。享年 78 歳でした。

先生は大阪大学を昭和 31 年にご卒業され、助教授を経て、昭和 43 年 7 月 1 日に故楠 隆光教授の後任として、36 歳の若さで、大阪大学医学部泌尿器科学講座教授に就任されました。昭和 38 年より 1 年 7 カ月間米国ハーバード大学マサチューセッツ総合病院内分泌外科に留学され、帰国後は尿路結石症の一因である上皮小体機能亢進症に対する外科的治療を数多く手がけられました。平成 2 年に新設された大阪大学バイオメディカル教育研究センター教授を約一年間務め、平成 3 年 8 月 31 日に退官されました。その間、大阪大学医学部附属病院中央手術部長、附属病院長など要

職を歴任され、また、医学部附属病院の吹田への移転にも尽力されました。

大阪大学の運営に貢献される一方で、平成元年には第 77 回日本泌尿器科学会総会を主催されるなど学会の発展に貢献され、また、ご専門の腎移植の分野では日本移植学会常務理事、学術大会会長を務められ、昭和 55 年には財団法人大阪腎臓バンクを設立され腎移植の啓蒙・発展に尽力されました。さらに、大阪府や文部科学省、厚生労働省など中央政府の審議会委員など学術・医療・行政へも広く参画されました。

大阪大学退官後は大阪府立病院（現大阪府立急性期・総合医療センター）の病院長に就任され、大阪府の地域医療および医療行政の発展に貢献されました。

腎移植とともに尿路結石症、上皮小体切除術など内分泌外科や泌尿器癌も専門領域とされ、638 編にのぼる原著論文等の学術業績に対する数々の学術賞に加え、平成 11 年、18 年にそれぞれ紫綬褒章、瑞宝中綬章と 2 度にわたり叙勲の榮に浴されました。

お好きであったピアノの腕前は、プロ顔負けで、折に折られてはショパンのエチュードを披露されることもありました。

大阪大学をこよなく愛し、腎移植をはじめ泌尿器科学の発展に最後まで尽力された、園田先生のお姿を偲び、ここに慎んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

(医学系研究科・医学部)

五島忠久名誉教授(旧教養部)逝去



本学名誉教授 五島忠久先生は、平成22年5月6日(木)老衰のため逝去されました。享年99歳でした。

先生は、昭和10年3月東京帝国大学文学部言語学科をご卒業、同大学大学院を経て、千葉県立安房中学校、同成東中学校、大阪府立高津中学校で10年にわたり英語教育に携わり、昭和21年3月旧制浪速高等学校教授に任ぜられました。その後昭和24年6月大阪大学助教授、同31年10月大阪大学教授に任ぜられ、昭和46年10月大阪教育大学教授に配置換えとなり、昭和47年3月大阪大学名誉教授の称号を授与されました。大阪教育大学を昭和51年3月に退官した後は同年4月から同56年3月まで帝塚山大学教授となり、帝塚山大学図書館長も務められました。昭和58年春には永年のご功績に対し勲三等旭日中綬章を授与されました。

先生の研究は、言語学一般から英語学あるいは言語教育法におよび、また我が国におけるアフリカ語の研究の開拓に指導的な役割を果たして来られました。

言語教育の分野では、早期英語教育の理論と方法について、昭和45年に「0歳からの英語教育」(光文社)として発表し、斯界に大きな影響を与えました。昭和54年には有志と協力して「日本児童英語教育学会」を設立し、初代会長として、その発展と指導に尽力されました。その結果は、今日の小学校への英語教育導入となって見事実を結びました。また、昭和29年には、大正12年設立の英語教授研究所(文部省所管)初代所長Harold E. Palmer博士の功績を記念して設けられた「パーマー賞」の選考委員に選ばれ、日本における英語教育に著しい貢献をした学校または

個人に与えられるパーマー賞の選考に永く携わって来られました。

英語学の分野では、辞書学の立場から英語辞書を構成する各要素の特質及び取扱い方を研究し、辞典・辞書に関する諸論文を発表して英語辞書の性格の科学的分析を進めるとともに、「英文法小辞典」(昭和34年 研究社)、「英和中辞典」(昭和50年 旺文社)などを監修・執筆されました。また、先生は「英語における名詞の性の歴史的研究」と題する大学の卒業論文のテーマを大学院時代を通じて追求され、「性」(Gender)に関する諸論文あるいは著書「数と性」(昭和29年研究社)となって結実しました。

さらに、この「性」(Gender)に関する研究の副次的産物として、世界の諸言語の性を知られ、特にアフリカ赤道以南の広大な地域に広がるバンツー語族の諸言語が持つ、極めてユニークな性の一種とも言うべき名詞分類の体系に魅せられたことが、先生のその後の生涯をかけてアフリカ語探求に進ませることになりました。昭和19年に公刊された「アフリカ諸言語の構造と関係」は“A. Werner, Structure & Relationship of African Languages”の翻訳ですが、その大半は訳者の補注から成り、詳細な解説及び参考文献の紹介は極めて有益なものでした。これはまた言うまでもなく、日本語で書かれた最初のアフリカ語記述書であり、主要な大学にすらほとんどアフリカ語関係の文献のなかった当時においては、極めて貴重な資料となりました。昭和38年にはアジア・アフリカ地域の言語・文化研究促進を目的として設立された「アジア・アフリカ言語文化研究会」に評議員として参加し、国立の研究所設置に尽力された結果、翌昭和39年に東京外国語大学の附置研究所として「アジア・アフリカ言語文化研究所」が設置されました。これは人文・社会科学系としては我が国最初の流動性をもつ共同利用研究機関であり、先生は直ちに同研究所の共同研究員となり、特にアフリカの未開発言語の研究の開拓、辞典・文典の編集、言語研修の充実、専門的研究者の養成などに尽力され、日本における現代アフリカ語研究の先駆者として、また指導者として活躍されました。

先生の多大なご功績を偲び、ここに謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(大学教育実践センター)

法務室の体制が新しくなりました

ご承知のように平成16年4月から、大阪大学は国立大学法人として独立の法主体性を付与され、独自の組織と意思決定のもとに、教育・研究・社会貢献などの活動を行っています。これに伴って、大阪大学の諸業務から生じる法的諸問題についても、独自の責任が課せられることになり、自らの意思でこれらの問題の解決を図っていくことが必要となりました。このような法的諸問題の解決のための意思決定に際して、法律の専門的な立場から法律上の諸問題を検討し、アドバイス等を行う組織として、平成17年4月に法務室が設置されました。その法務室もその設置からはや5年が経過し、本学での認知度も年々高まるとともに、それに比例し様々な法的諸問題に関する相談が部局などから寄せられるなど、着実にその成果を残してきているところです。

法務室については、室長と室員及び顧問弁護士から構成されておりますが、多様な法的諸問題に対応するため、大阪大学出身の弁護士の方を連携弁護士として委嘱し、法務室の活動をサポートしていただき、場合によっては個別案件を担当いただくなどしております。平成22年4月から顧問弁護士及び連携弁護士の構成が新しくなり、法務室の体制が以下のとおりとなりました。

法務室長	松 川 正 毅	(高等司法研究科教授)
法務室員	佐久間 修	(高等司法研究科教授)
大阪大学顧問弁護士	出 水 順	(北総合法律事務所)
連携弁護士	滝 口 広 子	(北浜法律事務所・外国法共同事業)
連携弁護士	内 藤 欣 也	(みずほパートナーズ法律事務所)
連携弁護士	服 部 敬	(はばたき総合法律事務所)
連携弁護士	浜 田 雄 久	(なにわ共同法律事務所)
連携弁護士	福 田 健 次	(堂島法律事務所)
連携弁護士	藤 木 久	(藤木総合法律事務所)
連携弁護士	吉 村 信 幸	(森・吉村法律事務所)

また、法務室の業務は、緊急の案件を除いて原則として毎月2回(第2・第4水曜日10時から)開催される定例の法務室会議で行っております。法務室会議では事前に相談希望のありました法的諸問題に関する相談について直接事情等をお聞きし、その対応策について検討するなどしております。本学の諸業務から生じる法的諸問題について相談希望がありましたら、まずは事前に下記までご連絡ください。

【問い合わせ先】：総務部総務課専門職員(法務室担当) 電話：06-6879-7015 内線：吹3005

天神祭船渡御『阪大船』

船渡御は、日本三大祭の一つである大阪天神祭のクライマックスを彩り、意匠を競った百隻余りの船が大川を行き交うものです。

大阪大学では、平成17年以来、毎年『阪大船』を出船してまいりましたが、今年もその勇姿を大川の川面に浮べることとなりました。

ご乗船いただく教職員、学生、同窓生等の阪大ファミリーの皆様方には、大阪の夏の風物詩を心ゆくまでお楽しみいただきたいと思います。

日 時：7月25日(日) 18時～21時頃(集合時間 17:30)

乗 船 料：お一人 30,000円

※飲食込、振込手数料別、簡易トイレ有り

※家族割引有り(お一人 20,000円)

定 員：170名

〈問合先〉

大阪大学天神祭実行委員会

(大阪大学企画部広報・社会学連携事務室)

〒565-0871 吹田市山田丘1-1

TEL 06-6879-7151 FAX 06-6879-7156

メール ki-kousyagaku-renkei@office.osaka-u.ac.jp



昨年の様子
(企画部広報・社会学連携事務室)

第3回適塾講座

適塾記念会では、適塾顕彰事業の一環として、緒方洪庵と適塾生の足跡をたどり、適塾が果たした歴史的役割を考えるため、平成20年度より適塾講座を開講しています。これは、単なる講演会ではなく、講師と受講生がともに適塾を考える講座です。そのため、質疑応答の時間をできるだけ多くとっています。多くの方々のご参加をお願いいたします。

1. テーマ 「幕末期の『大坂地域』と適塾」

適塾は、幕末期大坂に開かれた蘭学塾である。幕府直轄都市大坂は、政治的・軍事的・経済的にきわめて重要な地であるとともに、最高水準の文化都市でもあった。私塾も多く開かれ、旺盛な文化・学術活動が行われていた。適塾の開塾も、その一つである。また、大坂だけでなく、周辺地域の文化・学術活動も、無視できないものがあつた。今回は、大坂の私塾とその特質、大坂の武士の学問・文芸へのかかわり、大坂周辺地域の医師たちの存在形態や医療活動を取り上げ、「大坂地域」（大坂とその周辺部）の中で適塾を考えたい。

2. 講演日時等

- | | | |
|-----|---------------------|------------------------|
| 第1回 | 9月7日（火）18：00～19：30 | |
| | 「幕末大坂の私塾と適塾」 | 山中 浩之氏（大阪府立大学人間社会学部教授） |
| 第2回 | 10月5日（火）18：00～19：30 | |
| | 「政事と文事―武士たちの大坂―」 | 藪田 貫氏（関西大学文学部教授） |
| 第3回 | 11月2日（火）18：00～19：30 | |
| | 「幕末期大坂周辺地域の医師と医療活動」 | 村田 路人氏（大阪大学大学院文学研究科教授） |

3. 会場 大阪大学中之島センター 大阪市北区中之島4丁目3番53号

06－6444－2100

- 《電車》
- ・京阪中之島線 中之島駅より徒歩5分
 - ・阪神本線 福島駅より徒歩約9分
 - ・JR東西線 新福島駅より徒歩約9分
 - ・地下鉄四ツ橋線 肥後橋駅より徒歩約10分
 - ・JR大阪環状線 福島駅より徒歩約12分
 - ・地下鉄御堂筋線 淀屋橋駅より徒歩約16分

- 《市バス》
- ・大阪駅前バスターミナル

53系統 中之島四丁目（旧玉江橋）下車徒歩約1分

75系列 田養橋下車徒歩約1分

4. 定員 50名（申込先着順）

5. 申込方法 郵便葉書に住所、氏名、電話番号をご記入の上、7月2日（金）までにお申し込み下さい。 受講者には追って受講カードをお送りいたしますので、受講料を指定の銀行口座にお振り込み下さい。

6. 受講料 3,000円（3回分）

7. 対象 適塾記念会の会員の方（新規加入者を含む。）

申込・お問い合わせ 適塾記念会事務局

〒565-0871 吹田市山田丘1-1 大阪大学コンベンションセンター

電話：06－6877－9852

（適塾記念会）

大阪大学基礎工学部 第32回公開講座 「未来を拓く先端科学技術」

■公開講座の目的

私たちの生活は科学技術によって支えられており、その進歩と密接な関係をもっています。特に日常生活に直接関係する機器や物質の目覚ましい発展と普及、情報技術の急速な進歩とそれにより得られる膨大な情報、生命の謎の解明と先端医療技術、これらに囲まれた私たちの日常生活を安全で豊かなものにするには、それにふさわしい教育と知識を備えることが必要です。このような環境の中、若い人たちから家庭の主婦ならびに学校教育を離れて久しい中高年の方々にいたる広い範囲で、科学的教養を積む機会を望む声が高まっています。大阪大学基礎工学部ではこのような声に応えるべく、あわせて従来とかく軽視されがちであった大学と地域社会との連帯を強めるとともに本学部の情報発信の一環として、1979年以來31回にわたり公開講座を開催してきました。

本年度（第32回）も、様々な立場から私たちの暮らしや社会と密接な関係を持ち、明るい未来を拓く最先端の科学技術の成果とその意義を紹介する企画を行います。

- 期 間：平成22年8月4日(水)～6日(金)
 ■会 場：大阪大学基礎工学部 国際棟（シグマホール）
 ■受講料：無料

8月4日(水)

- 9:10～ 開講式
 9:20～10:40 表面・界面におけるミクロな世界－エネルギー変換プロセスを念頭に－
 機能物質化学領域 機能化学講座 准教授 今西 哲士
 11:00～12:20 強誘電体薄膜とその応用－新規メモリデバイスを中心として－
 電子光科学領域 固体電子工学講座 准教授 金島 岳
 13:45～15:05 微粒子を光で創る・光で操る－光によるマイクロ・ナノ粒子の作製・制御－
 未来物質領域 微少物質ダイナミクス講座 教授 芦田 昌明
 15:20～16:20 見学会

8月5日(木)

- 9:20～10:40 光触媒－光エネルギーを使って何ができるか－
 太陽エネルギー化学研究センター 環境光工学研究分野 准教授 白石 康浩
 11:00～12:20 物のじょうずな動かし方を考える－機械システムの最適制御－
 システム科学領域 システム理論講座 教授 大塚 敏之
 13:30～14:50 時系列モデルでの統計解析－モデル変遷をめぐる－
 社会システム数理領域 数理計量ファイナンス講座 講師 熊谷 悦生
 15:05～16:05 見学会

8月6日(金)

- 9:20～10:40 光の偏り、偏光とその応用
 生体工学領域 生体計測学講座 准教授 橋本 守
 11:00～12:20 音と耳の織りなす諸現象－聴覚イリュージョンの仕掛けと耳の仕組み－
 生体工学領域 生物工学講座 准教授 館野 高
 13:30～14:50 分散アルゴリズム－たくさんのコンピュータが協力して働くしくみ－
 情報科学研究科 アルゴリズム設計論講座 准教授 角川 裕次
 14:50～ 閉講式

■受付開始：平成22年7月1日(木)から

■問い合わせ先：大阪大学基礎工学部研究科庶務係

〒560-8531 豊中市待兼山町1-3 TEL:06-6850-6131 FAX:06-6850-6151

E-mail: ki-syomu@office.osaka-u.ac.jp URL: http://www.es.osaka-u.ac.jp

(基礎工学研究科・基礎工学部)

平成22年度大阪大学大学院言語文化研究科公開講座
「教員のための英語リフレッシュ講座」

日時：平成22年8月9日(月)、10日(火)、11日(水)、12日(木)、13日(金)

会場：大阪大学中之島センター (http://www.onc.osaka-u.ac.jp 地図掲載) (所在地 大阪市北区中之島4-3-53)

主催：大阪大学大学院言語文化研究科 http://www.lang.osaka-u.ac.jp/lc/

後援：大阪府教育委員会・兵庫県教育委員会

オーラルコミュニケーション能力の育成を目指すカリキュラムの推進に伴い、学校の現場においては、指導内容・方法・技術などの面でさまざまな工夫が模索されてはいるが、「カリキュラムの内容と理念が学問的な知見を正しく反映していない」という根本的な問題があるだけでなく、教員の態勢が整わない段階での小学校英語の導入や「授業は英語で」という新学習指導要領の方針にどう対処するかという難題も抱え、戸惑いと混乱が広がっている。

本講座では、教育改革が無定見に揺れる中、(理論的な根拠もなく英語教育の失敗の元凶とされた)「文法と訳読」が外国語学習環境での英語力の基盤育成に不可欠であるとの認識の下に、学校教育にも応用可能な現代の文法・語法・辞書研究の成果を紹介するほか、関連研究領域(言語習得論や学習方略研究、脳機能研究など)の最近の理論的な知見を踏まえ、英語力を着実に伸ばし運用能力の育成にもつながる授業のあり方を(ネットやCALLの活用を含め)総合的に考察するだけでなく、小学校英語にいかに対応するかについても論じる。教員それぞれの造詣・技量を適切に活かし、生徒も理解・納得できる魅力的で効果的な教育の実践を期するものである。また「発音の動的な変化の仕組み」「音読の技法」を分かりやすく解説・訓練するとともに、「ネイティブスピーカーによる体験授業」を通じて英語運用力の向上を図るほか、文学作品の意味・語用・文体論的分析も行ない知見を深める。全体討論では、英語教育を巡る旬なテーマを討議し、講師陣が受講者の抱える疑問・質問に専門的知見を踏まえて答える。



講師および演題

8月9日(月)

- | | | |
|-------------|--|--------|
| 10:00~12:30 | 「英語教育で何を守るべきか一言語習得研究を踏まえて」
(最初に講座オリエンテーション) | 成田一教授 |
| 13:20~14:50 | 「英語らしい発音の科学—ダイナミックメカニズムと発音・聴解の秘儀」 | 成田一教授 |
| 15:00~17:00 | 「英語辞書とコーパス言語学に基づく語彙指導」
(京都外国語大学) | 赤野一郎教授 |

8月10日(火)

- | | | |
|--------------|---|---------|
| 10:00~12:00 | 「音読の効果的な指導のための留意点と技法」
(京都外国語大学) | 鈴木寿一教授 |
| 12:50~14:50 | 「英語の学習意欲を高めるために—理論と実証データからの10の提言」
(関西大学・大学院) | 竹内理教授 |
| *15:00~17:00 | 「小学校の英語・中学校の英語」
(立命館小学校) | 田縁真弓先生 |
| *15:00~17:00 | 「英作文をどう指導するか—パラグラフ・ライティングと添削指導」 | 小口一郎准教授 |

8月11日(水)

- | | | |
|--------------|------------------------|-----------------|
| 10:00~12:10 | 「ネット時代における国際英語の統合的実践」 | 日野信行教授 |
| *13:00~16:00 | 「コミュニケーション基礎」 | グラハム・B・ボウブ特任准教授 |
| *13:00~16:00 | 「コミュニケーション中級」 | デヴォア・トレレン外国人講師 |
| *13:00~16:00 | 「コミュニケーション上級」 | ジェリー・ヨコタ教授 |
| 16:10~17:00 | 「アメリカ文学の潮流—環境思想をめぐって—」 | 森祐司教授 |

8月12日(木)

- | | | |
|-------------|---------------------------|---------|
| 10:00~12:00 | 「英文法研究の英文法指導への応用」 | 岡田伸夫教授 |
| 12:50~14:50 | 「認知的な視点から見た英文法」 | 早瀬尚子准教授 |
| 15:00~17:00 | 「英語の語感を磨く」
(関西学院大学大学院) | 八木克正教授 |

8月13日(木)

- | | | |
|-------------|--|-------------------|
| 10:00~11:30 | 「英文を読む楽しみ」 | 沖田知子教授 |
| 11:30~12:20 | 「ポストコロニアル文学の世界—英語文学の広がり」 | 木村茂雄教授 |
| 13:10~14:40 | 「英詩の世界を味わう」 | 小口一郎准教授 |
| 14:50~16:20 | 「新学習指導要領にどう対処するか」(全体討論トピック基調講演)(和歌山大学) | 江利川春雄教授 |
| 16:20~17:00 | 全体討論&質疑 | 講師陣 |
| 17:05~17:20 | 講座修了証授与式 | (言語文化研究科長) 木村茂雄教授 |
| 17:30~19:00 | テーマ討論懇親会(講師陣のミニスピーチと意見交換) | |

■*8月10日(火)の「小学校での英語教育実践」と「英作文をどう指導するか」、11日(水)の「コミュニケーション基礎・中級・上級」(途中休憩含む)は選択です。申し込み時に選んでください。

■会場では9日(月)に『英語リフレッシュ講座』(大阪大学出版会)を著者割引1,900円で頒布いたします。

〈定員〉80名（先着順：定員に達した時点で大阪大学大学院言語文化研究科 HP に掲示します。）

本講座は、社会と大学を直接的に結び、大学の基礎・応用研究を学校の現場で活かしていただくことを主眼としており、中学、高校もしくは小学校などで英語教育に携わっている方ならびに携わることを目指している方を対象にしています。それ以外の方は定員に余裕がある場合に限り、受講可とさせていただきますので、本研究科 HP でご確認ください。なお、（規定以上の）講義を受講された方には大阪大学総長名の講座修了証書を授与いたします。

〈教材作成・連絡郵送費〉7,500 円 〈参加申込み〉（受付期間 7 月 1 日（木）～7 月 15 日（木）期限厳守）

- ・お振り込みいただきました教材作成・連絡郵送費は、欠席された場合でも、返金できませんので、ご了承ください。
- ・本公開講座修了証書は全講義の 60% 以上に出席された受講生の方に授与いたします。それ未満の方には受講証明書を後日送付いたします。
- ・お申し込みの際に必要な受講のみなさまの情報は、連絡先の把握及び今後の公開講座運営上の統計資料作成、関連情報の提供以外には使用いたしません。

〈問い合わせ〉大阪大学言語文化研究科総務係（E-mail: genbun-soumu@office.osaka-u.ac.jp、TEL：06－6850－5855）
（言語文化研究科）

学生支援ステーション（進路相談ユニット）の相談体制を強化

このたび、学生支援ステーションでは、就職相談業務の充実をはかるため、有資格者のキャリアアドバイザー（CDA）を増員し、相談体制を強化しました。

以下の期間、進路相談ユニットの開室時間を臨時拡大していますのでお知らせします。

■臨時拡大の期間

平成 22 年 5 月 17 日（月）～平成 22 年 7 月 30 日（金）及び
平成 22 年 11 月 1 日（月）～平成 23 年 3 月 31 日（木）（予定）

開室場所	開室曜日と開室時間	連絡先
IC ホール 1 階 （吹田学生センター）	★月（10：00～16：00）、金（13：00～17：00）	06－6879－7078
学生交流棟 2 階 （豊中学生センター）	★水（10：00～16：00）、月・火・木（13：00～17：00）	06－6850－5027
研究講義棟 A 棟 1 階 （箕面学生センター）	★火・木・金（10：00～16：00）、水（13：00～17：00）	072－730－5089

☆印が CDA の増員による拡大相談日

学生支援ステーションのホームページ http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/student/support_st

（学生支援ステーション／学生部キャリア支援課）

訂正とお詫び

阪大 NOW No.117（2010 年 4 月号）の掲載内容に一部誤りがありましたので、下記のとおり訂正するとともにお詫び申し上げます。

P.77 訃報 須田信英名誉教授の所属

須田信英名誉教授（誤）工学研究科 （正）基礎工学研究科

「咸臨丸」太平洋横断150周年と 早期留学の薦め —大阪大学サンフランシスコ教育研究センター便り—

サンフランシスコ教育研究センター長 久保井 亮 一

本年は、咸臨丸が当時の政府を代表する使節団として、自力で太平洋を横断、サンフランシスコ（SF）に入港して150周年の佳節にあたっている。日米外交史、草の根交流史の端緒を拓き、また築き上げてきた先人たちの苦闘と業績を振り返り顕彰すると共に、次世代・新たな未来の150年を見晴らす親善記念行事が多彩にまた活発に、ここサンフランシスコで繰り広げられている。

150年前に咸臨丸で生命をかけて太平洋を横断した乗組員の一人、福澤諭吉は、大阪大学の原点である適塾（蘭学塾）の卒業生でもある。蘭学を通して異文化との対話（精神的な留学）を経験する中で、大きな新世界とのダイナミックな交流を夢見て、古いシステムを変革し、新世界を築こうという大航海に乗り出した一青年であった。しかし、これこそ彼が、緒方洪庵を生涯の師として学び継承した適塾スピリッツであり、古いシステムを内から（自分自身から）変革し、異なる価値観が支配する多様な文化・世界との交流（対話による融合・創出）の中で新たな日本、新世界を拓こうとする、大きな志を持った挑戦であったのではないだろうか（独立自尊迎新世紀）。

折りしもこの「適塾」を原点の一つとする大阪大学も、旧大阪外国語大学との統合の中で、新生大阪大学として、明年に迫った創立80周年を祝うべく、「原点へ 未来へ」をスローガンに、学生が主役の企画も含めて、全学で多彩な記念・顕彰行事が企画され実行されつつある。

挑戦の「時」と、「舞台」は整って、肝心の主役の登場と挑戦を待っています。

主役とは、勿論、新生大阪大学の「元気が一番」の青年（自称青年）の皆さん一人ひとりであり、大阪大学サンフランシスコセンターもそのために創られて、今や遅しと、貴方がたを待っています。

それでは、その背景として、最近の幾つかのセンター関連行事の概略を簡単に紹介いたしましょう。

■ さくら祭り (Northern California Cherry Blossom Festival)

4月10日(土)・11日(日)の両日は、恒例の、しかし本年は咸臨丸SF入港150周年がメインテーマの「さくら祭り」がJapan Townで盛大に開催され、我々も阪大ブースを出

展し、協力した（歌舞伎ホテル：久保井・松山）。SF日本総領事館、JSPS、Japan Society、日系米人協会、大阪市（姉妹都市）等とブースを並べて、SF／日系の家族連れや学生たちを歓迎した。志望大学を検討中の高校生たちには阪大グローバル30国際コースへの勧誘をし、中には、進学する前の高校時代にJETプログラムで来日するが、阪大も訪問したいという学生もいた。さくら祭りクイーンに選ばれた学生さんたち（その中の一人も阪大留学を希望）も、着物姿、警官の護衛付で、また他の見物客も引き連れて、阪大ブースに來訪した。



■ 新年度前期遠隔講義：在サンフランシスコ日本国総領事館 長嶺安政 総領事

4月15日(木)は、SFセンターからの第1回遠隔講義を



実施。聴講者は約 220 名で、実践センターの岩居教授が豊中側で説明し、SF 側からは小生が講義全体の意義(What are you? の問いかけ)を説明。長嶺総領事を講師に、JSPS から 4 名の聴講者も迎え、日米の外交史とその重要性、咸臨丸 SF 入港 150 周年の意義等を、教室一杯の新入生らに講義していただいた。講義では、「福澤諭吉ら適塾卒業生や現在も外務省で頑張っている多くの先輩たちに負けずに、大阪大学の学生たちが、大きなキャンパス、大きな夢を持って太平洋を越えて留学に挑戦し、自分自身を大きく拓いてほしい。」とエールを送っていただいた。学部を問わず学生から活発な質問があり、新入生の段階では海外留学への意欲は旺盛であるので、できるだけ早い段階での留学経験こそ、大学の国際化につながると期待される。



後日、総領事公邸にて、咸臨丸 150 周年記念行事として、日本からの海王丸の SF 入港歓迎レセプションが開催された。

The Sail of Nippon Maru to San Francisco
on the occasion of the 150th Anniversary of the First Japanese Vessel to San Francisco

Sponsorship: National Institute for Sea Training
Date: May 5-10, 2010



■ シリコンバレー JUNBA (サンフランシスコ・ベイエリア大学間連携ネットワーク) 講演会

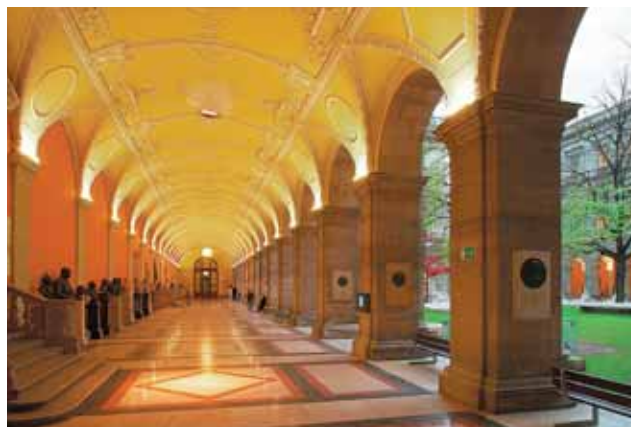
「シリコンバレーはこれからどこへ行くか」と題する講演・懇親会が、4月27日(火)に Ros Gatos 市内で行われた。石井正純氏 (AZCA, Inc.) による講演では、Innovation における日本の指導的役割を確保するために、新しい人材が必要とされていること、中国・韓国等とは逆に、日本から海外(特に米国)への留学が減少している傾向を何とか増加に転じさせることが喫緊の課題であること、世界からの異文化を受け入れる米国留学の中でこそ、新たなグローバルリーダーが育成できることを訴えられており、これは他の参加者も共通の問題意識であった。来年1月の JUNBA サミットでは、外から見た大学の国際化、日本の大学は国際化されたのか、がメインテーマとなる予定。

ウィーン大学(オーストリア)

Universität Wien (University of Vienna)



1365年にルドルフ4世によって創立されたウィーン大学はドイツ語圏最古の大学で、現在、学生数は約8万5千名、カトリック神学部、プロテスタント神学部、法学部、経済学部、情報学部、歴史文化学部、文献文化学部、哲学・教育学部、心理学部、社会科学部、数学部、物理学部、化学部、地理・天文学部、生命科学部、通訳・翻訳研究センター、スポーツ科学研究センター、分子生物学研究センターの15学部・3研究センター（182専攻講座）を有するヨーロッパ屈指の伝統と格式を誇る総合大学です。これまで医学者J・ワグナー＝ヤウレック、化学者H・フィッシャー、病理学者K・ラントシュタイナー、物理学者E・シュレーディンガー、動物行動学者K・ローレンツ、経済学者F・ハイエクなど9名のノーベル賞受賞者をはじめ、優れた研究者を数多く世に出してきました。民族学ないし文化研究も著名で岡正雄や石田英一郎などが留学したことはよく知ら



れています。

また、ウィーン大学日本研究所（2000年1月に中国学研究所と統合し、東アジア研究所となる）は、ヨーロッパの中核的な日本研究機関で、創立者の故A・スラヴィク名誉教授が1989年に国際交流基金賞を、現所長のS・リンハルト教授が2005年に山片蟠桃賞を受賞しました。

ウィーン大学との公的な交流は、旧大阪外国語大学が日本語日本文化教育センターを窓口にして大学間交流協定を締結した2005年に始まります。それ以降、学生・教員交流が順調に行われてきましたが、大学統合を経て、このたび、研究者交流の実績を有する人間科学研究科と連携して、大阪大学とウィーン大学との大学間交流協定として再締結されました。今後は、全学レベルでの交流関係の強化・発展が期待されるところです。

ウェブサイト：<http://www.univie.ac.at/>

編集後記

6月に多目的ディスプレイ「O+PUS」で部局長から学生へのメッセージが流れていたのをご存知ですか？撮影のために様々な部局を訪ね、ご協力いただきました。

個人的には、普段では見ることのできない施設を見ることができたりと貴重な経験でしたが、映像を通して皆さん

が少しでも大阪大学を共有するきっかけにもなっていたらうれしいです。

これから、蒸し暑い日が続きますが、健康に気をつけてがんばっていききたいものです。

（柿木）

喜多流能楽研究会

すり足でどこまでも行ける



「能やってるの」と自己紹介をすると、まずえっ？という顔をされることがあります。「農学」でも「脳学」でも「熊学」でもありません。そう、私たちは阪大に唯一の『能』サークルです。

活動内容としては、能の謡（うたい）・舞・囃子（＝鼓などの楽器）の稽古、そして年に数回の能舞台での発表があります。特に12月の「自演会」は、能楽堂を自分たちで借り切って行う、一年間の集大成である盛大なイベントです。

それではどんな曲を稽古するのかというと、たとえば「海



人（あま）。わが子の未来を照らす宝玉を得るため、母親は海に潜ります。海中でふと我に振り返るのは息子と夫のこと、『あの浪のあなたにぞ 我が子は在らん 父大臣もおはすらん』…母は自分の命と引き換えに、かねてから考えていた衝撃的な作戦を実行するのです。

とにかく能は、とっつきにくいと思われがちです。「一度は観てみたいと思ってるんだけど…」という方は多いはず。またなんとなく観に行っただけがいいが結局よくわからなかったという感想も聞かれます。でもせっかくの日本を代表する伝統芸能、実際に体で感じた面白さを自分の言葉で誰かに語ることができたなら、かっこいいと思いませんか？

40年くらい歴史のあるサークルですが、これまでの入部者のほとんどが、初めて能を観たのは入部後というくらいの初心者から始めています。もちろん指導にはプロの喜多流能楽師・栗谷明生先生をお招きしていますので安心です。

「海人」のお母さんがとった驚くべき行動、気になりましたらぜひ遊びに来てください。

部長 小薮 舞（文3年）

〈コメント〉

これまでに扇一本で、弁慶や天女、天狗、義経に玉葛内侍などを演じ舞ってきました。大学生活でしかできないことを一緒に始めましょう！



練習場所：豊中キャンパス 学生交流棟
4F 和室（月・水）／4F 練習室4（土）
練習日時：授業終了後～19時（月・水）／
9時半～16時半（土）

部員数：10人

連絡先：〈メール〉mmkoyabu@yahoo.co.jp（小薮）
〈ホームページ〉<http://yaplog.jp/handaikitakai/>

トピックス

大阪大学80の顔 東京学士会館に設置

東京の神保町にある学士会館に「7大学展示コーナー」が設置されました。

5月28日に開催されたオープニング・セレモニーでは、旧帝国大学総長が一同に会してテープカットを行ない、それぞれの大学が趣向を凝らした展示ブースの前では各総長と学士会理事長とのテープカットも行われました。

多くの展示ブースがパネルでの紹介や大学オリジナル・グッズを陳列する中で、大阪大学のブースでは、来年の「80周年」を意識して、大阪大学の様々な表情を「80種類の大学紹介カード」として統一し、そのカードが入る80個の「引き出し」を設けました。

中に何があるのか覗き込みたくなるように、来訪者の興味を喚起する目的もあります。

カードの内容は、「歴史的蘊蓄話」、「現在の大学の学部や施設情報」、「大阪大学に関する雑学」を、「2:6:2」の割合で編集・構成しています。各カードには写真と解説が入っており、大阪大学関係者にも新鮮な内容が



たくさんあります。

また、すべてのカードは持ち帰っていただけ、カードの減り具合によって、来訪者は大阪大学のどのような事柄に興味があるのかというリサーチ・ボックスにもなっています。

当日、来訪された方からは、「これはおもしろい。シンプルでありながら、存在感がある。足を止めて覗いてみる価値はある。」といった会話も聞こえてきました。東京に御用のある場合、ちょっと学士会館まで足を伸ばして、カードを探してみるのはいかがでしょう。きっと、今までとは異なる大阪大学の一面を知ることができます。

(広報・社会学連携室)

阪大 NOW No.118 2010 6月号

2010年6月20日発行

編集 大阪大学広報・社会学連携室

発行 大阪大学企画部広報・社会学連携事務室 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1

TEL: 06 (6879) 7017 FAX: 06 (6879) 7156

ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp/>

「阪大 NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。

E-mail: ki-kousyagaku-kouhou@office.osaka-u.ac.jp